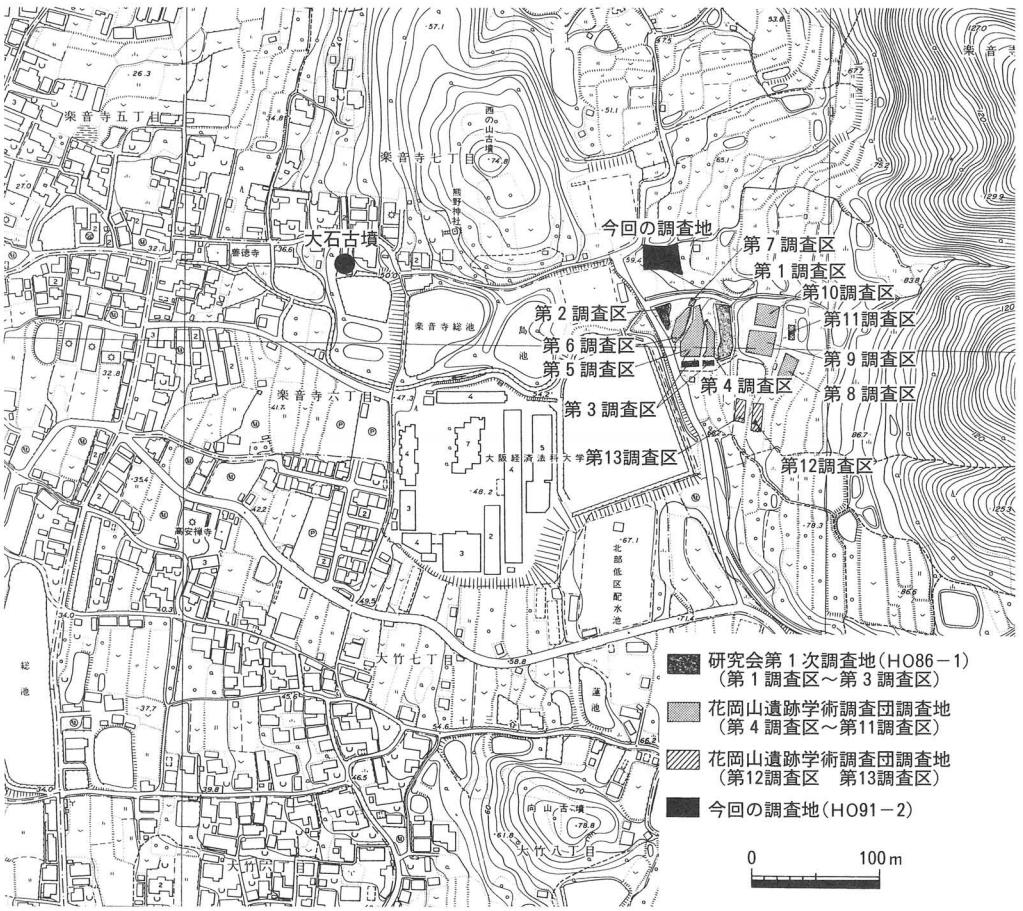
第１章　はじめに

花岡山遺跡は、八尾市北東部にあたる楽音寺一帯に所在しており、地理的には、生駒山地の西側斜面にあたる。この生駒山地西麓一帯は、遺跡の密集する地帯として知られているところである。この付近で最古に遡ることのできる遺跡は、当遺跡の西～南西に位置する大竹遺跡・水越遺跡・恩智遺跡などで、各遺跡からは、縄文時代前期～晩期の土器・石器が出土している。これらの遺跡では、その後の弥生時代から古墳時代を通じての遺構・遺物も検出されており、水越遺跡には玉造工房のあったことが明らかになっている。また、西の山古墳、花岡山古墳（消滅）、向山古墳、心合寺山古墳、愛宕塚古墳、群集墳である高安千塚などの古墳が当遺跡周辺に造営されているほか、当調査地西250ｍには、発掘調査によって検出された大石古墳がある。歴史時代の遺跡には、心合寺跡、高安寺跡、大光寺跡などをはじめとする多くの寺院跡があり、平安時代後期の瓦窯である向山瓦窯がある。



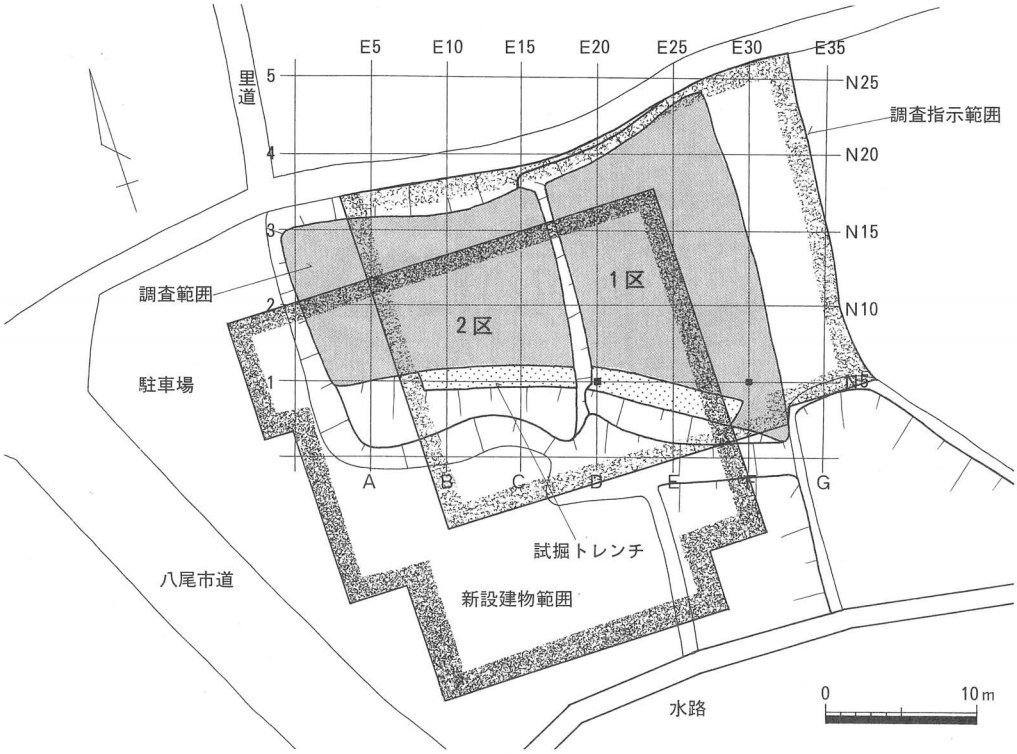
第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１/6000）

第２章　調査の方法と経過

今回の調査は学校施設建設に伴うもので、昭和61年度から62年度に、花岡山学術調査団・当調査研究会が当遺跡内で実施した発掘調査地の北隣に位置する。

建設予定地の現状は、東が高く西が低い３段のテラス状を呈しており、西側の最下段は既に造成され、駐車場となっている。このうち、調査対象となったのは、中央部と東側の２段分である。ここは、草木・竹がしげっていたため、事前に草刈り・伐採作業を行い、その後、発掘調査を行うこととした。

前述のように、調査地は上下２段に分かれているため、上段を１区、下段を２区と呼び、上段から調査を行った。掘削に際しては、試掘調査の結果に従って、まず、表土・旧耕土等（第１層～第４層）を重機によって掘削し、以下に堆積する中世から近世にかけての遺物包含層（第５層・第６層）を人力によって掘削し、ついでその下に堆積する中世の遺構面（第７層・第８層）上面で、遺構・遺物の検出に努めた。機械掘削は平成３年７月３日から開始し、翌７月４日に終了した。１区は７月４日から人力掘削を開始し、７月16日に調査を終了した。２区は７月９日から人力掘削を開始し、７月24日にすべての調査を終了した。



第２図　調査区設定図（Ｓ＝１/500）

第３章 調査概要

第１節　地区割り

地区割りは、八尾市教育委員会の試掘調査の際のポイント杭と敷地境界の杭を利用し、そこから東西・南北に５ｍごとの点を設けて５ｍ四方の小地区を設定した。東西・南北の各軸は、南西隅の交点を基準点（０）として、そこから５ｍごとに、東へアルファベットでＡ～Ｇとし、北へはアラビア数字で１～５と呼んだ。

小地区の名称は、各地区の北東隅交点を用いて「１Ａ地区」…「２Ｂ地区」……「５Ｇ地区」とした。

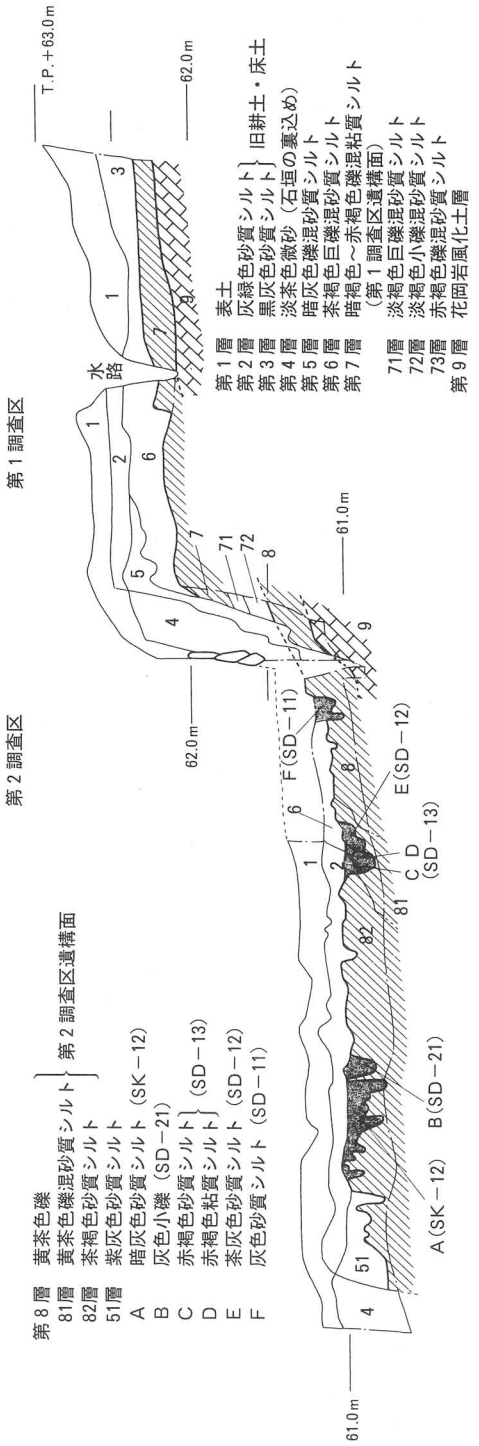
また地点は、基準点（０）から北・東への距離を利用し、たとえば基準点から北へ10ｍ・東へ15ｍの地点は、「N10・E15」と表示した。

第２節　基本層序

調査地の旧地形は、東から西へ下がる緩斜面を呈するが、近世から近代の開発や造成などによってかなりの改変をうけている。このため、両調査区で不安定な土層堆積状況を示しているが、おおむね以下の９層を基本層としてとらえることができた。

第１層：表土、調査区全体は厚さ0.2～0.6ｍの腐植土層で覆われている。現地表面の標高は、１区がT.P.＋62.2～62.9ｍ、２区がT.P.＋61.2～61.5ｍで、約１ｍの段差がある。

第２層：灰緑色砂質シルト（層厚０～0.25ｍ）、旧耕土または床土と考えられる土層で、１区の北東部では認められなかった。



第３図　調査区北側壁面図
（Ｓ＝水平１/200・垂直１/50）

第３層：黒灰色砂質シルト（０～0.25ｍ）、１区の北東部にのみ堆積しており、第２層とともに旧耕土を構成するものと考えられる。

第４層：淡茶色微砂（０～0.8ｍ）、両調査区の西端にある石垣の裏込めである。

第５層：暗灰色または紫灰色礫混砂質シルト（０～0.35ｍ）、両調査区の西端、第３層の直下、中世の遺構面を切る段の上部に堆積する。１区では暗灰色、２区では51層紫灰色を呈する。

第６層：茶褐色巨礫混砂質シルト（０～0.35ｍ）、１区の西側から２区にかけて堆積している土層で、中世から近世にかけての遺物の小破片を若干含んでいる。

第７層：暗褐色～赤茶色礫混粘質シルト（0.2～0.3ｍ）、１区では、この層上面で主に中世の遺構を検出した。東部では第３層旧耕土直下に、１区西部および２区では第６層の下に堆積している。この層上面の標高は、T.P.＋62.1～62.3ｍである。これ以下には、西部で褐色系の礫混砂質シルト(71～72層）が0.6～0.7ｍの厚さで堆積している。

第８層：黄茶色礫（0.2～0.3ｍ）、81層黄茶色礫混砂質シルト（層厚0～0.3ｍ）、82層茶褐色砂質シルト（0.15ｍ以上）がみられる。２区の遺構面を構成する土層で、主に東部では第８層、西部では82層が堆積している。この層上面の標高は、T.P.＋60.7～61.3ｍである。これ以下では、両調査区とも、花崗岩の風化土層である巨礫じりシルトが0.5ｍ以上堆積している（第９層)。

第３節　検出遺構と出土遺物

両調査区では、表土・旧耕土直下で、近世のすき溝を多数検出し、以下の第７層・第８層上面では、中世の土坑15基（ＳＫ－１～ＳＫ－15)、小穴22個（ＳＰ－１～ＳＰ－22)、落ち込み２か所（ＳＯ－１・ＳＯ－２）を検出した。

近世のすき溝は、１区では、南北方向のもの９条（ＳＤ－１～ＳＤ－９）・東西方向のもの１条（ＳＤ－10)、２区では南北方向のもの10条（ＳＤ－14～ＳＤ－23)、東西方向のも１条（ＳＤ－24）があり、複雑に切りあったり、交差したりしている（付表１・２　検出遺構一覧表参照)。また、２区の溝ＳＤ－11～ＳＤ－13は、他の溝よりも規模が大きく、すき溝ではなく、区画の溝、水路としての機能を有するものと考えられる。

ここでは、下層遺構のみを記述することとし、上層遺構については表のみの記載にとどめる。

１）１区の概要

１区の遺構面の標高は、T.P.＋62.2～62.3ｍを指し、北東が高く南西が低くなっている。調査区中央部の３Ｄ・２Ｅ・１Ｅ地区（Ｎ16・Ｅ22地点からＮ０・Ｅ28地点）にかけては、南北方向のにぶい段があり、西へ５～10cm程度下がっている。この段は、中世以降近代までの土地区画の段と考えられ、当時は現在よりも狭い区画内で農耕が行われていたものと推定される。

なお、この付近には調査直前まで南北方向の溝があったようである。

この段より西側では近世のすき溝は残っておらず、上層の堆積土も東部は第３層黒灰色砂質シルト、西部は第６層茶褐色巨礫混砂質シルトと、異なっている。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

調査区の東端、３Ｆ地区で検出した。上面の形状は南北に長い方形で、長辺（南北）1.4m・短辺（東西）1.1m・深さ0.18mを測る。断面の形状は、北から西にかけてにぶい二段の掘り形をもち、底部は平坦である。

内部には、上方から１層赤茶色礫混砂質シルト、２層灰緑色礫混砂質シルト、３層赤灰色礫混砂質シルトがブロック状に堆積し、南側の斜面から底部にかけては、４層植物遺体を含む灰色粘土が堆積している。

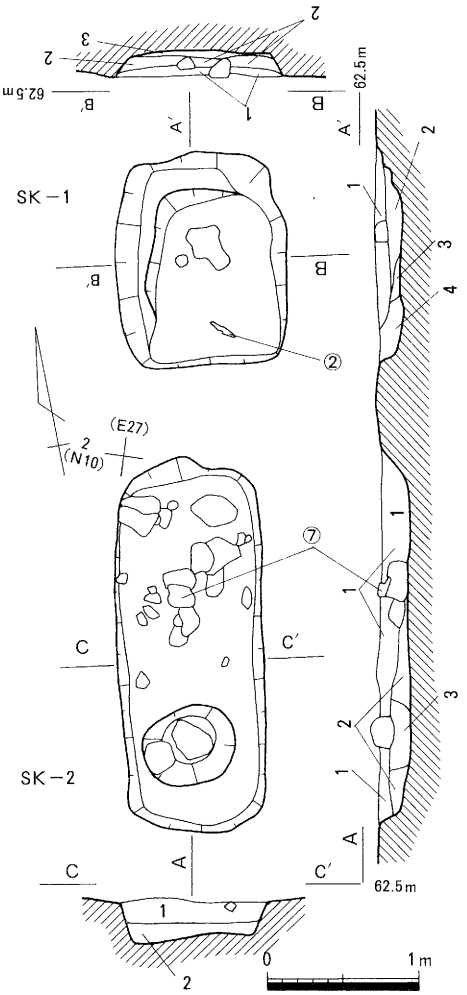
２層から、円板形土製品（１）、瓦釘（２）のほか、瓦器、陶器（美濃焼？）、瓦の小破片などが出土している（第６図）。また、ほぼ中央部には人頭大の花崗岩があり、それ以外にも拳大の自然石が数個認められた。

円板形土製品（１）は、平瓦の転用品で、直径７㎝・厚さ1.6㎝前後を測る大型のものである。円形に粗く割り取った後、周縁部を粗く削っている。

瓦釘（２）は先端部のみ欠損するもので、体部の長さ19.7㎝・幅1.4㎝・厚み1.0㎝、頭部の長さ1.0㎝・幅0.9㎝・厚み1.0㎝を測る。酸化が進んでおり、遺存状態はやや悪い。

ＳＫ－２

調査区の東端、２Ｆ地区で検出した。ＳＫ－１の南約0.8m程度に位置し、長軸はＳＫ－１の長軸に揃っている。上面の形状は南北に長い長方形で、長辺（南北）2.35m・短辺（東西）1.0m・深さ0.16mを測る。断面の形状は浅め



1．赤茶色礫混砂質シルト
2．灰緑色礫混砂質シルト　ブロック層
3．赤灰色礫混砂質シルト
4．灰色粘土（植物遺体含む）
※丸数字は遺物番号

第４図　ＳＫ－１・ＳＫ－２平断面図

の逆台形で、底部は平坦である。

内部には、ＳＫ－１と同じくブロック層である１層赤茶色礫混砂質シルト、２層灰緑色礫混砂質シルトが堆積しており、最下層には一辺30～40cm程度の切石が数個散乱していた。また、南側には、２層上面から切り込む小穴（径0.45ｍ）があり、その上には人頭大の花崗岩が置かれていた。小穴の内部堆積土は３層赤灰色礫混砂質シルトで、須恵質土器または瓦質土器の小破片が数点含まれていた。

２層内からは、刀子２点（３・４）、瓦質土器すり鉢（５）・甕（６）、平瓦（７）、土師器鉢、瓦器椀などのほか、底部からスサや焼土塊などがごく少量出土している（第６図）。

刀子（３）は先端部まで遺存するもので、現存長13.1cm・最大幅1.3cm・厚さ0.5cmを測る。刀子（４）は２分の１程度が欠損するもので、現存長8.1cm・最大幅1.1cm・厚さ0.6cmを測る。

瓦質土器すり鉢（５）には、８本/2.4cmのすり目が遺存しており、内面に炭化物が付着している。瓦質土器甕（６）は底径30.2cmを測る大型のものである。

平瓦（７）は側面を残す破片で、凹面はヘラナデ、凸面には離れ砂の付着がみられる。側面幅2.0cm、厚さ2.6～3.0cmを測る。

ＳＫ－３

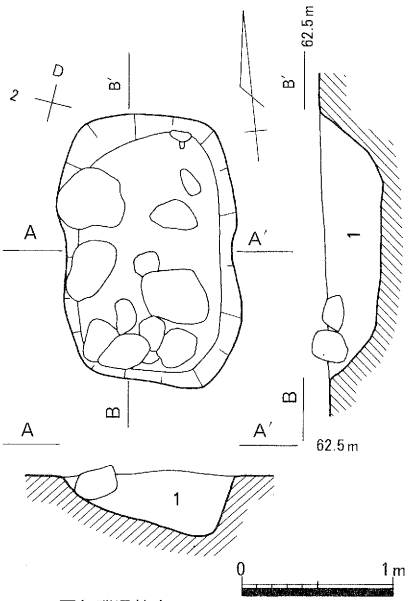
調査区北西部の２Ｅ地区、ＳＫ－１の西5.5ｍ付近で検出した。長軸の方向は、ＳＫ－１・ＳＫ－２とほぼ同方向である。上面の形状は南北に長い隅丸方形で、長径（南北）1.7ｍ・短径（東西）1.1ｍ・深さ0.4ｍを測る。断面の形状は半円形で、底部は西下がりである。

内部には灰色礫混粘土が堆積しており、人頭大から一辺40～50cm程度の切石が10数個、雑然とした状態で埋まっていた。

ＳＫ－４

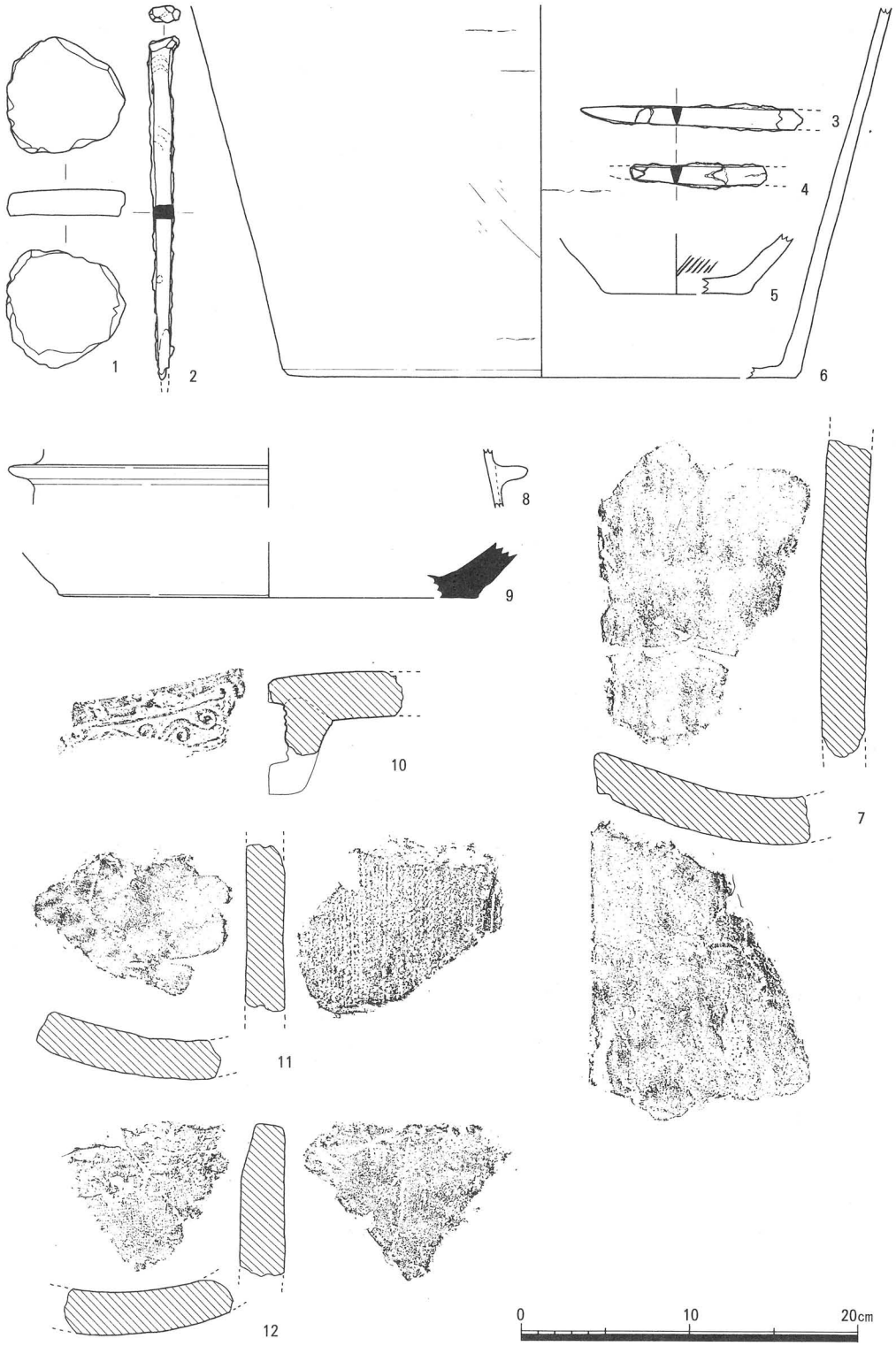
調査区の西端中央部、２Ｄ～３Ｄ地区で検出した。西側は近世～近代の造成の際に削られており、現状での上面の形状は、直径2.4ｍ程度の半円形を呈し、中央東部に直径0.8ｍ程度の円形の掘り込みがある。上段の深さは0.15ｍ・下段の深さは0.2ｍを測る。下段の肩には、径10cm前後の石がほぼ円形に並んでいた。

内部には茶褐色砂混粘質シルトが堆積しており、土師器羽釜（８）、備前焼すり鉢（９）、瓦質土器大型甕などのほか、軒平瓦（10）・平瓦



1．灰色礫混粘土

第５図　ＳＫ－３平断面図



第６図　ＳＫ－１（１・２）・ＳＫ－２（３～７）・ＳＫ－４（８～12）出土遺物実測図

(11・12) などの小破片がごく少量出土している(第6図)。

軒平瓦 (10) は、顎の下部を欠損しており、外区・脇区は素文、1条の界線で内区と画されている。内区の文様は均整唐草文で、復元すれば、中心飾りから葉先が4回転するものと考えられる。平瓦部の凸面には、やや細かい布目痕(8～9目/1㎠) と離れ砂の痕跡が認められる。瓦当部と平瓦部の接合は、平瓦部の先端を斜めに切り、瓦当部分を圧着している。現存する瓦当部の幅5.9㎝・長さ3.2㎝、平瓦部の厚さ1.4㎝を測る。平瓦 (11) は側面をわずかに残すもので、側面幅1.8㎝を測る。凹面はナデ、凸面に縄目タタキ(5条/1㎝)がみられる。平瓦 (12) は狭端面を残すもので、狭端面の幅1.4㎝、水切りは幅2.9㎝で面取りされている。凹面・凸面ともに布目痕があり、凹面は7目/1㎠、凸面は11目以上/1㎠である。

落ち込み (SO)

SO－1

調査区の南西隅、1C・1D地区で検出した。前述のように、西部は近世から近代にかけて削られていることから不明瞭な部分が多いが、旧地形にかかわるものか、半径0.8m程度の範囲で遺構面が南西へ下がっているのを確認した。ここからは、土師器や瓦器などの小破片がごく少量出土している。

2) 2区の概要

2区の遺構面の標高はT.P.＋60.7～61.3mを指し、ここでも北東が高く南西が低くなっている。1区同様、現在よりも狭い幅で整地されており、近世までの土地区画が窺える。調査区東部では、1C地区～2C地区のN10・E10地点からN1.8・E14地点にかけてのSD－12・SD－13を境として西へ一段下がっており、調査区西端の1A地区～2A地区のN9・E2地点からN0.5・E3.5地点にかけては、急激に落ち込んでいる。

1区同様、段を挟んで堆積土にも違いがあり、近世の溝SD－12・SD－13より東側の遺構ベースは第8層黄茶色礫、西側は82層茶色砂質シルト、遺構ベース上層の堆積土もSD－12・SD－13より東側は第6層茶褐色巨礫混砂質シルト、西側は第2層灰緑色砂質シルト、西端の段の上部の堆積土層は51層紫灰色砂質シルトである。

土坑 (SK)

SK－5

調査区南東隅1D地区で検出したもので、南半分は八尾市教育委員会の試掘調査の際に検出されていたものである。

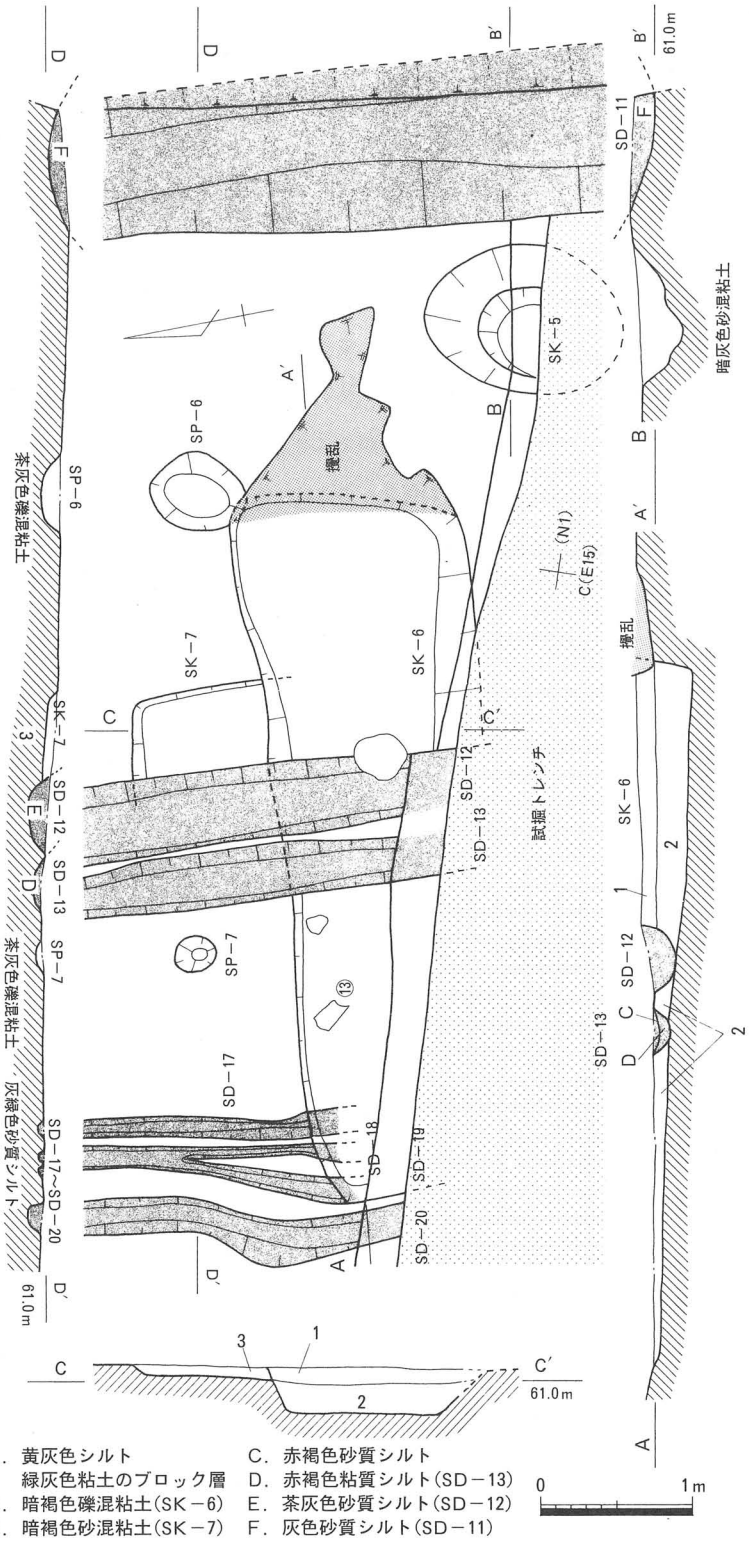
上面の形状は南北にやや長い楕円形で、長径 (南北) 1.3m・短径 (東西) 1.2m・深さ0.3mを測る。断面の形状は二段の掘り形をもち、逆凸字形を呈する。内部には暗灰色砂混粘土が堆積している。今回の調査で遺物の出土はなかったが、試掘調査では、中世の土師器羽釜片が1

点出土している。

ＳＫ－６

調査区南東部１Ｃ～１Ｄ地区で検出した。中央部はＳＤ－12・ＳＤ－13が横断し、西端はすき溝ＳＤ－18～ＳＤ－20で上部を削平され、東部には現代の攪乱がある。また、北東の端にはＳＰ－６があり、北端でＳＫ－７の南辺を切っている。南側は調査区外に至るが、試掘調査では検出されていないことから、上面の形状は、おおむね東西に長い長方形～台形を呈するものと思われる。断面の形状は逆台形を呈し、底部は東下がりで平坦である。規模は、長辺（東西）4.5m・短辺（南北）1.5m・深さ0.05～0.4mを測る。

内部堆積土は、上層の１層黄灰色シルトと緑灰色粘土のブロック、下層の２層暗褐色礫混粘土からなり、２層から土師器甕・羽釜、瓦質土器すり鉢（14）、軒丸瓦（13）などがごく少量出土している（第13図）。



1．黄灰色シルト
　緑灰色粘土のブロック層
2．暗褐色礫混粘土(SK－6)
3．暗褐色砂混粘土(SK－7)
C．赤褐色砂質シルト
D．赤褐色粘質シルト(SD－13)
E．茶灰色砂質シルト(SD－12)
F．灰色砂質シルト(SD－11)

第７図　ＳＫ－５～ＳＫ－７・ＳＰ－６・ＳＰ－７・ＳＤ－11～ＳＤ－13・ＳＤ－17～ＳＤ－20平断面図　＊丸数字は遺物番号

軒丸瓦（13）は、瓦当部の外区内縁のみをわずかに残すもので、珠文３個および外縁との境界線の部分のみ遺存する。凸面には幅1.3㎝～2.1㎝のヘラナデ、凹面には布目痕がみられる。瓦当部の最大幅5.4㎝、平瓦部の厚さは3.6㎝を測る。

瓦質土器すり鉢（14）のすり目は８本/2.7㎝２単位分が遺存している。

ＳＫ－７

調査区南東部の１Ｃ地区、ＳＫ－６の北隣で検出した。西側はＳＤ－12・ＳＤ－13に、南側はＳＫ－６に切られているため、全容は明らかでない。

検出部での上面の形状は南北に長い長方形、断面の形状は逆台形を呈し、底部は平坦である。検出部での規模は、長辺（南北）0.8ｍ・短辺（東西）0.5ｍ・深さ0.12ｍを測る。

内部堆積土は３層暗褐色砂混粘土で、遺物は出土していない。

ＳＫ－８

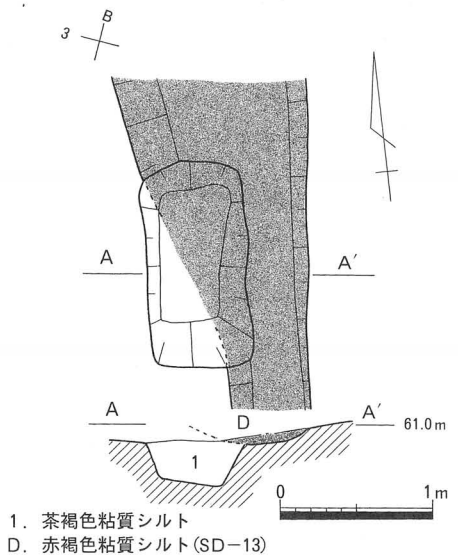
調査区中央北端、２Ｃ地区で検出した。上面の南東から北西にかけての２/３程度は、ＳＤ－12・ＳＤ－13に切られている。

上面の形状は南北に長い長方形で、長軸の方向はＳＫ－１～ＳＫ－３にほぼ一致している。断面の形状は逆台形を呈し、底部は東下がりで直線的である。規模は、長辺（南北）1.3ｍ・短辺（東西）0.65ｍ・深さ0.35ｍを測る。内部堆積土は茶褐色粘質シルトで、遺物は出土していない。

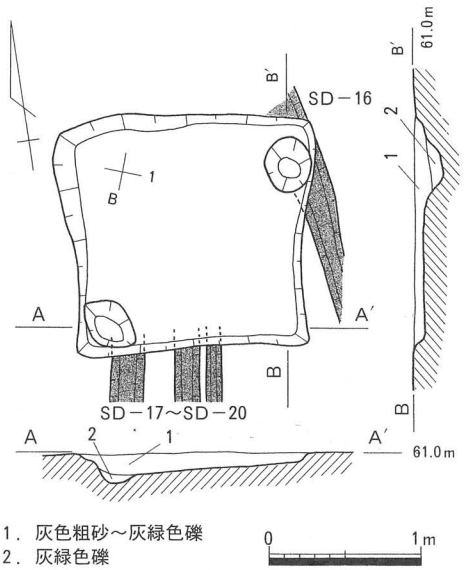
ＳＫ－９

調査区のほぼ中央部１Ｂ・２Ｂ・１Ｃ・２Ｃ地区で検出した。東部をすき溝ＳＤ－16、西部をすき溝ＳＤ－17～ＳＤ－20で削られている。

上面の形状は、南北に軸をもつ一辺1.5ｍ程度の方形で、深さは0.15ｍを測る。底部は平坦で、北東隅・南西隅には、径0.3～0.4ｍ・深さ0.15ｍ程度の小穴がある。土坑の内部堆積土は



第８図　ＳＫ－８平断面図



第９図　ＳＫ－９平断面図

１層灰色粗砂～灰緑色礫で、小穴の内部は２層灰緑色礫のみで充填されている。

出土遺物は釘（15）のほか、土師器羽釜片、瓦質すり鉢片が１点ずつ出土している（第13図）。

釘（15）は先端部・頭部が欠損する小型のもので、現存長6.2㎝・幅0.6㎝・厚さ0.4㎝を測る。錆の付着が著しく、詳細は不明である。

ＳＫ－10

調査区の東部中央、２Ａ地区で検出した。上面の形状は南北に長い隅丸方形で、長径（南北）1.15ｍ・短径（東西）0.9ｍ・深さ0.13ｍを測る。東辺の中央には、ＳＰ－16が掘り込まれている。内部堆積土は、１層暗茶灰色礫混砂質シルト、２層灰色礫混砂質シルトで、２層上面には炭が薄く堆積していた。

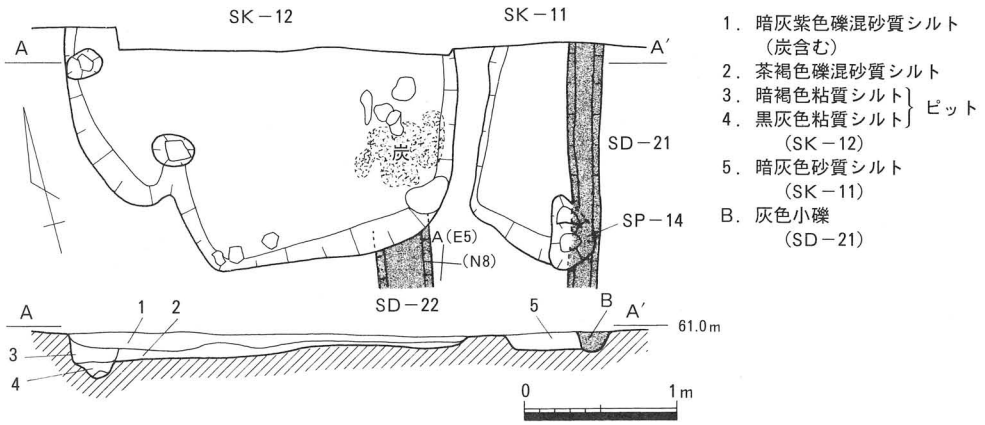
ＳＫ－11

調査区北端西側、２Ｂ地区で検出した。東辺はすき溝ＳＤ－21、南東隅はＳＰ－15と重複しているため、全容は明らかではないが、南北に長い長方形を呈するものと考えられる。検出部での法量は、長辺（南北）1.25ｍ・短辺（東西）0.5ｍ・深さ0.11ｍを測る。内部堆積土は５層暗灰色砂質シルト１層のみで、土師器皿（16）が出土している（第13図）。

土師器皿（16）は口径12.4㎝を測る中型・厚手の皿で、強いヨコナデにより、口縁部と体部の間に鋭い段が一周する。

ＳＫ－12

調査区北西部の２Ａ地区、ＳＫ－11の西隣で検出した。上面の形状は、径または一辺2.5ｍ程度の隅丸方形から円形と考えられる。断面の形状は浅い半円形で、深さ0.1ｍを測る。底部は平坦で、西部にピット状の窪みを２個伴っている。内部堆積土は、上層の１層炭を少量含む暗灰紫色礫混砂質シルト、下層の２層茶褐色礫混砂質シルトで、東端の２層上面では、炭のみが固まって薄く堆積している部分がある（第10図－網かけ部分）。



第10図　ＳＫ－11・ＳＫ－12・ＳＰ－14・ＳＤ－21・ＳＤ－22平断面図

ピット状の窪みは2層上面から掘り込まれているようで、上面の形状は東西方向に長い楕円形、断面の形状は逆凸字形を呈する。規模は長径（東西）0.25～0.3m・短径（南北）0.2m前後・深さ0.25cmを測る。内部には、上から3層暗褐色粘質シルト・4層黒灰色粘質シルトが堆積しており、底には切石が置かれている。1層中から、土師器小皿（17～19）・鉢・甕・羽釜（23）、須恵器こね鉢（22）・甕、瓦器椀（20・21）・皿などが比較的多量に出土しているほか、肩から底部にかけて拳大から人頭大の石が散乱している（第13図）。

土師器小皿には、半球形で口縁端部を上方へ丸くおさめるもの（17）、半球形で口縁部が尖り気味になるもの（18）、浅くて直線的な体部から口縁部をつまみ上げるもの（19）がある。瓦器椀（20・21）はともに外面に指頭圧痕を残す粗雑なつくりのもので、内面のヘラミガキも簡略されている。こね鉢（22）は須恵質であるが、焼成不良のためか淡黄褐色を呈している。土師器羽釜（23）は鍔径38.5cm・鍔の厚み1.4cmを測る大型のもので、鍔裏面には煤が厚く付着する。

ＳＫ－13

調査区北西端の2Ａ地区、ＳＫ－12の西隣で検出した。南側をＳＫ－14、上部のほとんどを段で、西端をＳＤ－23で切られているためにやや不明瞭ではあるが、上面の形状は東西に長い長方形を呈するものと思われる。肩は直線的に掘られ、底部は平坦である。検出部での規模は長辺（東西）1.7m・短辺（南北）1.0m・深さ0.3mを測る。

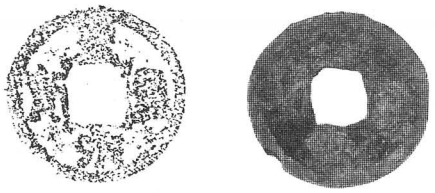
内部堆積土は灰色礫混砂質シルトで、内部から土師器甕、須恵器甕、瓦器椀・皿などの小破片が少量出土しているほか、土坑掘削時または埋め戻し時点の混入遺物に、弥生時代後期の高杯（55）がある（第15図）。

ＳＫ－14

調査区西端の2Ａ地区、ＳＫ－13の南隣で検出した。ＳＫ－13同様西側は段で、西端はＳＤ－23で切られており、北側でＳＫ－13を切り、南側ではＳＫ－15に切られている。検出部での上面の形状は南北にやや長い方形を呈し、肩は直線的に掘られ、底部は平坦である。検出部での規模は、長辺（南北）1.4m・短辺（東西）1.15m・深さ0.48mを測る。

内部堆積土はＳＫ－13と同じく灰色礫混砂質シルトで、底部には、人頭大の石が数個散乱していた。内部から、土師器甕、瓦器椀・皿、瓦質土器すり鉢の小破片がわずかに出土したほか、宋銭が1枚出土している（第11図）。

宋銭は「皇宋通寶」で、銭径は2.4cm前後、内径2.0～2.1cm、厚さ0.1cm弱を測る。初鋳は1038年、字体は真書である。



第11図　ＳＫ－14出土遺物拓本・写真（Ｓ＝1/1）

ＳＫ－15

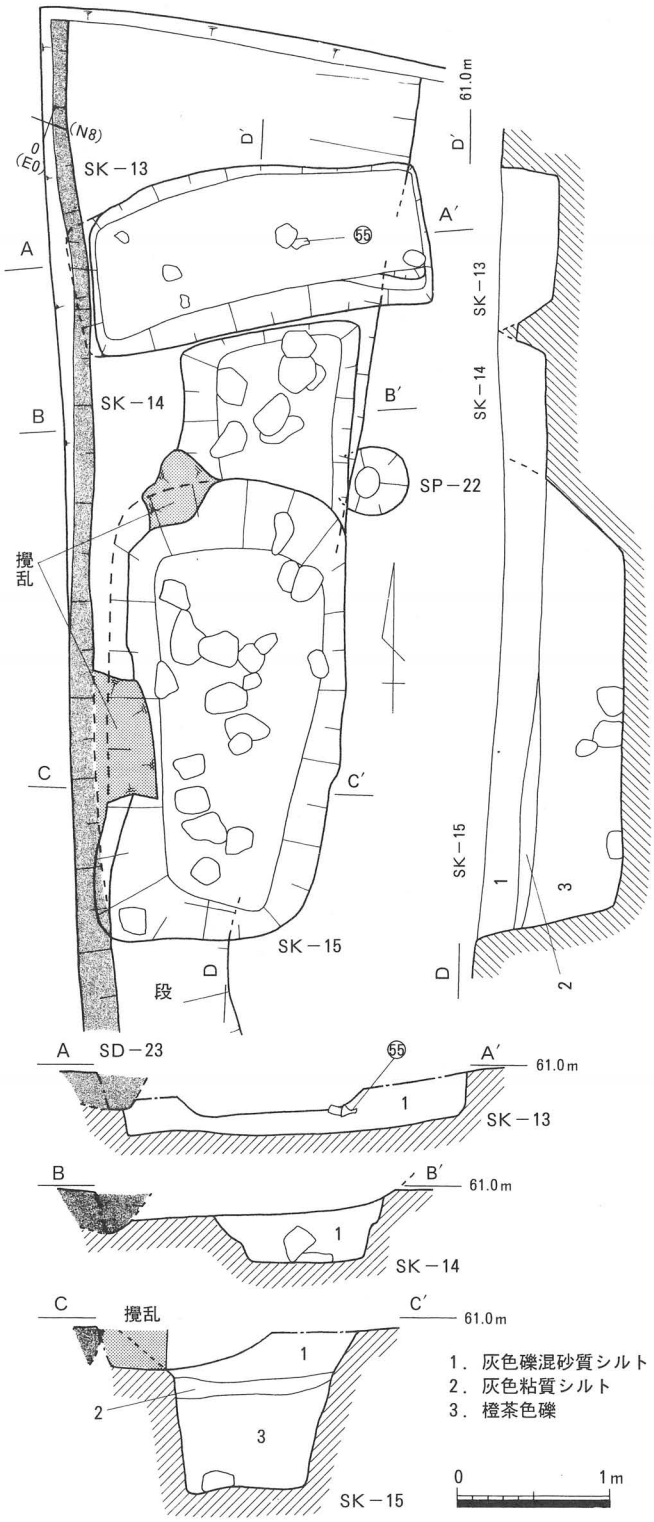
調査区西端中央部の１Ａ・２Ａ地区、ＳＫ－14のさらに南で検出した。ＳＫ－14を切って構築されている。先の２つの土坑と同様、段やＳＤ－23で切られ、旧状はとどめていない。

上面の形状は南北に長い隅丸方形で、肩は直線的に掘られている。断面の形状は逆台形を呈し、底部は平坦である。検出部での規模は、長辺（南北）3.01ｍ・短辺（東西）1.55ｍ・深さ1.0ｍを測る。

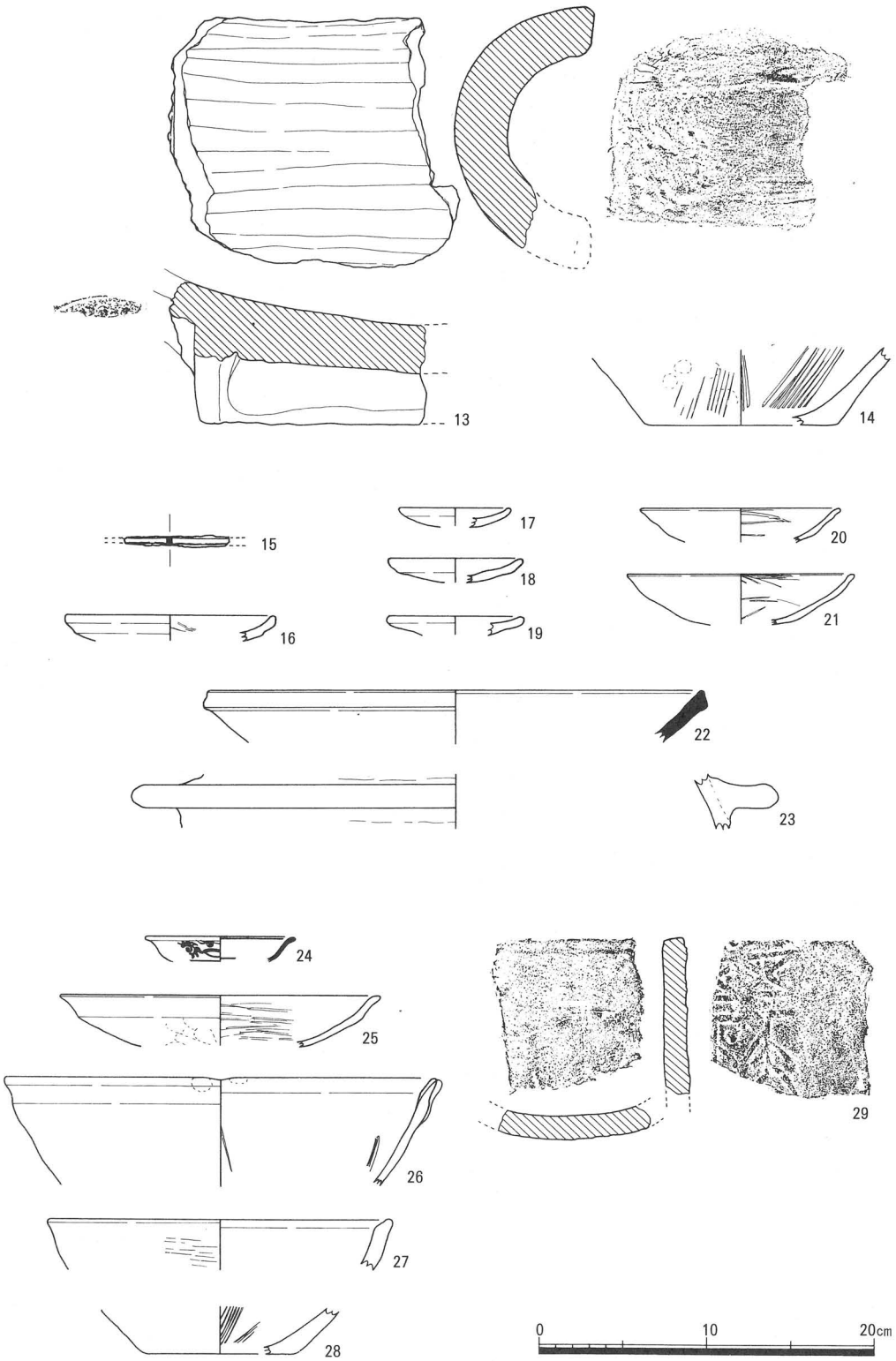
内部堆積土は、上層から１層灰色礫混砂質シルト、２層灰色粘質シルト、３層橙茶色礫で、底部には人頭大の石が10数個散乱していた。

１層から、輸入白磁小皿(24)、土師器杯・皿・鉢・甕、須恵質土器甕、瓦器椀(25)・小皿、瓦質すり鉢(26～28)、陶器、平瓦(29) などの小破片が比較的多量に出土しており、スサや焼土塊が多く認められた(第13図)。

輸入白磁小皿(24)は口径8.9㎝を測るもので、体部外面には２条の圏線間に草花文、口縁部内面に２条の圏線をめぐらせる。根来寺坊院跡からやや大型の類似資料が出土している。



第12図　ＳＫ－13～ＳＫ－15平断面図
※丸数字は遺物番号



第13図　ＳＫ-６(13･14)・ＳＫ-９(15)・ＳＫ-11(16)・ＳＫ-12(17～23)・ＳＫ-15(24～29)出土遺物実測図

瓦器椀（25）は外面に指頭圧痕を残し、口縁部が外反気味になるもので、内面には粗雑なヘラミガキが施されている。口径は18.4cmと大型に復元しているが、いびつな器形を呈しているものと思われる。瓦器すり鉢（26）は大型のもので、口縁部には指でつまみ出したような小さい注ぎ口があり、すり目は２本/0.7cmを一単位として、粗く施されている。瓦質土器の鉢口縁部（27）と底部（28）は同一個体と考えられるもので、ともに内面に炭化物が付着している。

平瓦（29）は狭端面を残すもので、凸面には×印と木葉状の文葉を組み合わせた凸線のタタキ文様が施されている。タタキ文様の幅は約３cm、狭端面幅1.1cm、水切り幅0.8cmを測る。

落ち込み（ＳＯ）

ＳＯ－２

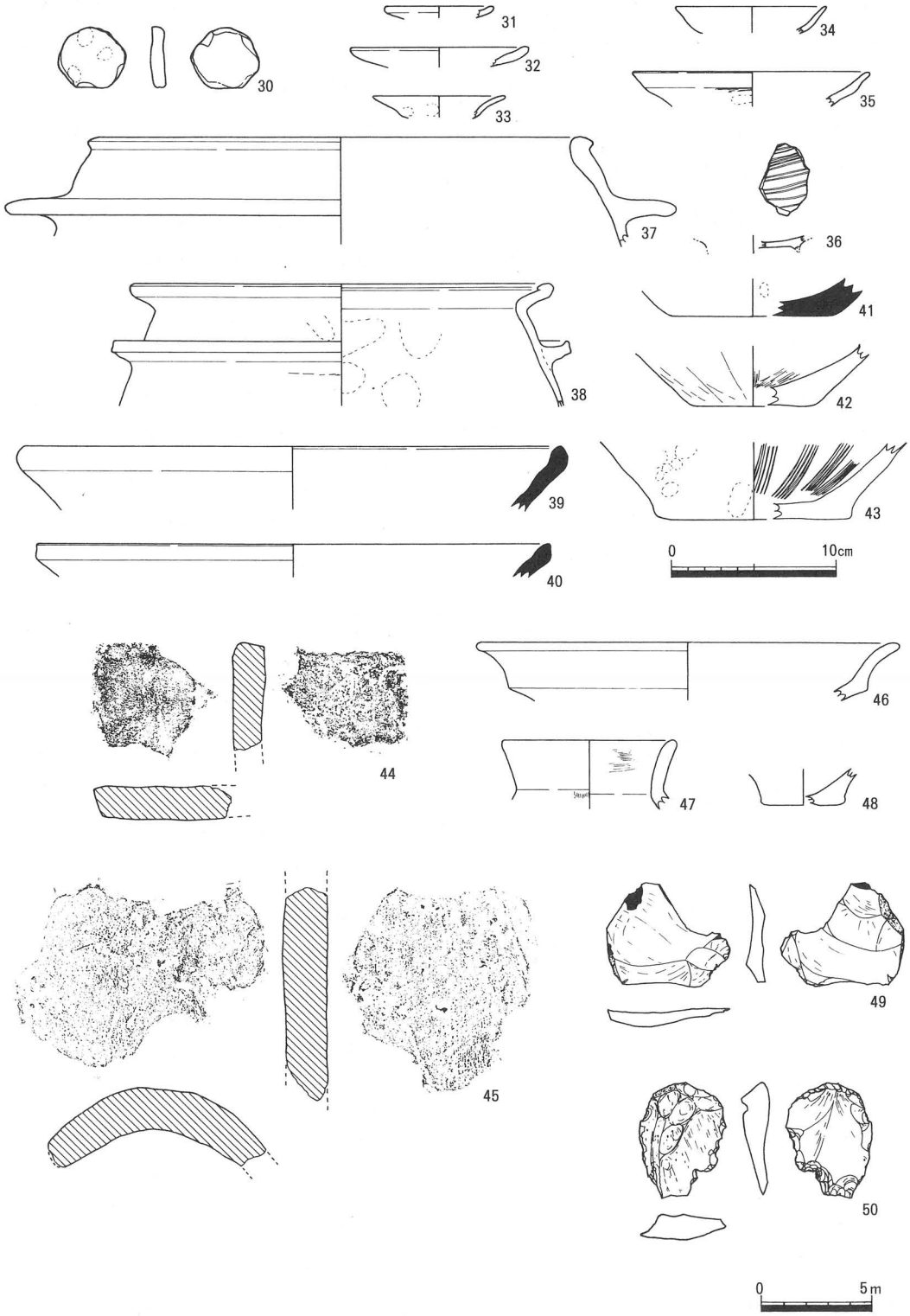
調査区の南部中央、１Ｂ地区で検出した。径1.9m程度の円形を呈するものと考えられる。断面の形状は半円形で、内部堆積土は１層黒灰色礫混砂質シルト、２層茶色小礫である。

出土遺物は比較的多く、１層から土師器杯・小皿・鉢・羽釜、須恵質土器こね鉢・甕、瓦器椀・小皿・瓦質土器すり鉢・羽釜、備前焼すり鉢、土師器転用の円板形土製品、平瓦・丸瓦などが出土している。そのほか、掘削時の混入と考えられる遺物に、弥生時代中期～後期の土器やサヌカイト剥片、古墳時代前期の土師器・古墳時代中期の須恵器・製塩土器などが少量出土している（第14図）。

円板形土製品（30）は径4.0cm・厚さ0.9cm前後で、土坑ＳＫ－１出土のもの（第６図－1）より小型である。（１）同様周縁を削るもので、外面に指押さえの圧痕、内面にヘラケズリが認められ、土師器甕体部片を転用したものであろう。

土師器小皿（31～33）には、半球形のもの（31・32）と口縁部が外反気味に開くもの（33）がある。瓦器小皿（34）は深めの半球形を呈するもので、炭素吸着不良のためか白灰色を呈する。瓦器椀（35）は体部外面に指押さえの圧痕を残し、粗雑なヘラミガキを行うもので、（36）は見込みに平行またはジグザグ状の暗文状ヘラミガキを施している。高台は断面三角形を呈し、小型で低い。羽釜（37・38）はともに土師器で、前者は口径28.8cmの大型品で器壁も厚い。後者は口径25.2cmの中型品で、器壁も薄く硬質で、新旧の時期差がみられる。須恵質土器こね鉢（39～41）の口縁部には丸みをもって立ち上がる（39）と外傾気味の面を持つ（40）があり、底部（41）は丸みのある器形を呈している。瓦質土器すり鉢(42・43)のすり目は、(42)が10本/1.5cmで３単位分、(43)が６本/1.4cmが９単位分残存しており、使用痕も顕著に認められる。

平瓦（44）は狭端面と左側面をわずかに残すもので、凹面はナデ、凸面は布目タタキの後ナデですり消し、両面ともに平滑に仕上げられている。狭端面幅1.7cm・水切り幅0.8cm・左側面幅2.1cmを測る。丸瓦（45）は凸面は布目タタキ、凹面は布目痕（14目/cm²）の後ナデで仕上げられている。側面のヘラ切り幅は2.2cmを測る。



第14図　ＳＯ－２出土遺物実測図（石製品Ｓ＝１/３）

弥生土器（46～48）は、いずれも褐色系の色調を色調を呈し、胎土に角閃石を多く含むいわゆる生駒西麓の土器である。高杯(46)は杯底部から外反して開く口縁部に至るもので、器肉が厚く、深めで大型の器種である。短頸壺(47)は体部から丸く屈曲し、外傾して開く口縁部に至る小型のものである。甕底部（48）は体部からわずかに突出する底部に至るもので、中央部は欠損・剥離しているため不明瞭であるが、有孔の可能性もある。

サヌカイト剥片(49)は背面左側縁～下縁に礫面を残し、両面ともに粗い剥離が認められるもので、長さ4.6cm・幅5.6cm・厚さ0.9cmを測る。(50)は背面が礫面からなるもので、周縁には細かい剥離がみられる。長さ5.2cm・幅3.9cm・厚さ1.4cmを測る。

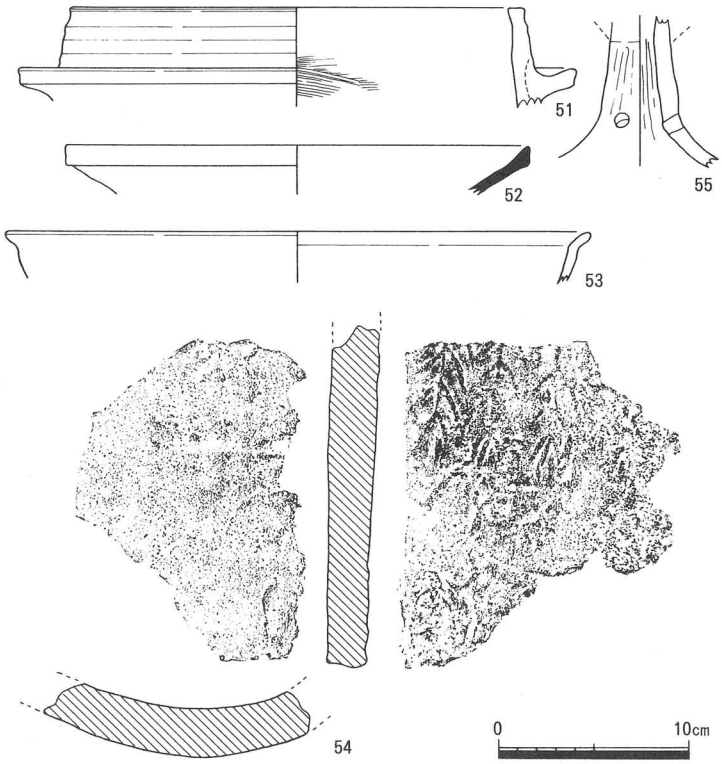
３）その他の出土遺物

１区・２区ともに第２層・第６層から、土師器・瓦器・須恵質・瓦質・陶磁器・瓦等の小片や焼土塊・スサなどが少量出土している。そのうち図示したものは第15図（51～55）である。

瓦質土器羽釜（51）は、内傾気味に立ち上がる口縁部に３段のヨコナデが施され、鍔はやや上向きに取り付く。須恵質土器こね鉢（52）は、器壁が薄く、口縁部はやや立ち上がり気味となり、上方へわずかに拡張する傾向にある。(53）は瓦質土器鉢で、口縁部と体部との境に沈線状の段をもち、短く開く口縁部に至るものである。

平瓦（54）は広端面を残すもので、広端面幅は2.2cmを測る。凹面はナデ、凸面は木葉文状の凸線のタタキ目の後ナデですり消している。タタキ文様の幅は約３cmで、ＳＫ－15出土の平瓦（第13図－29）と同タイプの文様であるが、（29）に比べて大型である。

高杯（55）はＳＫ－13から出土したもので、中空の柱状部からゆるやかに開く裾部に至り、屈曲部付近の３方に径0.8cmの円孔を穿つ。



第15図　その他の出土遺物実測図

第4章　まとめ

調査の結果、中世から近世にかけての土坑、落ち込み、溝などを検出し、当地においては、少なくとも3時期の遺構群が認められた。出土遺物は少量ではあるが、弥生時代～古墳時代中期のものから、11世紀代～16世紀代のものまでが含まれており、日常使用の雑器、供献用、輸入品、屋瓦などと雑多ものがみられる。

土坑については、そのほとんどが上面の形状や方向などに共通点があり、出土遺物からも同時期に同じ目的で構築されたものと考えられる。過去の調査結果から考えると13～14世紀代の土坑墓の可能性が高いが、その後の幾度かの開発で破壊されており、旧状は保っていない。小穴はほとんどが土坑を切って構築されていることから、墓坑を整理した後、建物が構築されていた可能性もある。日常雑器や屋瓦はほとんどが16世紀に下るものであることから、この開発はそれまでに行われたものであることがわかる。溝には、すき溝と水路等があるが、これらはいずれも旧耕土に伴うもので、17世紀以降のものであろう。

これらのことから、当地では、鎌倉時代の墓域が廃絶した後、室町時代の建物などがつくられ、その後、江戸時代になってから大規模な開発が行われ、現在あるような段々畑の景観を呈していたものと考えられる。

なお、鎌倉時代の居住域は、南東約100～150m地点（第2次調査－第8調査区・第9調査区）ですでに検出されており、今回それらに対応する墓域を検出したことによって、新たな知見が得られたといえる。

付表１　検出遺構一覧表（溝）

遺構名	地区	法量(cm) 幅	深さ	検出長	方向	内部堆積土 備　　考
ＳＤ－１ （すき溝）	１区 １Ｆ～２Ｆ	22～32	2.5	280	南北	第３層黒灰色砂質シルト
ＳＤ－２ （すき溝）	１区 １Ｆ～２Ｆ	23～30	1.4	330	南北	第３層黒灰色砂質シルト ＳＤ－３の南の延長
ＳＤ－３ （すき溝）	１区 ３Ｆ	20～33	5.7	350	南北	第３層黒灰色砂質シルト ＳＤ－２の北の延長、北端でＳＤ－10に切られる。
ＳＤ－４ （すき溝）	１区 １Ｆ～３Ｆ	31以上	4.3	1500	南北	第３層黒灰色砂質シルト 南部でＳＤ－５と合流し、北端でＳＤ－10に切られる。
ＳＤ－５ （すき溝）	１区 １Ｆ～２Ｆ	13以上	1.4	400 以上	南北	第３層黒灰色砂質シルト 南部でＳＤ－４と合流する。
ＳＤ－６ （すき溝）	１区 ３Ｅ	20前後	1.0	100	南北	第３層黒灰色砂質シルト 北端でＳＤ－10に切られる。
ＳＤ－７ （すき溝）	１区 ３Ｅ	20前後	1.9	65	南北	第３層黒灰色砂質シルト
ＳＤ－８ （すき溝）	１区 1F～3F・1G	20前後	4.5	1200	南北	第３層黒灰色砂質シルト 北部でＳＤ－９と合流する。
ＳＤ－９ （すき溝）	１区 1F～3F・1G	20前後	1.9	1170	南北	第３層黒灰色砂質シルト 北部でＳＤ－８と合流する。
ＳＤ－10 （すき溝）	１区 ３Ｅ・３Ｆ	20前後	1.8	150	東西	第３層黒灰色砂質シルト ＳＤ－３・ＳＤ－４・ＳＤ－６を切る。
ＳＤ－11	２区 1D～3D・3C	75～100	11.7	1350	南北	Ｆ層灰色砂質シルト 杭を伴う。６層上面からの切り込み。
ＳＤ－12	２区 １Ｃ・２Ｃ	33～50	16.3	870	南北	Ｅ層茶灰色砂質シルト 北部でＳＤ－13・ＳＫ－８を切る。
ＳＤ－13	２区 １Ｃ・２Ｃ	25～35	6.1	870	南北	Ｃ層赤褐色砂質シルト・Ｄ層茶灰色粘質シルト 北部でＳＤ－12に切られ、ＳＫ－８を切る。
ＳＤ－14 （すき溝）	２区 １Ｃ	15以上	3.5	100	南北	第２層灰緑色砂質シルト
ＳＤ－15 （すき溝）	２区 １Ｃ・２Ｃ	15～32	1.6	200	南北	第２層灰緑色砂質シルト
ＳＤ－16 （すき溝）	２区 １Ｃ・２Ｃ	15～25	2.1	250	南北	第２層灰緑色砂質シルト 北端でＳＫ－９を切る。
ＳＤ－17 （すき溝）	２区 １Ｃ	10～15	5.2	190	南北	第２層灰緑色砂質シルト 南端でＳＫ－６、北端でＳＫ－９を切る。
ＳＤ－18 （すき溝）	２区 １Ｃ	5	3.2	190	南北	第２層灰緑色砂質シルト 南端でＳＫ－６、北端でＳＫ－９を切る。
ＳＤ－19 （すき溝）	２区 １Ｃ	5～20	3.2	200	南北	第２層灰緑色砂質シルト 南端でＳＫ－６、北端でＳＫ－９を切る。
ＳＤ－20 （すき溝）	２区 １Ｃ	20～30	11.1	220	南北	第２層灰緑色砂質シルト 南端でＳＫ－６、北端でＳＫ－９を切る
ＳＤ－21 （すき溝）	２区 ２Ｂ	0～25	13.8	190	南北	Ｂ層灰色小礫 ＳＫ－11・ＳＰ－14を切る。
ＳＤ－22 （すき溝）	２区 １Ｂ・２Ｂ	30～50	4.0	450	南北	第２層灰緑色砂質シルト 中央部でＳＤ－24に切られる。
ＳＤ－23 （すき溝）	２区 １Ａ・２Ａ	20以上	7.3	900	南北	第２層灰緑色砂質シルト 北部でＳＫ－13の西側を切る。
ＳＤ－24 （すき溝）	２区 ２Ａ	15～30	0.9	120	東西	第２層灰緑色砂質シルト ＳＤ－22・ＳＰ－16を切る。

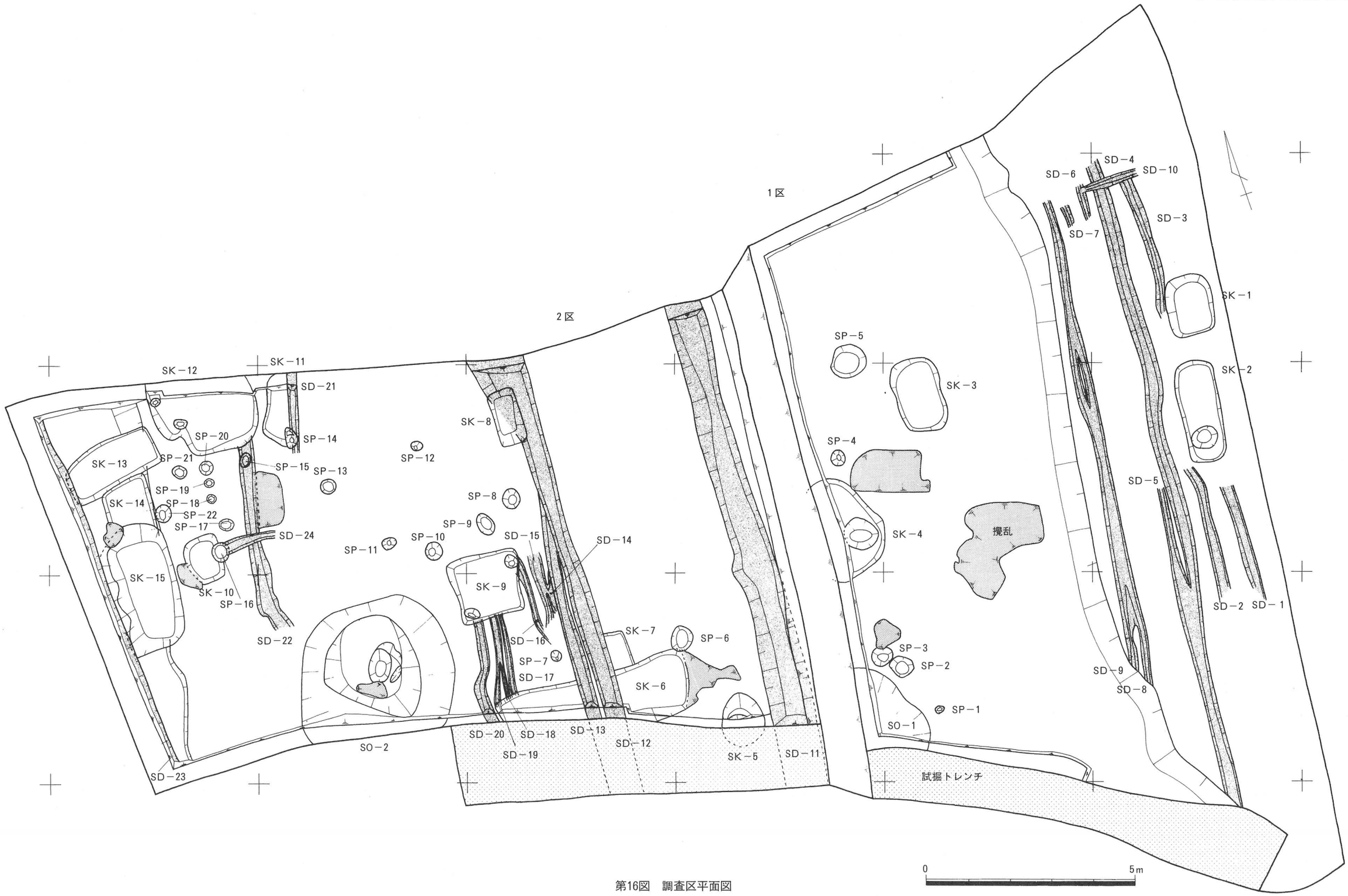
付表２　検出遺構一覧表（小穴）

遺構名	地区	法量(cm) 長径	短径	深さ	方向	内部堆積土 備　考
ＳＰ－１	１区 １Ｅ	23	20	11.3	東－西	第６層茶褐色巨礫混砂質シルト
ＳＰ－２	１区 １Ｅ	60	50	13.5	東－西	第６層茶褐色巨礫混砂質シルト
ＳＰ－３	１区 １Ｄ・１Ｅ	50	40	13.9	北東－南西	第６層茶褐色巨礫混砂質シルト
ＳＰ－４	２区 ２Ｄ	35前後	35前後	8.7	南－北	第６層茶褐色巨礫混砂質シルト
ＳＰ－５	２区 ３Ｄ	80前後	80前後	8.5	北東－南西	第６層茶褐色巨礫混砂質シルト
ＳＰ－６	２区 １Ｃ・１Ｄ	65	52	12.2	南－北	①茶灰色礫混粘土 南でＳＫ－６を切る。
ＳＰ－７	２区 １Ｃ	28	23	15.3	南－北	①茶灰色礫混粘土
ＳＰ－８	２区 ２Ｃ	50	42	32.1	南－北	③灰色粗砂、④明茶褐色粘土混砂質シルト
ＳＰ－９	２区 ２Ｃ	57	40	9.1	南－北	②暗茶灰色砂質シルト
ＳＰ－10	２区 ２Ｂ	42	38	16.8	南－北	②暗茶灰色砂質シルト
ＳＰ－11	２区 ２Ｂ	38	29	9.3	東－西	②暗茶灰色砂質シルト、③灰色粗砂、④明茶褐色粘土混砂質シルト
ＳＰ－12	２区 ２Ｂ	30	22	11.9	東－西	①茶灰色礫混粘土
ＳＰ－13	２区 ２Ｂ	40	35	10.1	南－北	①茶灰色礫混粘土
ＳＰ－14	２区 ２Ｂ	50	30	47.7	南－北	①茶灰色礫混粘土 ２段の掘り形、ＳＤ－21に切られ、ＳＫ－11を切る
ＳＰ－15	２区 ２Ａ	38	22	17.0	南－北	①茶灰色礫混粘土 ＳＤ－22を切る。
ＳＰ－16	２区 ２Ａ	48	42	14.9	南－北	③灰色粗砂 ＳＤ－24に切られ、ＳＫ－10を切る。
ＳＰ－17	２区 ２Ａ	33	30	12.3	東－西	①茶灰色礫混粘土、②暗茶灰色砂質シルト
ＳＰ－18	２区 ２Ａ	25	18	10.1	南－北	②暗茶灰色砂質シルト
ＳＰ－19	２区 ２Ａ	22	20	7.9	南東－北西	②暗茶灰色砂質シルト、④明茶褐色粘土混砂質シルト
ＳＰ－20	２区 ２Ａ	35	32	27.4	南－北	②暗茶灰色砂質シルト、③灰色粗砂
ＳＰ－21	２区 ２Ａ	32	30	19.3	東－西	②暗茶灰色砂質シルト、③灰色粗砂、④明茶褐色粘土混砂質シルト
ＳＰ－22	２区 ２Ａ	42	30以上	13.6	南－北	①茶灰色礫混粘土 西側は段に切られる。

付表３　出土遺物一覧表

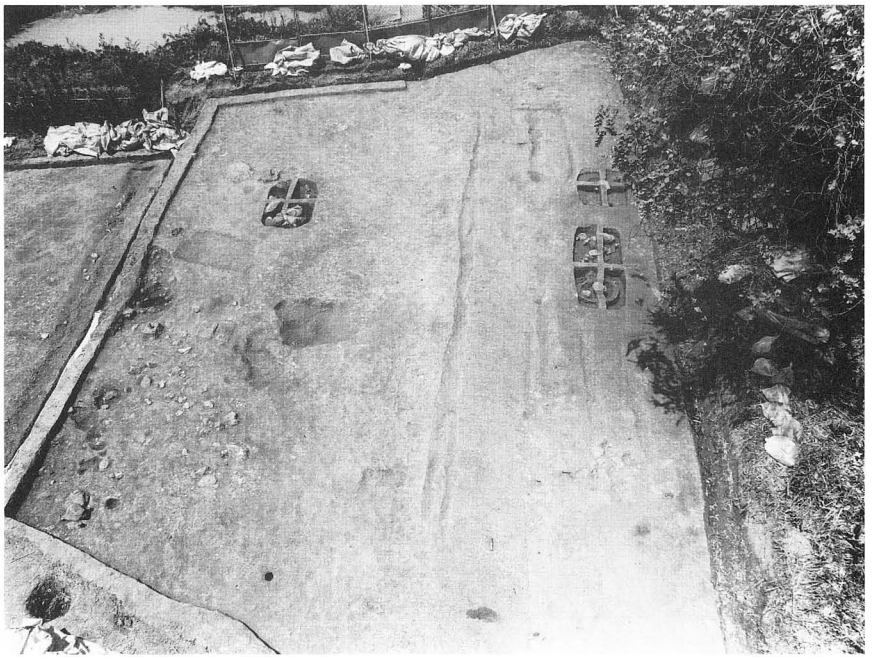
番号	器種	出土地	法量(cm)	色調 胎土・焼成	特　　徴	備　考
1	円板形土製品	１区 ３Ｆ ＳＫ－１	最大径　7.0 最大厚　1.6	灰黒色 密 良好	瓦質土器・瓦転用の未成品、周縁を粗く削る。	瓦・瓦質土器の転用
5	瓦質土器 すり鉢＊	１区 ２Ｆ ＳＫ－２	底　径　7.8	明灰色 密 良好	ナデ、外底面はヘラケズリ すり目は８本/2.4cm以上１単位	内面に炭化物付着
6	瓦質土器 甕	１区 ２Ｆ ＳＫ－２	底　径　30.2	明灰～暗灰色 中核は白灰色 密、良好	ナデ、外底面はヘラケズリ	
8	土師器 羽釜	１区 ２Ｄ～３Ｄ ＳＫ－４	鍔　径　7.8	茶褐色 中核は黒色 やや粗、良好	ナデ	鍔以下に煤付着
9	備前焼 すり鉢	１区 ２Ｄ～３Ｄ ＳＫ－４	底　径　14.2	暗赤褐色 密～やや粗 良好	ナデ、外底面～側面はヘラケズリ	
14	瓦質土器 すり鉢	２区 １Ｃ～１Ｄ ＳＫ－６	底　径　11.2	(外)黒褐色 (内)灰黄色 密、良好	ナデ後ハケ すり目は８本/2.7cm１単位	
16	土師器 皿	２区 ２Ｂ ＳＫ－11	□　径　12.1	淡黄灰色 密、良好	ナデ	
17	土師器 小皿	２区 ２Ａ ＳＫ－12	□　径　6.6	淡黄褐色 密、良好	ナデ	
18	土師器 小皿	２区 ２Ａ ＳＫ－12	□　径　7.8	明黄褐色 密、良好	ナデ	
19	土師器 小皿	２区 ２Ａ ＳＫ－12	□　径　8.0	淡黄褐色 密 良好	ナデ	
20	瓦器 椀	２区 ２Ａ ＳＫ－12	□　径　11.6	暗灰色 密 良好	(外) ナデ (内)ナデ後ヘラミガキ	
21	瓦器 椀	２区 ２Ａ ＳＫ－12	□　径　13.4	黒灰色 密 良好	(外) ナデ (内)ナデ後ヘラミガキ	高台は接合部から欠損
22	須恵質土器 こね鉢	２区 ２Ａ ＳＫ－12	□　径　29.3	淡黄褐色　口縁外面黒灰色 密、良好	(外)回転ナデ (内)回転ケズリ後回転ナデ	
23	土師器 羽釜	２区 ２Ａ ＳＫ－12	□　径　38.5	暗灰色 やや粗 良好	(外)ヨコナデ (内)ナデ	鍔裏面以下に煤付着
24	中国製白磁 小皿	２区 １Ａ・２Ａ ＳＫ－15	□　径　8.9	(磁胎)白灰色 (呉須)暗青色 密、良好	(外)圏線１＋花唐草文＋圏線１ (内)口縁部に圏線2,見込みに圏線1	類例、根来寺出土
25	瓦器 椀	２区 １Ａ・２Ａ ＳＫ－15	□　径　18.4	灰色 密 良好	(外)ナデ (内)ナデ後ヘラミガキ	
26	瓦器 すり鉢	２区 １Ａ・２Ａ ＳＫ－15	□　径　25.5	白灰色～灰色 やや粗～密 良好	指押さえ後ナデ、ヨコナデ すり目は２本/0.7cmを粗く施す	注口あり 「大和型」
27	瓦質土器 すり鉢	２区 １Ａ・２Ａ ＳＫ－15	□　径　18.2	灰白色 密 炭素吸着不良	(外)ハケ後ナデ (内)ナデ	内面に炭化物付着
28	瓦質土器 すり鉢	２区 １Ａ・２Ａ ＳＫ－15	底　径　9.0	灰白色 密 炭素吸着不良	ナデ すり目は７本/1.5cm以上１単位	27の底部か
30	円板形土製品	２区 １Ｂ ＳＯ－２	最大径　4.1 最大厚　0.9	淡橙褐色 やや粗 良好	土師器の転用、周縁を削る (外)指押さえ　(内)ヘラケズリ	土師器の転用

番号	器種	出土地	法量(cm)	色調 胎土・焼成	特　　徴	備　考
31	土師器 小皿	2区 1B SO－2	口　径　8.4	淡黄褐色 密 良好	ナデ	
32	土師器 小皿	2区 1B SO－2	口　径　10.8	淡黄褐色 密 良好	ナデ	
33	土師器 小皿	2区 1B SO－2	口　径　8.1	にぶい乳橙褐色 密、良好	ナデ	
34	瓦器 小皿	2区 1B SO－2	口　径　8.8	灰白色 密 炭素吸着不良	(外)ヨコナデ、ナデ (内)ナデ	表皮剥離、風化すすむ
35	瓦器 椀	2区 1B SO－2	口　径　13.4	灰白～灰色 密 良好	(外)ヨコナデ、ナデ (内)ナデ	
36	瓦器 椀	2区 1B SO－2	高台径　5.8	灰色 密 良好	(外)ヨコナデ、ナデ (内)ナデ後ヘラミガキ(粗)	
37	土師器 羽釜	2区 1B SO－2	口　径　28.8	にぶい淡橙色 やや粗 良好	(外)ヨコナデ (内)ナデ	鍔裏面以下に煤付着
38	土師器 羽釜	2区 1B SO－2	口　径　25.2	暗灰褐色 密 良好	(外)ヨコナデ (内)ナデ	外面に煤付着
39	須恵質土器 こね鉢	2区 1B SO－2	口　径　32.6	灰色　口縁部 外面は黒灰色 密、良好	ナデ後回転ナデ	
40	須恵質土器 こね鉢	2区 1B SO－2	口　径　30.8	灰色 密 良好	ナデ後回転ナデ	
41	須恵質土器 こね鉢	2区 1B SO－2	底　径　9.0	灰色 密 良好	ナデ後回転ナデ	
42	瓦質土器 すり鉢	2区 1B SO－2	底　径　6.6	暗灰色	ナデ すり目は10本/1.5m 3単位残存	
43	瓦質土器 すり鉢	2区 1B SO－2	底　径　11.2	灰色 やや粗 良好	ナデ すり目は6本/1.4cm 9単位残存	
46	弥生土器(V) 高杯	2区 1B SO－2	口　径　25.2	淡茶色 やや粗 良好	ナデ	
47	弥生土器(V) 短頸壺	2区 1B SO－2	口　径　10.0	淡茶色 やや粗 良好	ナデ	
48	弥生土器(V) 甕	2区 1B SO－2	底　径　5.2	赤茶色 やや粗 良	ナデ	底部有孔の可能性あり
51	瓦質土器 羽釜	2区 2D 表土直下	口　径　22.4	淡黄褐色	(外)3段のヨコナデ (内)ハケ、ヨコナデ	口縁端部・鍔以下に煤付着
52	須恵質土器 こね鉢	2区 2D 表土直下	口　径　24.2	灰色 密 良好	ナデ後回転ナデ	
53	瓦質土器 鉢	1区 4E 表土直下	口　径　30.6	灰白色 密 良好	(外)ヘラケズリ後ナデ、ヨコナデ (内)ナデ、ヨコナデ	
55	弥生土器(V) 高杯	2区 2A SK－13	孔　径　0.8	黄褐色 密 良好	(外)ヘラナデ、ヨコナデ (内)シボリ目 3孔を有する	

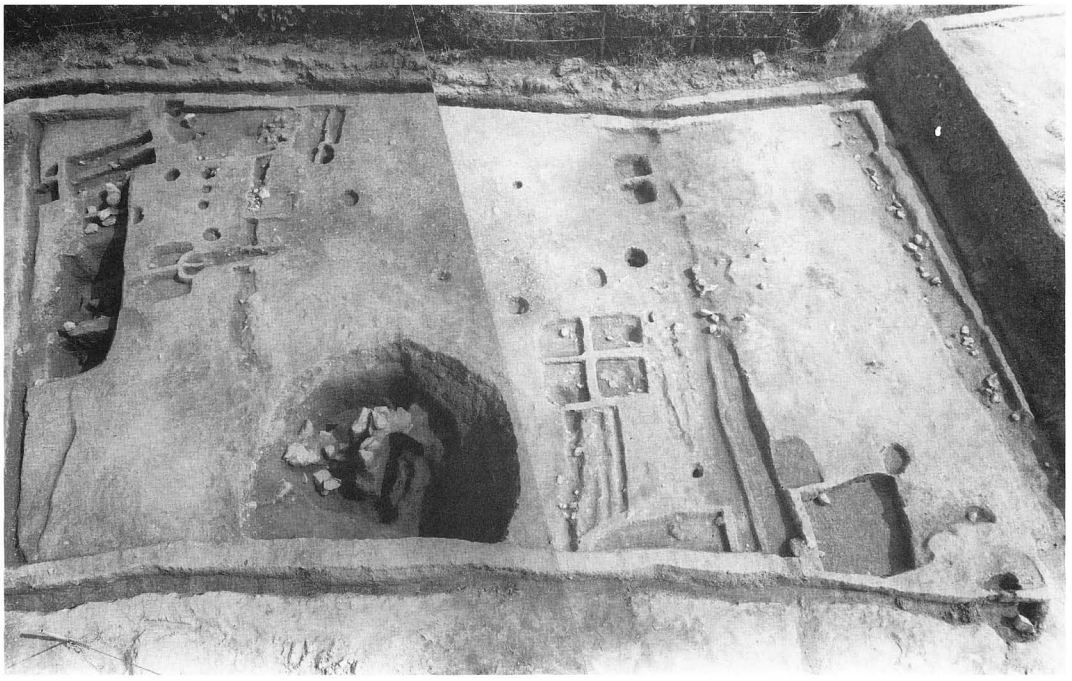

1区
2区
SD－4
SD－10
SD－6
SD－3
SD－7
SK－1
SK－2
SP－5
SK－3
SP－4
SK－4
撹乱
SD－5
SD－2
SD－1
SP－3
SP－2
SP－1
SO－1
SD－9
SD－8
試掘トレンチ
SK－12
SK－11
SD－21
SP－20
SP－14
SP－21
SP－15
SP－13
SK－13
SP－19
SK－14
SP－18
SP－22
SP－17
SD－24
SK－15
SK－10
SP－16
SD－22
SD－23
SO－2
SK－8
SP－12
SP－8
SP－9
SP－10
SP－11
SD－15
SD－14
SK－9
SD－16
SP－7
SD－17
SD－20
SD－18
SD－19
SD－13
SD－12
SK－7
SP－6
SK－6
SK－5
SD－11
0
5m

第16図　調査区平面図

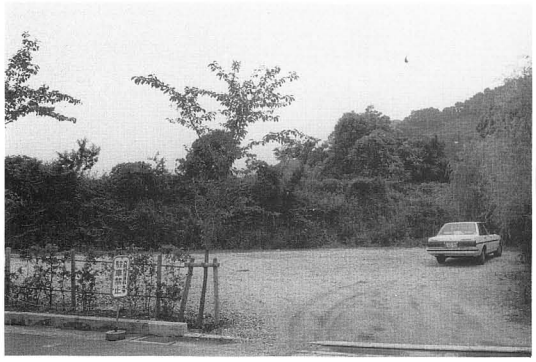
図　　版



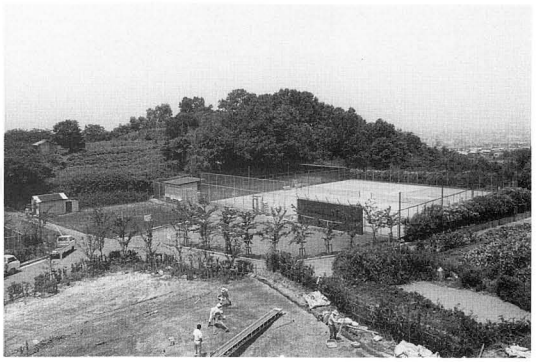
1区全景（南から）



2区全景（南から）

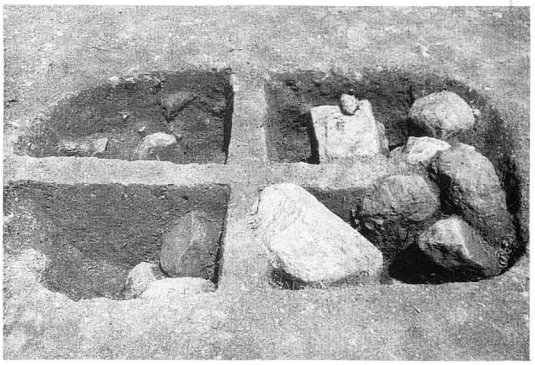


調査区遠景（西から）

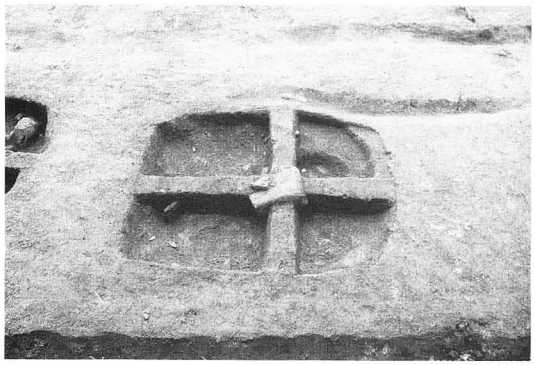


西の山古墳を望む

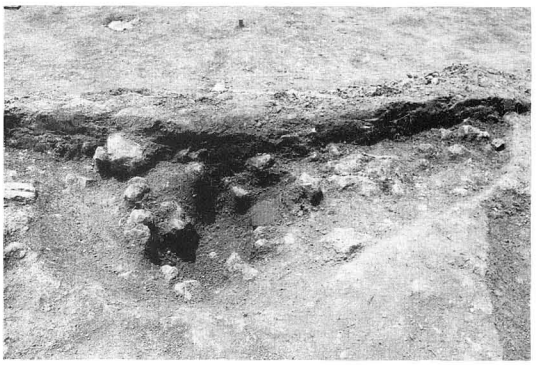
１区遺構検出状況



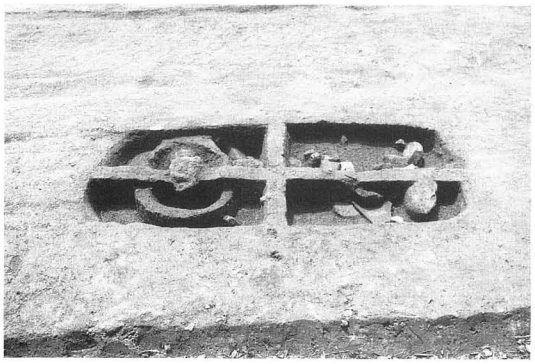
ＳＫ－１（東から）



ＳＫ－２（東から）

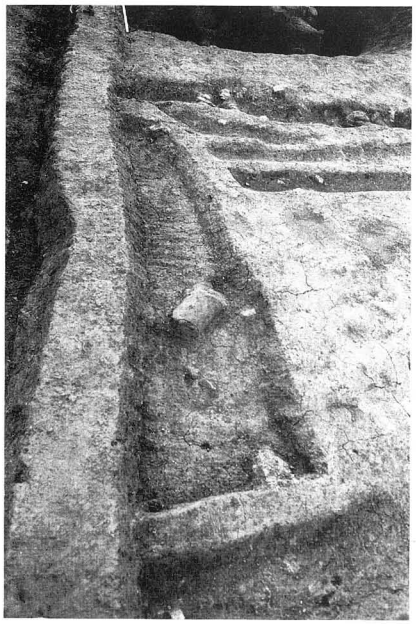


ＳＫ－３（西から）

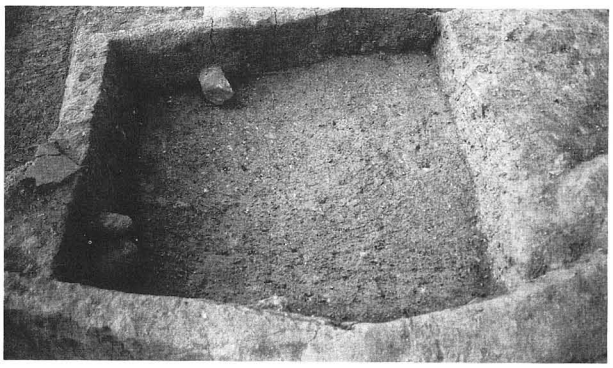


ＳＫ－４（東から）

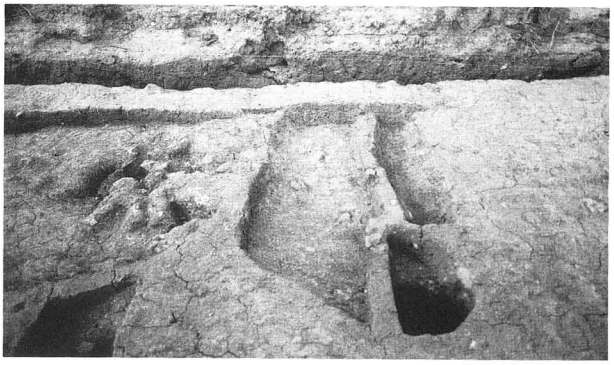
ＳＯ－１（南から）



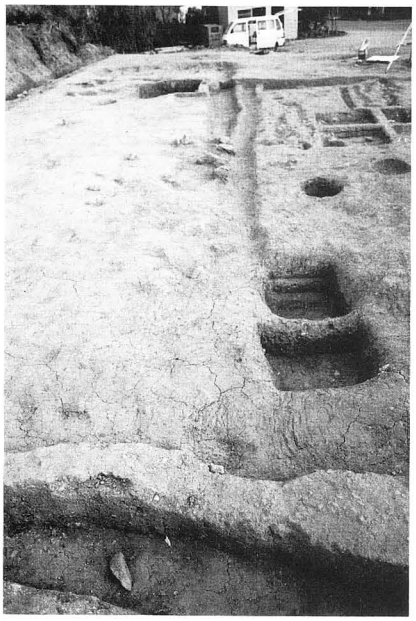
ＳＫ－６西半（東から）



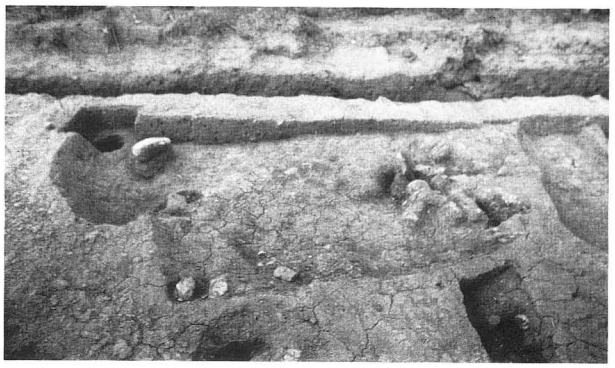
ＳＫ－６東半（東から）



ＳＫ－11ほか（南から）



ＳＫ－８ほか（北から）

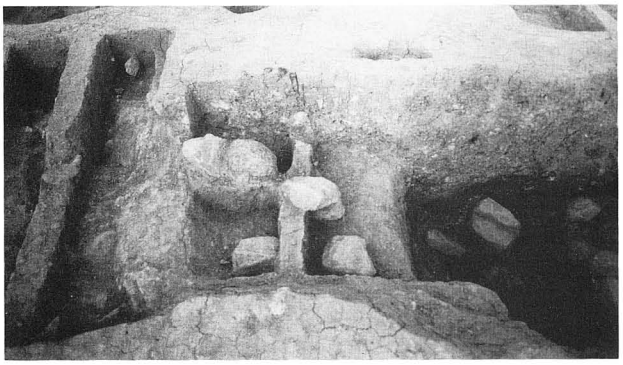


ＳＫ－12（南から）

調査風景

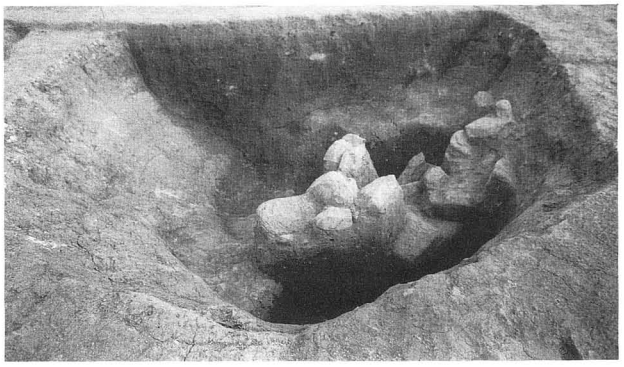
図版四

ＳＫ－13ほか（北から）



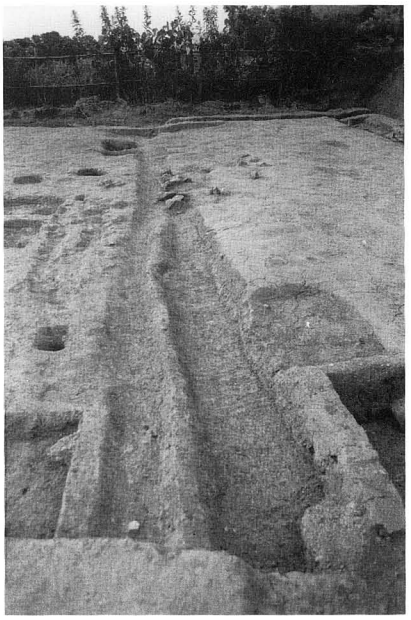
ＳＫ－14（西から）

ＳＫ－15（東から）

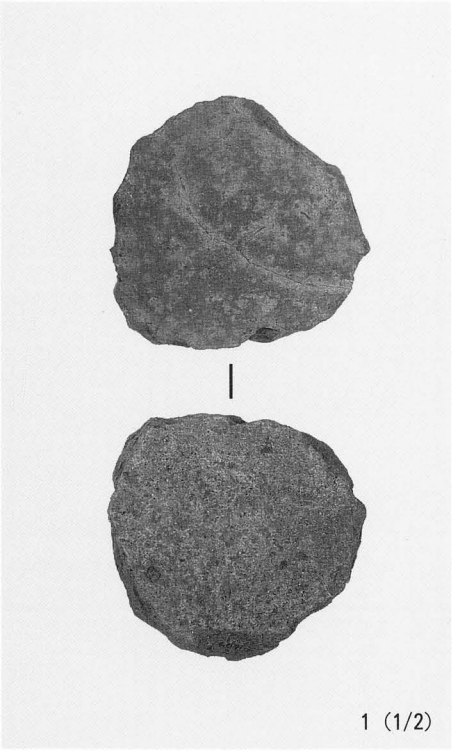


ＳＯ－２（北から）

ＳＤ－21（北から）

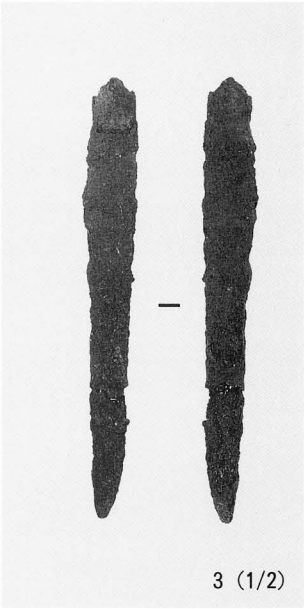


ＳＤ－22・ＳＤ－23ほか（南から）

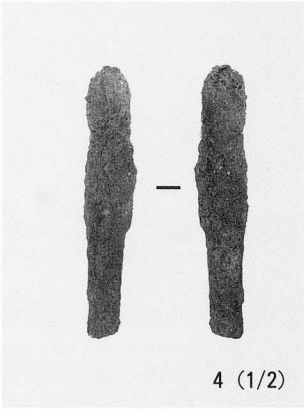


1 (1/2)

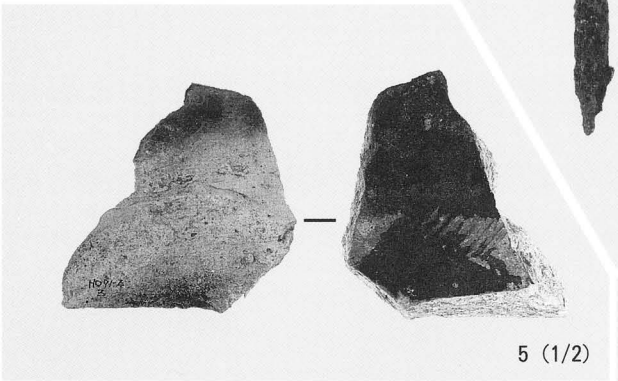
2 (1/2)



3 (1/2)

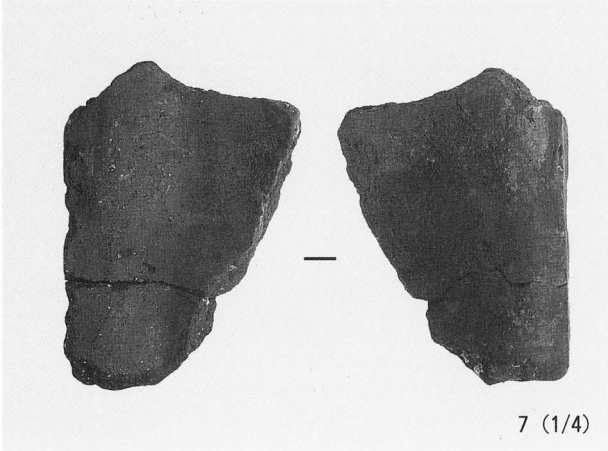


4 (1/2)



5 (1/2)

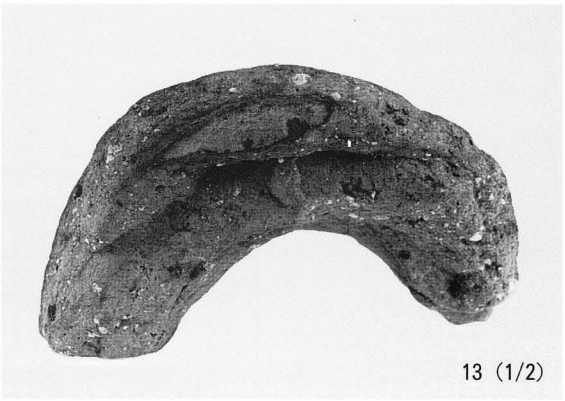
6 (1/4)

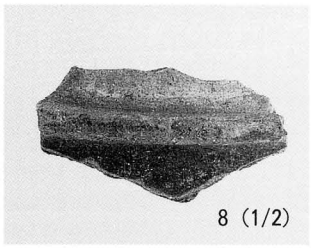


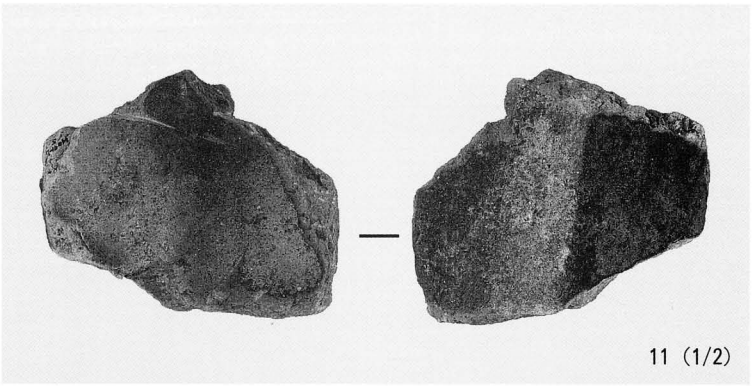
7 (1/4)

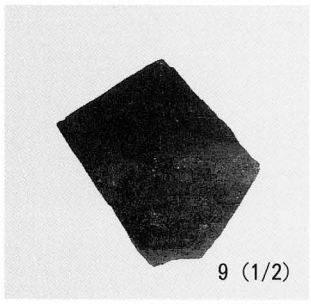
ＳＫ－１（１・２）・ＳＫ－２（３～７）出土遺物

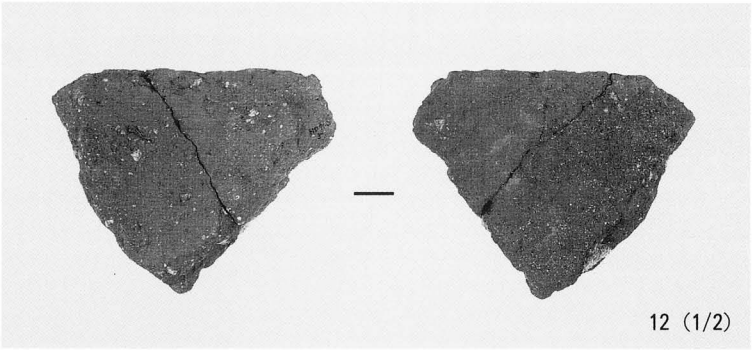
10（1/2）

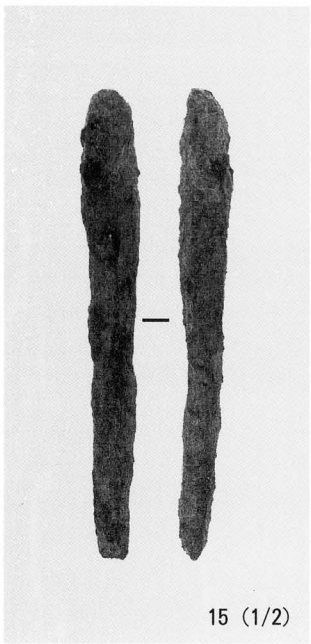

13（1/2）

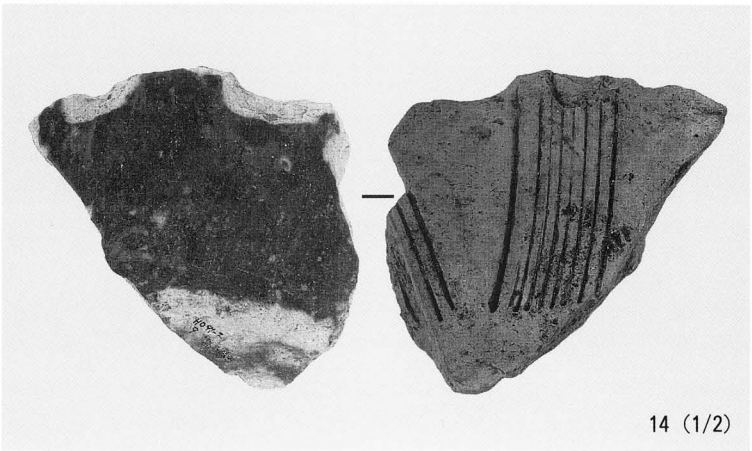

8（1/2）


11（1/2）

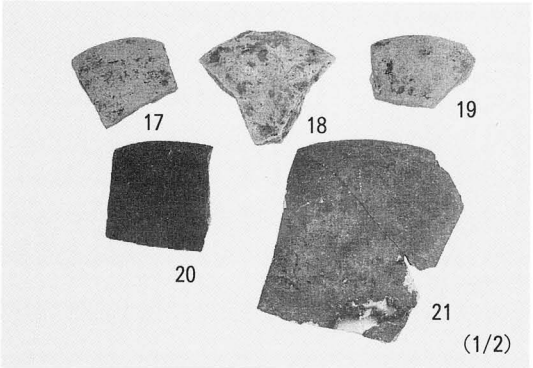

9（1/2）

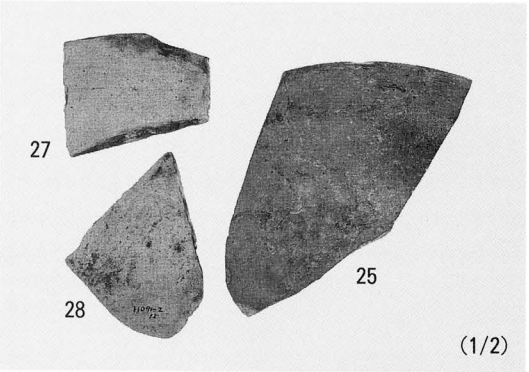

12（1/2）

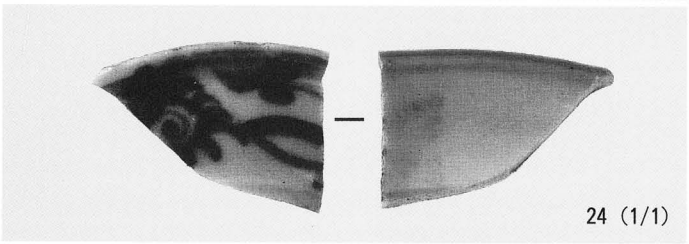

15（1/2）

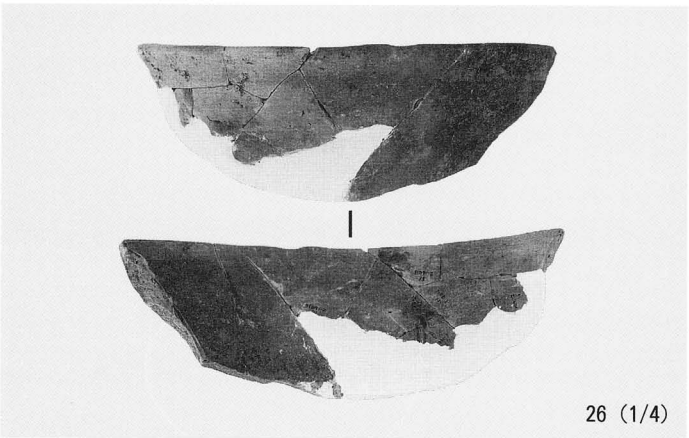

14（1/2）

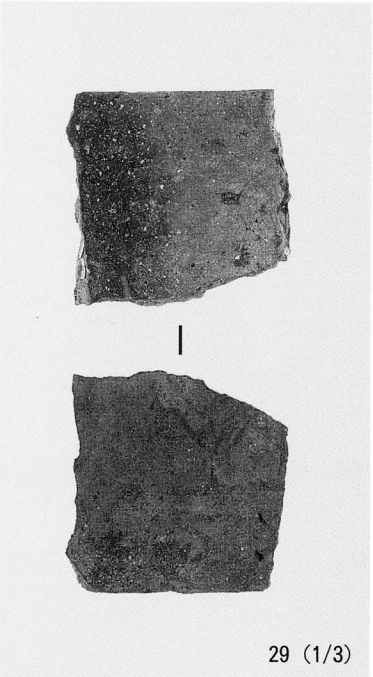
ＳＫ－４（８～12）・ＳＫ－６（13・14）・ＳＫ－９（15）出土遺物

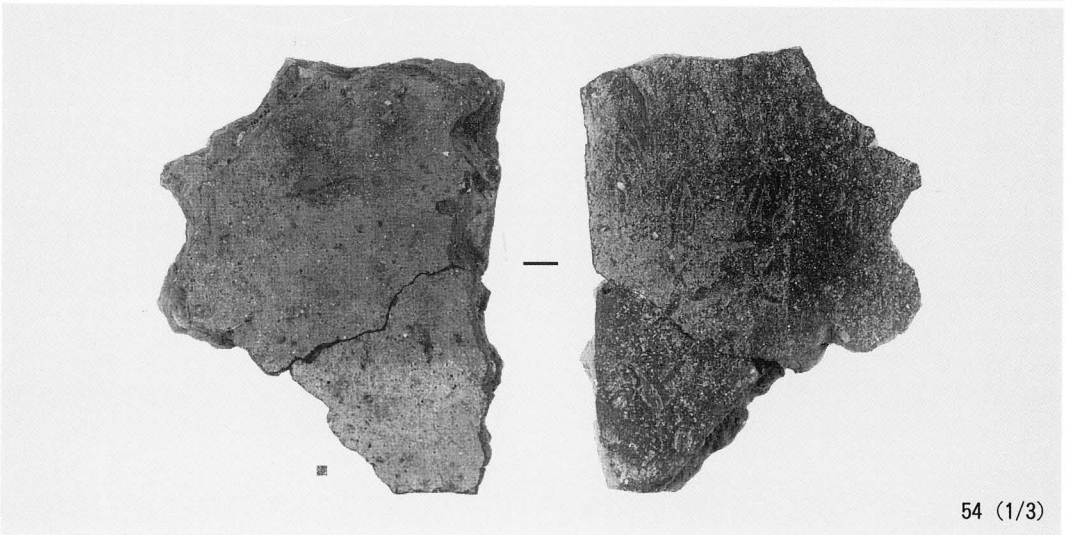




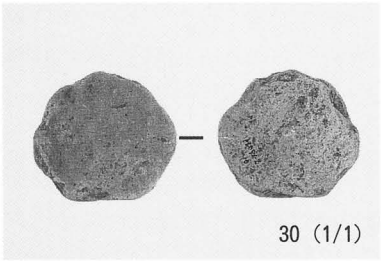


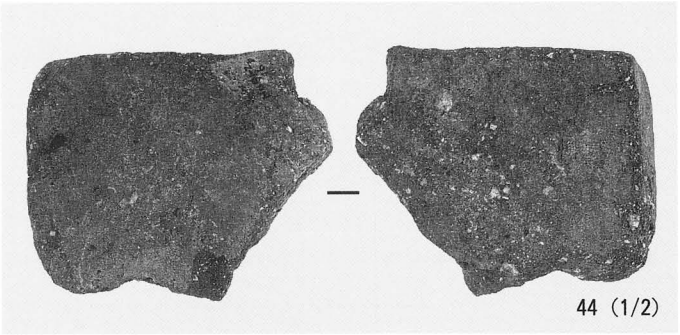


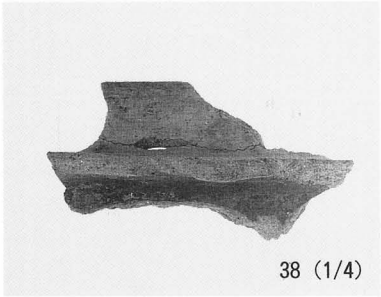


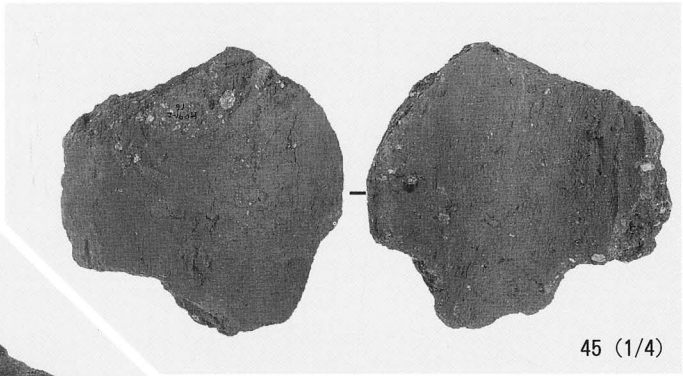


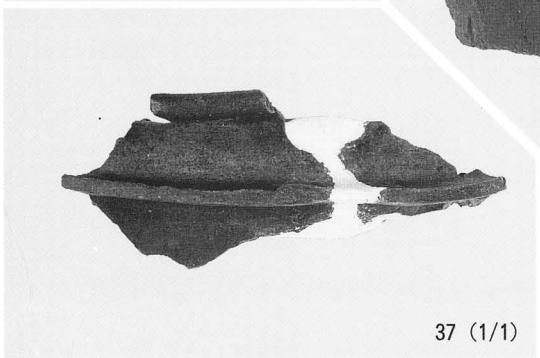
ＳＫ－12（17～21）・ＳＫ－15（24～29）・包含層（54）出土遺物

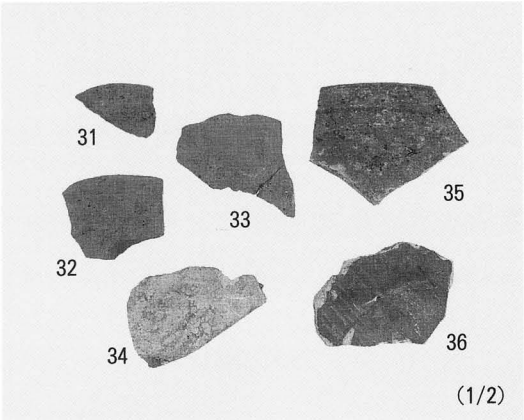


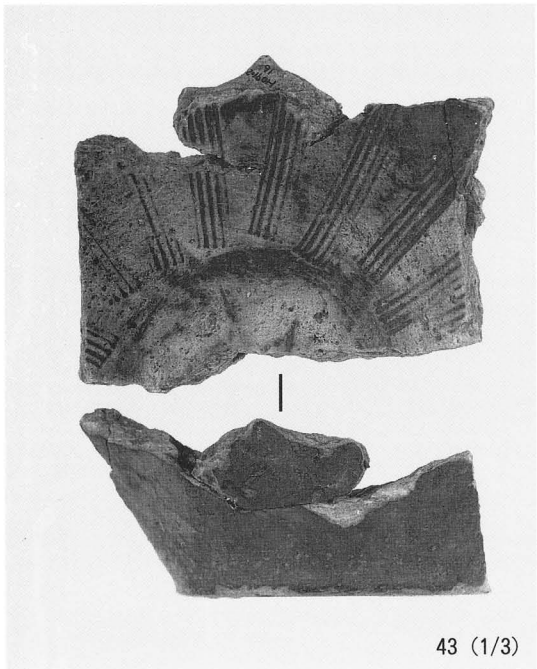


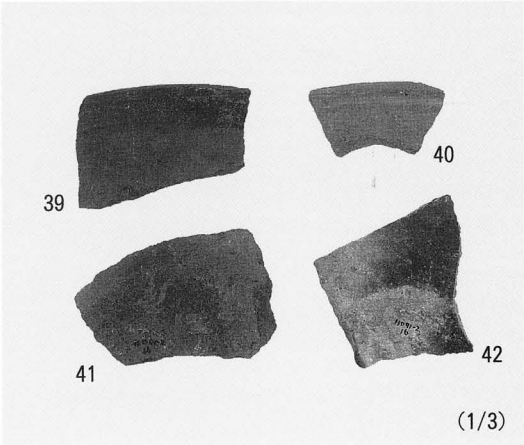












ＳＯ－2 出土遺物

Ⅴ　水越遺跡第２次調査（ＭＫ89－２）

例　言

1．本書は八尾市千塚170番地で実施した工場建設に伴う発掘調査の報告である。

1．本書で報告する水越遺跡第２次調査（ＭＫ89－２）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋173号　平成元年４月３日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が西村忠次郎氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成元年５月16日から平成元年６月21日にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積約527㎡を測る。なお調査には岡田聖一・小西博樹・並川聡也・表佐江子・中西明美が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後実施し平成９年３月に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物復原－西村（公）・松井三千子、遺物実測－中西・西村（公）、図面レイアウト・トレース－西村（公）・中西・西村和子、遺物写真撮影－西村（公）が行った。

1．本書での弥生時代の土器については寺沢薫　森岡秀人編著　1989　『弥生土器の様式と編年―近畿編Ｉ―』木耳社の編年に基づいて記載した。

1．本書の執筆および編集は西村（公）が行った。

本　文　目　次

第1章　はじめに……105

第２章　調査概要 ……107

　第1節　調査の方法と経過……107

　第２節　基本層序 ……108

　第３節　検出遺構と出土遺物 ……113

第３章　出土遺物観察表 ……146

第４章　まとめ ……154

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図 ……106
第２図　調査区設定図 ……107
第３図　基本層序図……109・110
第４図　検出遺構平面図……111・112
第５図　第Ⅱ区 東側下層確認調査〔第９層上面〕検出遺構（ＮＲ－1）平面図 ……113
第６図　ＮＲ－1（1）出土遺物実測図 ……113
第７図　ＳＥ－1平断面図……113
第８図　ＳＥ－1（２～７）出土遺物実測図……114
第９図　ＳＥ－２・ＳＥ－３平断面図 ……115
第10図　ＳＥ－２（８～14）出土遺物実測図 ……116
第11図　ＳＥ－３（15～24）出土遺物実測図 ……117
第12図　ＳＥ－４平断面図 ……118
第13図　ＳＥ－5平断面図……118
第14図　ＳＥ－４（25・26）ＳＥ－５（27～29)出土遺物実測図……118
第15図　ＳＥ－6平断面図……119
第16図　ＳＥ－6（30・31）出土遺物実測図……119
第17図　ＳＥ－７平断面図 ……119
第18図　ＳＥ－７（32～34）出土遺物実測図 ……119
第19図　ＳＫ－1平断面図……120
第20図　ＳＫ－１（35）出土遺物実測図 ……120
第21図　ＳＫ－２平断面図 ……120
第22図　ＳＫ－２（36）出土遺物実測図 ……120
第23図　ＳＫ－３（37）出土遺物実測図 ……121
第24図　ＳＫ－５平断面図 ……121
第25図　ＳＫ－５（38～40）ＳＫ－８（41）ＳＫ－９（42）出土遺物実測図 ……122
第26図　ＳＫ－10平断面図 ……123
第27図　ＳＫ－10（43～48）ＳＫ－12（49）ＳＫ－13（50）出土遺物実測図 ……124
第28図　ＳＫ－14平断面図 ……125
第29図　ＳＫ－14（51～55）出土遺物実測図 ……125

第30図　ＳＩ－１平断面図 ……126
第31図　ＳＩ－２平断面図 ……126
第32図　ＳＩ－２（56～59）ＳＩ－３（60）出土遺物実測図 ……127
第33図　ＳＩ－３平断面図 ……127
第34図　ＳＰ－13（61・62）ＳＰ－19（63）ＳＰ－23（64）ＳＰ－29（65）ＳＰ－37（66）
ＳＰ－71（67～69）ＳＰ－105（70）ＳＰ－182（71）出土遺物実測図 ……128
第35図　第Ⅲ区　ＳＤ－１平断面図……132
第36図　ＳＤ－１（72～78）出土遺物実測図 ……133
第37図　ＳＤ－２・ＳＤ－３平断面図……135・136
第38図　ＳＤ－２（79～82）出土遺物実測図 ……137
第39図　ＳＤ－２（83～85）出土遺物実測図 ……138
第40図　ＳＤ－２（86～93）出土遺物実測図 ……139
第41図　ＳＤ－３（94）出土遺物実測図 ……140
第42図　ＳＤ－８（95・96）出土遺物実測図 ……140
第43図　ＳＤ－10（97・98）出土遺物実測図 ……141
第44図　ＳＤ－21（99～101）出土遺物実測図……142
第45図　ＳＤ－22（102・103）出土遺物実測図 ……142
第46図　ＳＤ－24（104～107）出土遺物実測図 ……143
第47図　第1層（108～114・118）出土遺物実測図 ……145
第48図　第1層（115～117）出土遺物実測図……145

表　目　次

第１表　水越遺跡発掘調査一覧表 ……106
第２表　小穴法量表（１） ……129
第３表　小穴法量表（２） ……130
第４表　小穴法量表（３） ……131

写　真　目　次

写真　1　調査地から生駒山地を望む（西から）……105
写真　2　第Ⅲ区　ＳＤ－１遺物出土状況（西から） ……132

写真 3　ＳＤ－２遺物出土状況（西から）……134

図　版　目　次

図版一　第Ⅰ区 全景（西から）　第Ⅱ区 全景（西から）　第Ⅲ区 全景（西から）
第Ⅳ区 全景（東から）　第Ⅰ区 ＳＥ－１（西から）　第Ⅱ区 ＳＥ－２（南から）
図版二　第Ⅱ区 ＳＥ－２遺物出土状況（南から）　第Ⅱ区 ＳＥ－３（南から）
第Ⅱ区 ＳＥ－３遺物出土状況（南から）　第Ⅲ区 ＳＥ－４（南から）
第Ⅳ区 ＳＥ－５（南から）　第Ⅳ区 ＳＥ－6（北から）
図版三　第Ⅰ区 ＳＥ－７（北から）　第Ⅰ区 ＳＩ－２（南西から）
第Ⅰ区 ＳＫ－１（南から）　第Ⅲ区 ＳＫ－５（南から）
第Ⅲ区 ＳＫ－10（南から）　第Ⅳ区 ＳＫ－14 ＳＤ－１（南から）
図版四　第Ⅲ区 ＳＤ－１（南から）　第Ⅰ区 ＳＤ－２（南から）
第Ⅰ区 ＳＤ－２遺物出土状況（東から）　第Ⅲ区 ＳＤ－24（南から）
第Ⅳ区 ＳＤ－24（東から）　第Ⅱ区　3f地区小穴（南から）
図版五　ＮＲ－１（１）ＳＥ－1（２・７）ＳＥ－２（12～14）ＳＥ－３（15・16）出土遺物
図版六　ＳＥ－３（17～23）ＳＥ－４（25）出土遺物
図版七　ＳＥ－４（26）ＳＥ－５（28）ＳＥ－６（30・31）ＳＥ－７（32～34）
ＳＫ－１（35）出土遺物
図版八　ＳＫ－３（37）ＳＫ－５（38～40）ＳＫ－９（42）ＳＫ－10（43・47・48）出土遺物
図版九　ＳＫ－14（51～53・55）ＳＩ－２（56・58・59）ＳＩ－３（60）出土遺物
図版一〇　ＳＰ－29（65）ＳＰ－37（66）ＳＰ－71（68・69）ＳＰ－105（70）ＳＰ－182（71）
ＳＤ－１（73）出土遺物
図版一一　ＳＤ－１（74～78）ＳＤ－２（79～81）出土遺物
図版一二　ＳＤ－２（82～89）出土遺物
図版一三　ＳＤ－２（90・91・93）ＳＤ－８（95）ＳＤ－10（97・98）ＳＤ－21（100・101）
出土遺物
図版一四　ＳＤ－22（103）ＳＤ－24（104～107）第1層（108・110・111）出土遺物
図版一五　第1層（115～118）出土遺物

第１章　はじめに

水越遺跡は大阪府八尾市の東側に位置しており、現在の行政区画では水越（みずこし）、千塚（ちづか）一帯の東西約1.25km、南北約1.2kmの範囲にあたる。当遺跡は生駒山地の西麓から河内平野に広がる扇状地上に位置している。

当遺跡内の特に千塚一帯では、弥生土器や石器等の表採の資料がたくさん発見されており、遺跡であることが知られていた。この千塚において昭和53年度に府立清友高等学校の建設が行われることになり、建設工事に伴う発掘調査を大阪府教育委員会が行った。調査の結果、弥生時代中期から鎌倉時代に至る遺構の検出および遺物の出土があった。この調査以降、平成7年度までに今回の調査地周辺では発掘調査を、八尾市教育委員会と当調査研究会により数件行っている（第１表と第１図参照）。それらの発掘調査の結果、弥生時代から近代に至る遺構の検出および遺物が出土しており、遺跡の実体が徐々に解明されつつある現状である。[註1][註2]

このような情勢下、西村忠次郎氏から、千塚170番地において工場建設の計画書が八尾市教育委員会文化財課に提出された。同文化財課では、計画地が水越遺跡の遺跡範囲内にあることから、計画地内で事前に試掘調査を行った。調査の結果、弥生時代の遺構の検出および遺物の出土があった。このことから、同文化財課は発掘調査が必要であると判断し、その旨を事業者に通知した。その結果、建設工事により遺構の破壊が予想される部分を対象に発掘調査を実施することが事業者と同文化財課の両者で合意された。

この事により発掘調査を実施するに至ったもので、事業者、八尾市教育委員会文化財課、財団法人八尾市文化財調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。

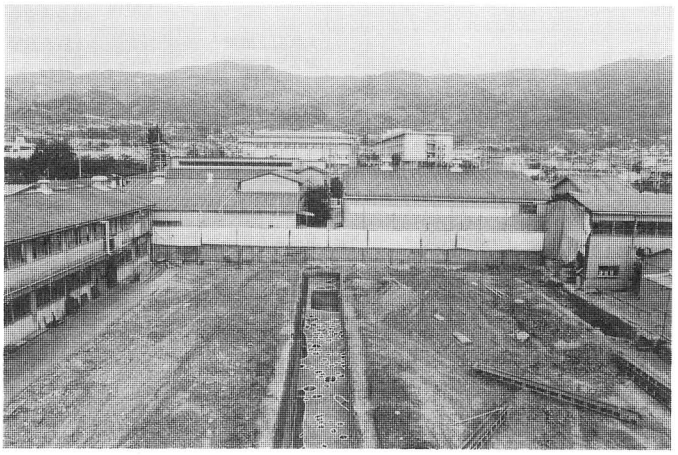


写真１　調査地から生駒山地を望む（西から）

註１　原田修他　1976『特輯　清原得巌所蔵考古資料図録』『大阪文化誌』季刊第2巻・第2号・通巻第6号　財団法人大阪文化財センター

註２　吉岡哲他　1988『八尾市史（前近代）』本文編　八尾市役所

第1図　調査地周辺図

調査地点	略号	調査地	年度	調査原因	調査面積	調査期間	調査機関	文　　献
①－Ⅰ	MK82-1-2	水越181番地	S57	高安中学校校舎増築	491	S570716～0824	財団法人八尾市文化財調査研究会	1989「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」　水越　竹渕　恩智　財団法人八尾市文化財調査研究会報告23 財団法人八尾市文化財調査研究会
①－Ⅱ	MK82-1-1	水越181～414番地	S57	水道管布設	450	S570726～0823	財団法人八尾市文化財調査研究会	1983.3「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査」－その成果と概要－　財団法人八尾市文化財調査研究会
②	MK89-2	千塚170	H01	工場建設	527	H010516～0621	財団法人八尾市文化財調査研究会	1990「八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度」財団法人八尾市文化財調査研究会報告28 財団法人八尾市文化財調査研究会
③	MK89-3	水越2丁目117	H01	体育館改築	451.6	H010626～0719	財団法人八尾市文化財調査研究会	1990「八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度」財団法人八尾市文化財調査研究会報告28 財団法人八尾市文化財調査研究会
④				大阪府立清友高等学校建設			大阪府教育委員会	1988 八尾市史（前近代）本文編　八尾市役所
⑤		千塚349番地他	S56	消防車庫建設	70	S570323～0413	八尾市教育委員会	1983「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要」　昭和56・57年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告3 財団法人八尾市文化財調査研究会
⑥		千塚170	S57	工場建設		S580129	八尾市教育委員会	1983.3『八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書』－教興寺の調査－八尾市文化財調査報告9　昭和57年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
⑦		千塚94-1他	S59	資料館等建設		S591026	八尾市教育委員会	1985.3　『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11　昭和59年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
⑧		水越150	S60	プール建設		S600415	八尾市教育委員会	1986.3　『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告12　昭和60年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
⑨	63-354	水越2丁目117	S63	体育館改築		S631227	八尾市教育委員会	1989.3『9．水越遺跡（63-354）の調査』「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告20 昭和63年度公共事業 八尾市教育委員会
⑩	92-602	千塚2丁目106	H04	工場建設		H041221・H050108・09・11～13・16・18・19	八尾市教育委員会	1994.3『15．水越遺跡（92-602）の調査』「八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告29 平成5年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
⑪		千塚1丁目3.4	H05	駐車場造成		H050421	八尾市教育委員会	1994.3　『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告29　平成5年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
⑫				東高野街道改修工事		S0902		1988 八尾市史（前近代）本文編　八尾市役所

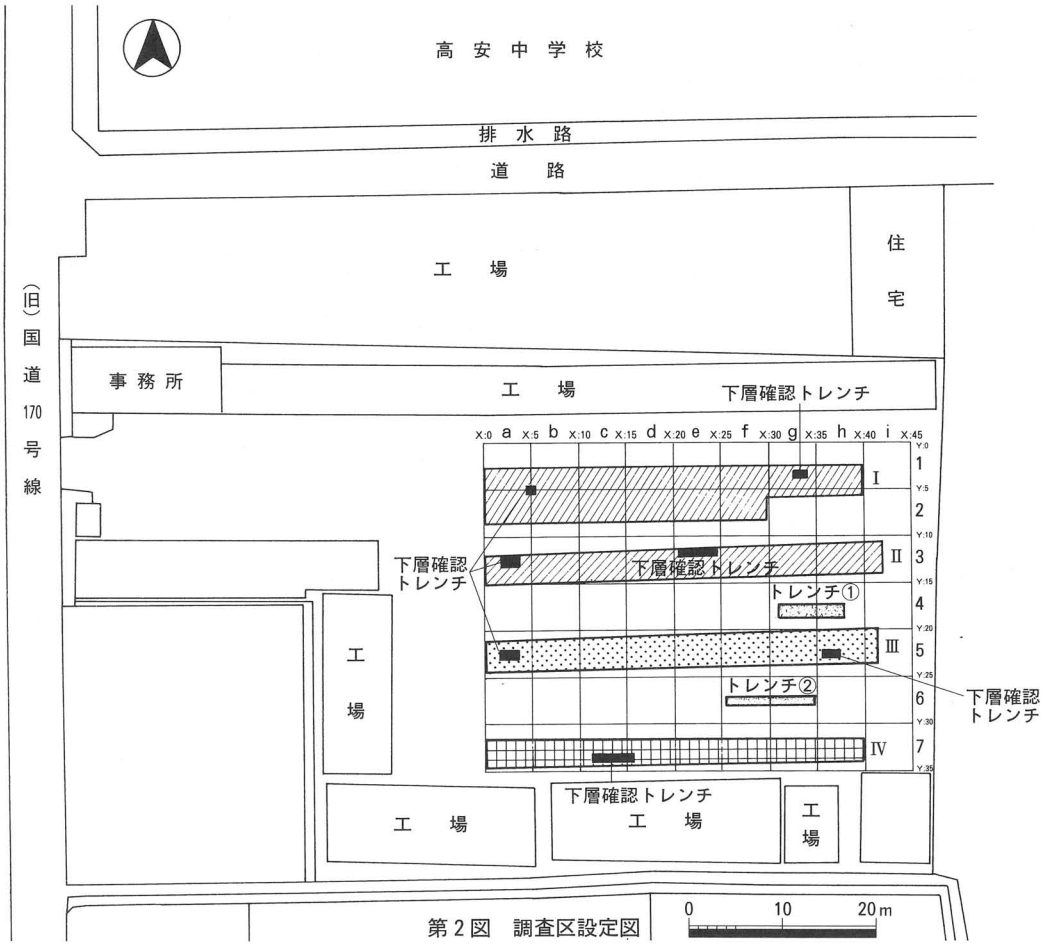
第1表　水越遺跡発掘調査一覧表

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

工場建設予定地に調査区を４ヶ所設定した（北から第Ⅰ区東西40m×南北５m、第Ⅱ区東西41.5m×南北３m、第Ⅲ区東西41.5m×南北３m、第Ⅳ区東西40m×南北２mと呼称する）。調査に際しては、現地表下0.6m～0.8mまでの土層を機械掘削し、以下の各層は人力による掘削を行い、遺構および遺物の検出に努めた。また調査の途中で弥生時代中期の環壕と推定される溝（ＳＤ－24）を検出したため、この溝の平面的な位置を確かめる目的で、第Ⅱ区と第Ⅲ区の間にトレンチ①を、第Ⅲ区と第Ⅳ区の間にトレンチ②を設け確認を行った。

調査地には、北西側に任意の基準点を置き、この基準点から東へ45m（X:0～X:45）、南へ35m（Y:0～Y:35）にわたって地区割を設定した。一区画の単位は５m四方で、基準点から南北方向は算用数字（北から1～7）、東西方向はアルファベット（西からa～i）で示した。地区



第２図　調査区設定図

割の表示は、一区画の南東隅に交差する線を用い、1 a～7 i区とした。また、調査地点の表示はXとYの座標の交点を用い、X:0からX:45・Y:0からY:35とした。

調査の結果、第Ⅰ区～第Ⅳ区では現地表下0.7～1.2m（標高T.P.＋14.8m～T.P.＋15.3m）に存在する第5層上面で弥生時代中期の竪穴住居3棟（ＳＩ－１～ＳＩ－３）、井戸6基（ＳＥ－１～ＳＥ－６）、土坑14基（ＳＫ－１～ＳＫ－14）、小穴195個（ＳＰ－１～ＳＰ－195）、溝24条（ＳＤ－１～ＳＤ－24）と、古墳時代前期［布留式期］の井戸1基（ＳＥ－７）を検出した。また第4層上面では中世の溝1条（ＳＤ－25）を検出し、第3層上面では近世の溝1条（ＳＤ－26）を検出した。第Ⅱ区東側の下層確認トレンチ（第9層上面）で縄文時代中期の河川1条（ＮＲ－１）を検出した。

第2節　基本層序

第0層　盛土。層厚0.15～0.5m。上面の標高は調査地の西側がT.P.＋15.9mで、東側がT.P.＋16.3mである。

第1層　暗灰色微砂混粘土。層厚0.1m。近年までの耕作土。

第2層　淡青灰色細砂混粘土。層厚0.1～0.15m。

第3層　茶褐色細砂混粘土。層厚0.2～0.5m。中世の遺物を含む。
この層の上面では、第Ⅳ区で近世の溝を検出した。

第4層　暗灰褐色細砂混粘土。層厚0.1～0.3m。弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を含む。この層の上面では、第Ⅲ区で中世の溝を検出した。

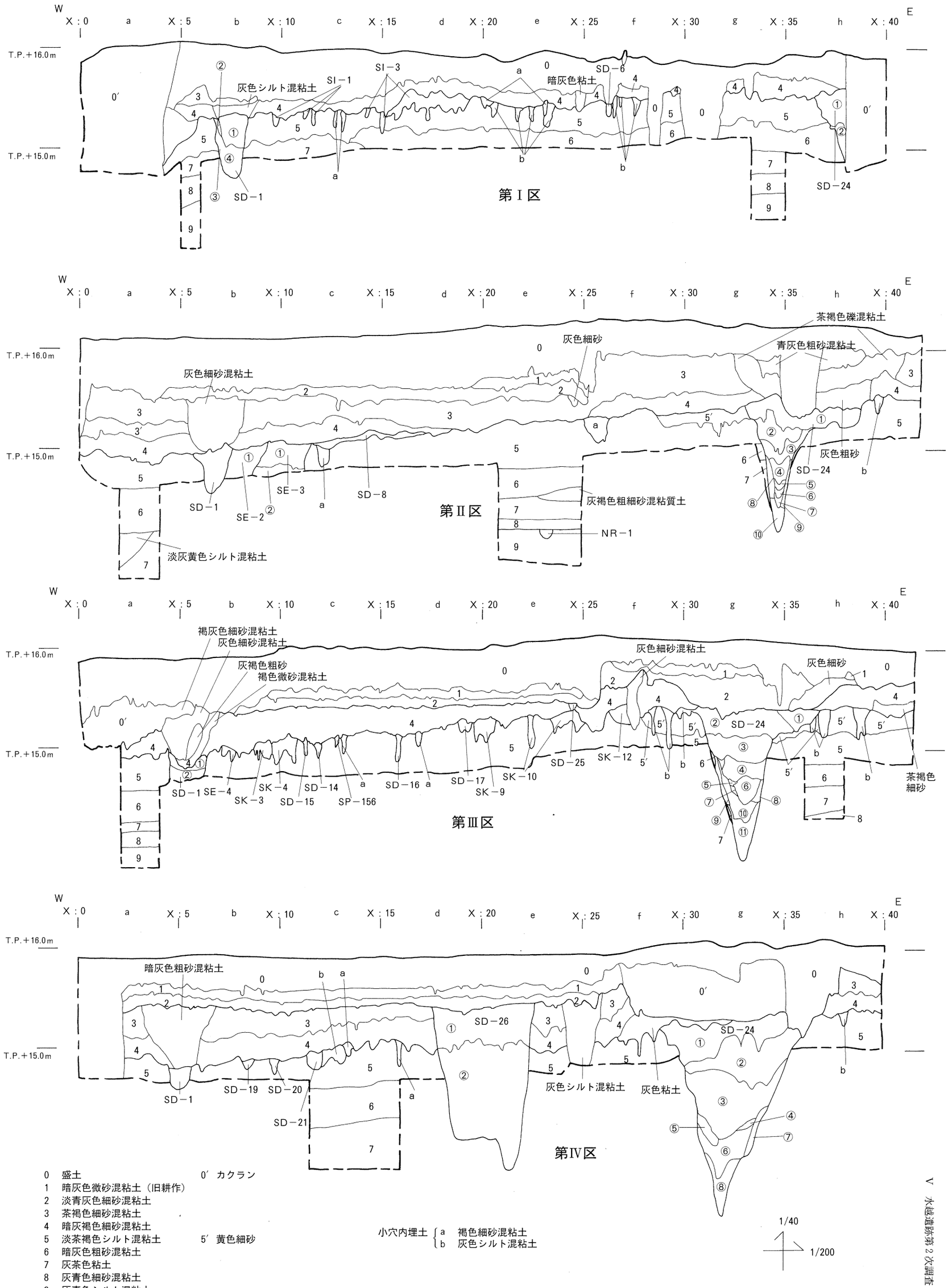
第5層　淡茶褐色シルト混粘土。層厚0.2～0.5m。第Ⅰ区、第Ⅱ区では、粗砂を多く含んでいる。上面で弥生時代中期の遺構を検出した。上面の標高は、T.P.＋14.8～T.P.＋15.5mである。

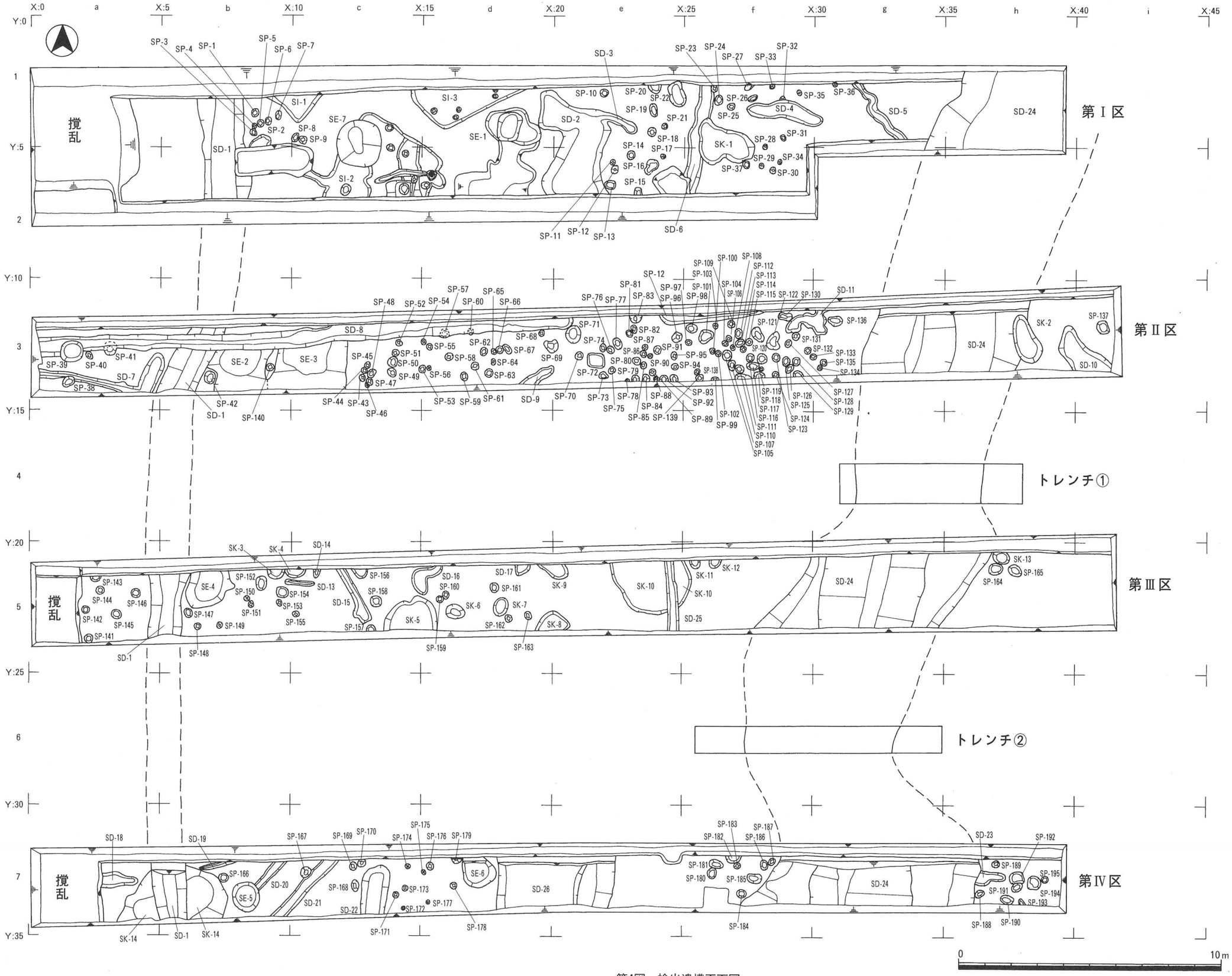
第6層　暗灰色粗砂混粘土。層厚0.2～0.4m。

第7層　灰茶色粘土。層厚0.2～0.3m。

第8層　灰青色細砂混粘土。層厚0.06～0.1m。

第9層　灰青色シルト混粘土。層厚0.4m以上。上面で縄文時代中期の河川を検出した。


W
E
X：0
X：5
X：10
X：15
X：20
X：25
X：30
X：35
X：40
T.P.＋16.0m
T.P.＋15.0m
灰色シルト混粘土
SI－1
SI－3
暗灰色粘土
SD－6
SD－1
SD－24
第Ⅰ区
灰色細砂混粘土
灰色細砂
茶褐色礫混粘土
青灰色粗砂混粘土
灰色粗砂
SE－3
SE－2
SD－8
灰褐色粗細砂混粘質土
NR－1
淡灰黄色シルト混粘土
第Ⅱ区
褐灰色細砂混粘土
灰色細砂混粘土
灰褐色粗砂
褐色微砂混粘土
SD－1
SE－4
SK－4
SK－3
SD－14
SD－15
SP－156
SD－16
SD－17
SK－9
SK－10
SD－25
SK－12
茶褐色細砂
第Ⅲ区
暗灰色粗砂混粘土
SD－26
SD－19
SD－20
SD－21
灰色シルト混粘土
灰色粘土
第Ⅳ区
0　盛土
0′　カクラン
1　暗灰色微砂混粘土（旧耕作）
2　淡青灰色細砂混粘土
3　茶褐色細砂混粘土
4　暗灰褐色細砂混粘土
5　淡茶褐色シルト混粘土
5′　黄色細砂
6　暗灰色粗砂混粘土
7　灰茶色粘土
8　灰青色細砂混粘土
9　灰青色シルト混粘土
小穴内埋土
a　褐色細砂混粘土
b　灰色シルト混粘土
1/40
1/200



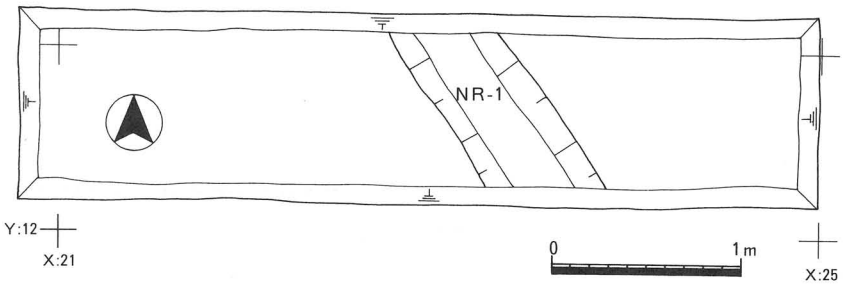
第4図　検出遺構平面図

第３節　検出遺構と出土遺物

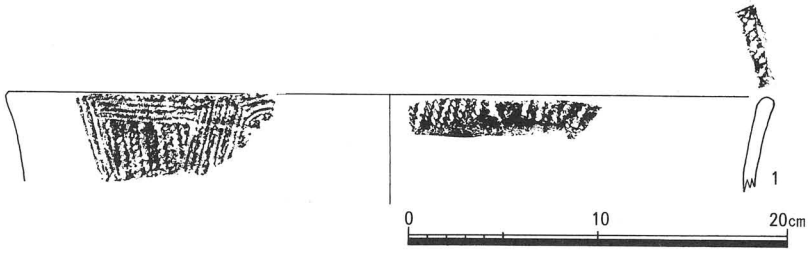
自然河川（ＮＲ）

ＮＲ－１

第Ⅱ区東側の下層確認トレンチで検出した。南東から北西方向に伸びる河川で、幅0.55ｍ、深さ0.12ｍを測る。内部堆積土は茶灰色粗砂である。河川内からは縄文時代中期に比定される深鉢（１）が出土している。（１）は撚り糸文の縄文が地文で、半截竹管による平行線を上部



第５図　第Ⅱ区 東側下層確認調査〔第９層上面〕検出遺構（ＮＲ－１）平面図



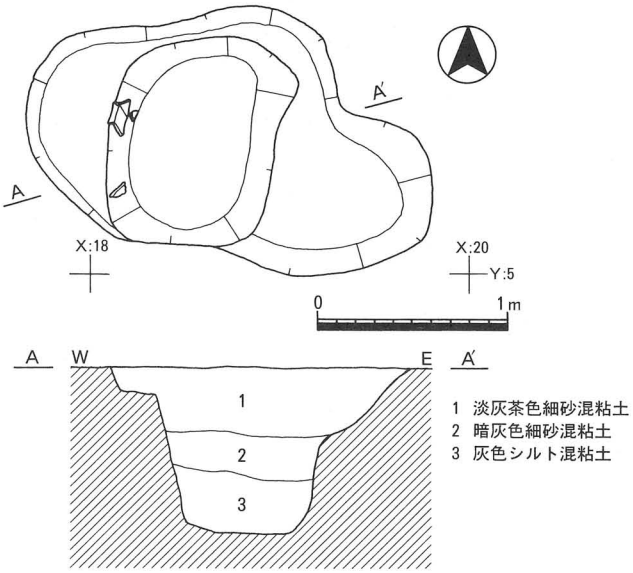
第６図　ＮＲ－１（１）出土遺物実測図

に施し、半截竹管の斜方向の文様と曲線的文様を施す。縄文時代中期の船元式と思われる。

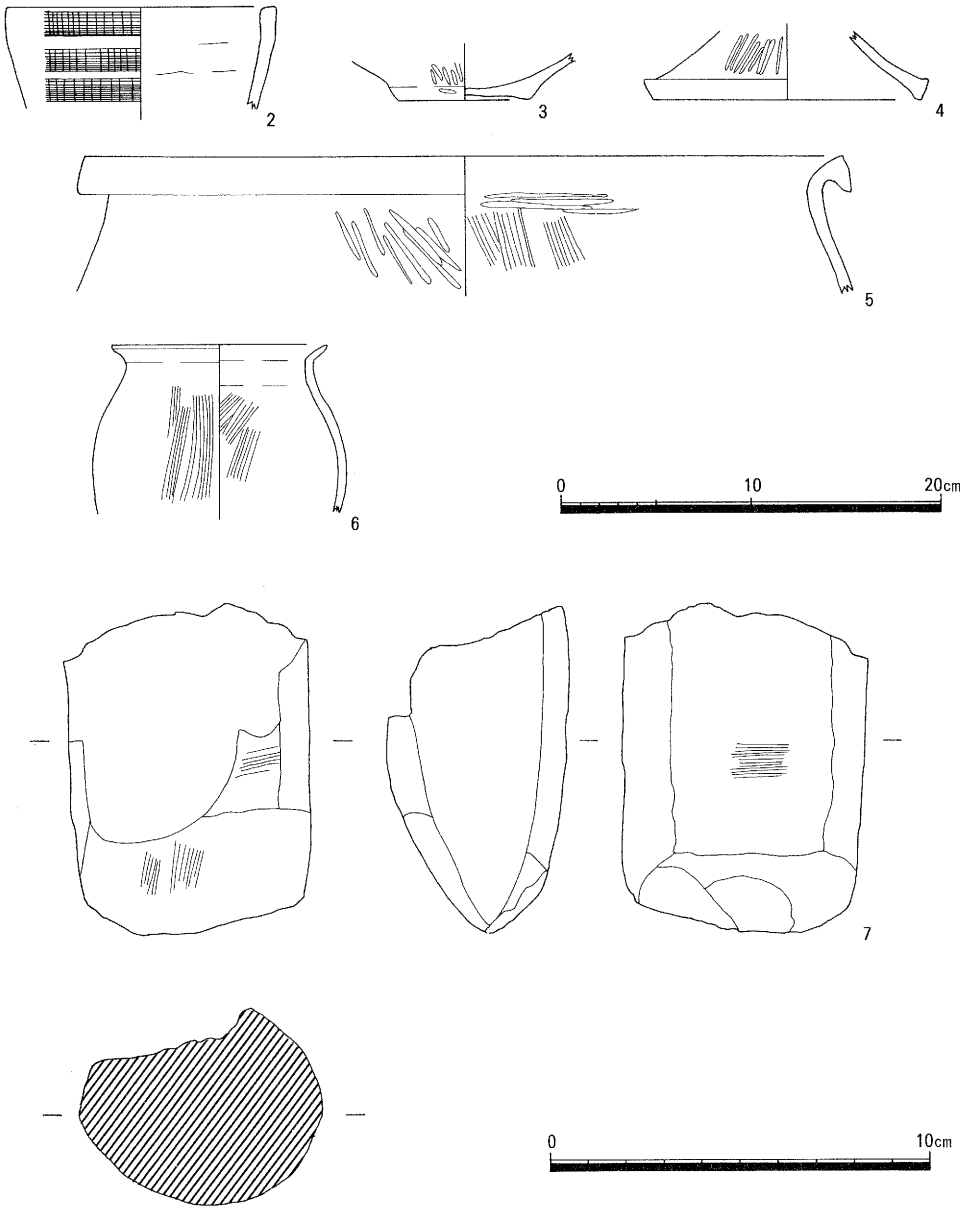
井戸（ＳＥ）

ＳＥ－１

第Ⅰ区で検出した。平面の形状は、不定形を呈する。東西幅2.2ｍ、南北幅1.4ｍ、深さ0.85ｍを測る。内部堆積土は上から淡灰茶色細砂混粘土、暗灰色細砂混粘土、灰色シルト混粘土である。井戸内からは弥生時代中期〔河



第７図　ＳＥ－１平断面図



第8図　ＳＥ－１（２～７）出土遺物実測図

内Ⅲ－２様式〕の細頸壺（２）、壺（３）、高坏（４）、甕（５・６）と太型蛤刃石斧（７）が出土している。（２）はやや内傾気味に直立する口縁部。（３）は上げ底状の底部。（４）は高坏の裾部でⅢ様式でも新しい様相をもつ。（５）は大型の甕、（６）は小型の甕で、Ⅲ様式に比定される。（７）の石斧は、刃部に使用したときの剝離がある。

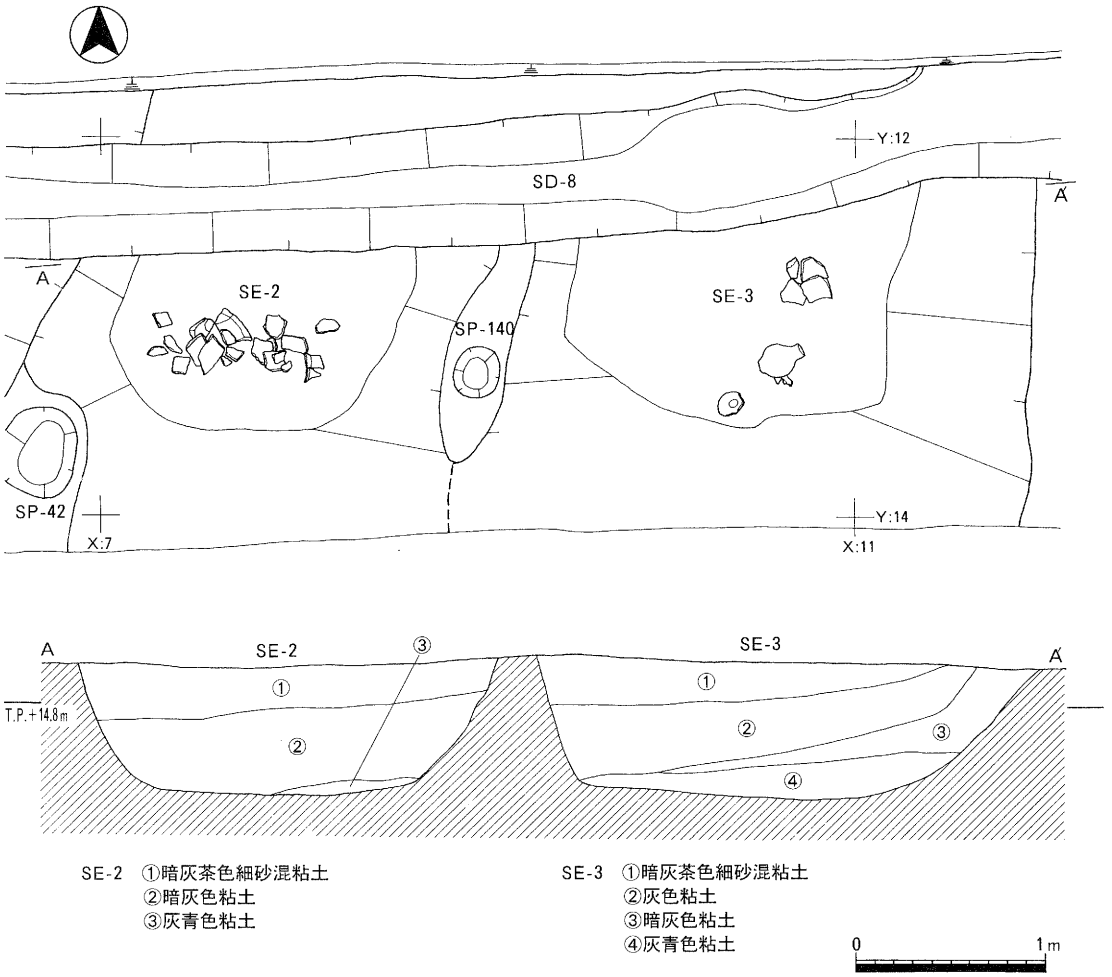
ＳＥ－２

第Ⅱ区で検出した。西部はＳＤ－１・北部はＳＤ－８に切られる。東西幅2.08ｍ、南北幅1.5ｍ、深さ0.91ｍを測る。内部堆積土は上から暗灰茶色細砂混粘土、暗灰色粘土、灰青色粘

土である。灰青色粘土内からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－１様式〕の広口壺（８）、無頸壺（９）、壺（10・11）、甕（12）と石鏃（13）、石槍(14）が出土している。（８）は外反する口縁部で端部は丸みのある面をもつ。（９）は大型の無頸壺で単帯構成の櫛描直線文を縦方向の後横方向に施す。（10）は箆櫛併用文を施すⅡ様式の壺である。（11）は壺の底部。（12）は甕口径が体部最大径より大きい。Ⅱ様式のものである。

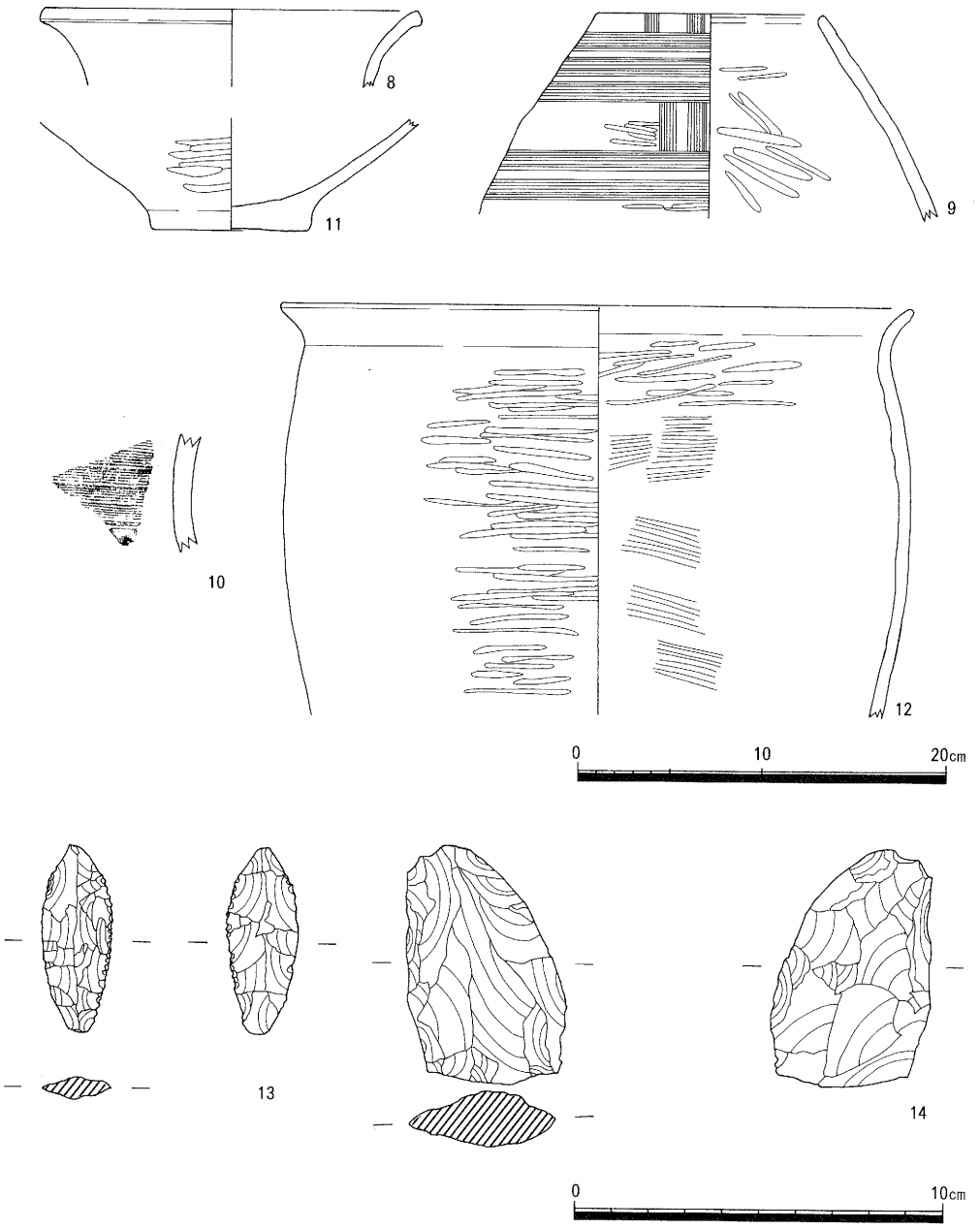
ＳＥ－３

第Ⅱ区で検出した。北部はＳＤ－８に切られる。東西幅2.5ｍ、南北幅1.6ｍ、深さ0.88ｍを測る。内部堆積土は上から暗灰茶色細砂混粘土、灰色粘土、暗灰色粘土、灰青色粘土である。灰青色粘土内からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－２～Ⅲ－２様式〕の壺（15～18）、鉢（19・20）、高坏（21）、甕（22）小形甕（23）、砥石（24）が出土している。（15）は口縁端部を下外方に垂下させる広口壺。Ⅲ様式と思われる。（16）は口縁部を下方に拡張する有段口縁の広口壺で、

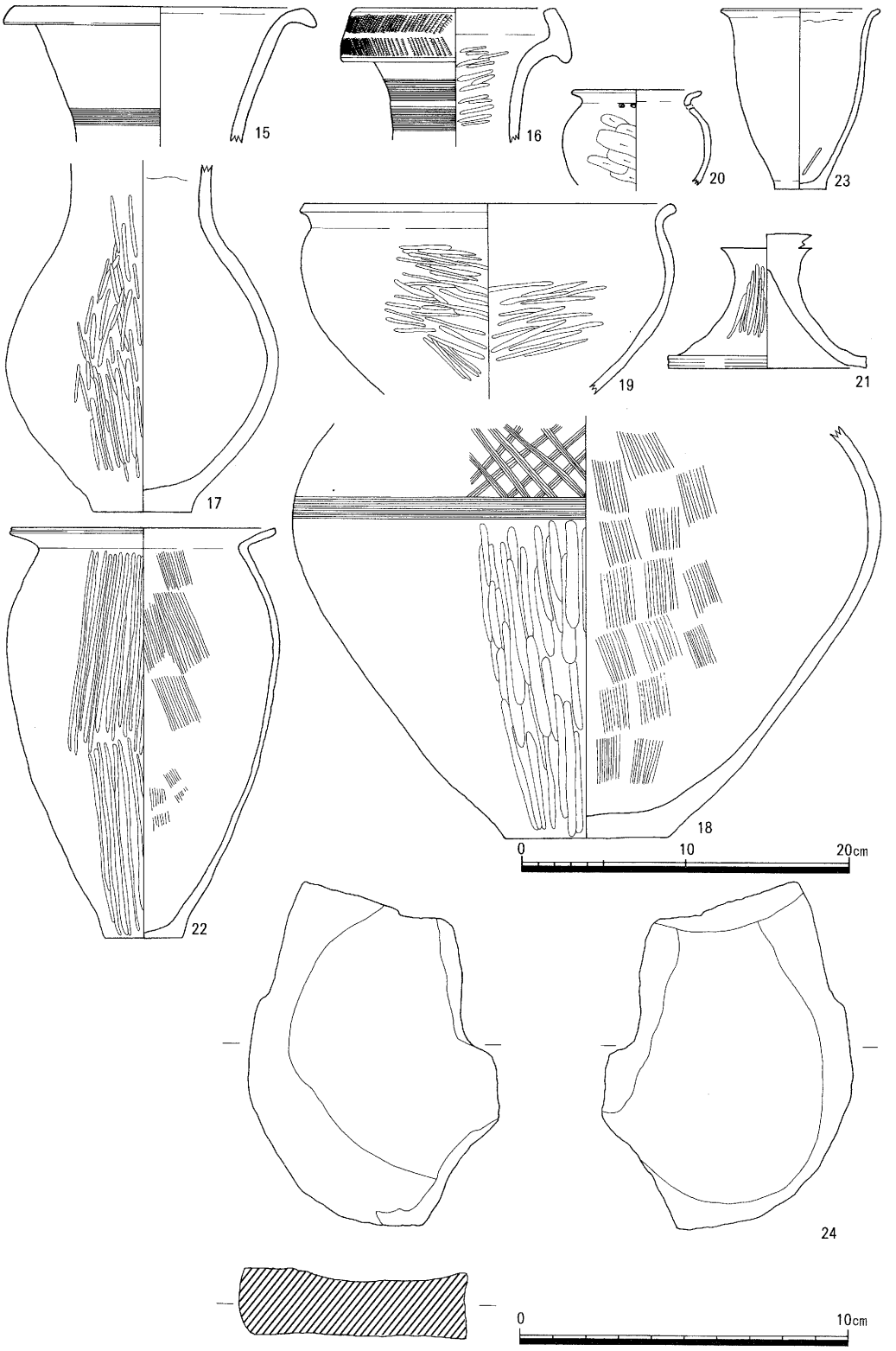


第９図　ＳＥ－２・ＳＥ－３平断面図

内傾の度合いを強める［河内Ⅲ－２様式］。(17) はやや細長い体部に筒状に長くのびた頸部がつく丈高の長頸の広口壺［河内Ⅱ－２様式］。(18) は体部の最大径が上位にあり、直線文と斜格子文を施す。Ⅲ様式と思われる。(19) の口縁部端面は肥厚し、体部上半が内傾する［河内Ⅲ－１様式］。(22) 体部最大径が上位にあり、口径を上回る［河内Ⅲ－１様式］。(23) は最大径が口縁にあり、中期でもやや古いと思われる。



第10図　ＳＥ－２（８～14）出土遺物実測図



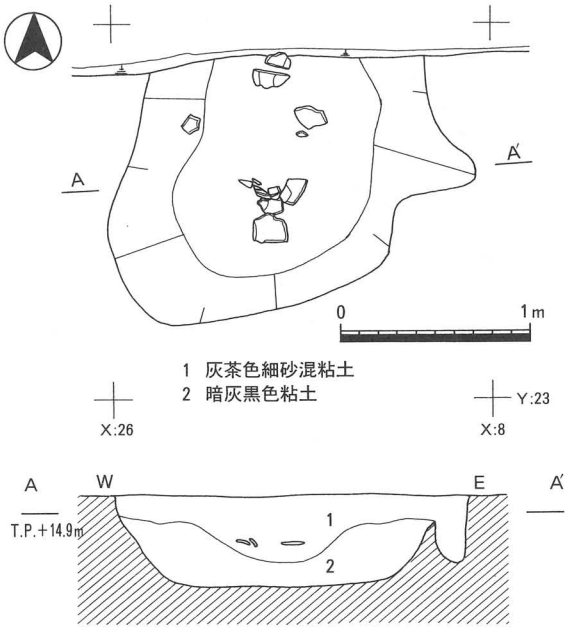
第11図　ＳＥ－３（15～24）出土遺物実測図

ＳＥ－４

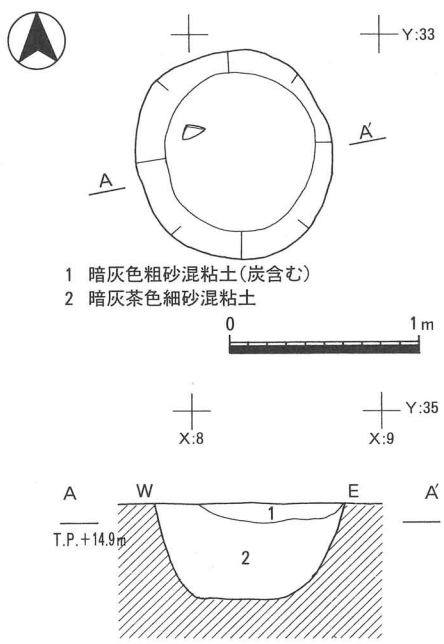
第Ⅲ区で検出した。北部は調査区外に至る。東西幅1.9ｍ、南北幅1.4ｍ、深さ0.5ｍを測る。内部堆積土は上から灰茶色細砂混粘土、暗灰黒色粘土である。暗灰黒色粘土内からは弥生時代前期末～中期初頭頃の壺（25）、甕（26）が出土している。

ＳＥ－５

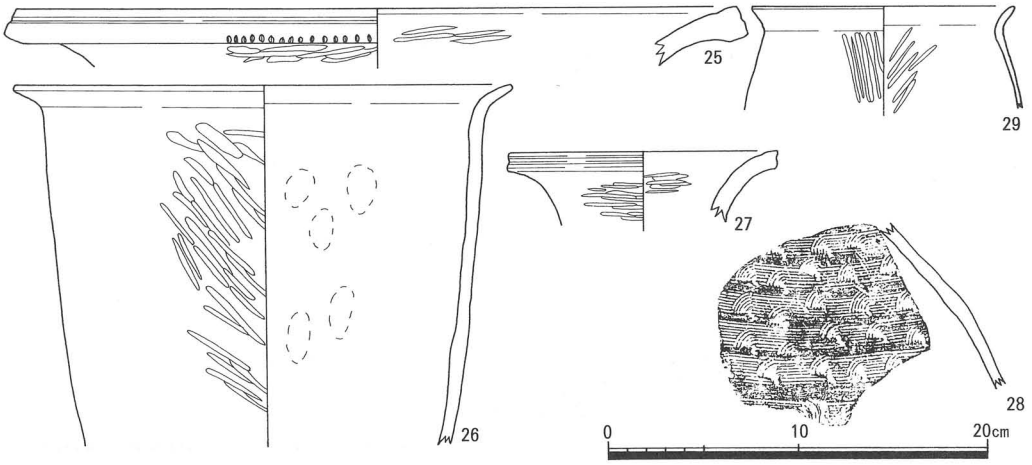
第Ⅳ区で検出した。平面の形状は、円形を呈する。径1.0ｍ、深さ0.5ｍを測る。内部堆積土は上から暗灰色粗砂混粘土（炭含む）、暗灰茶色細砂混粘土である。暗灰茶色細砂混粘土内からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－２様式〕の壺（27・28）、甕（29）が出土している。



第12図　ＳＥ－４平断面図



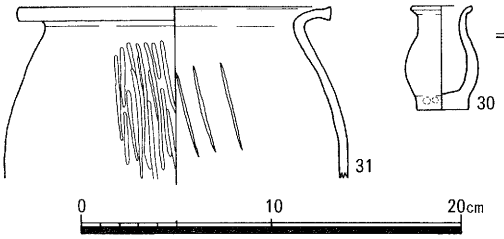
第13図　ＳＥ－５平断面図



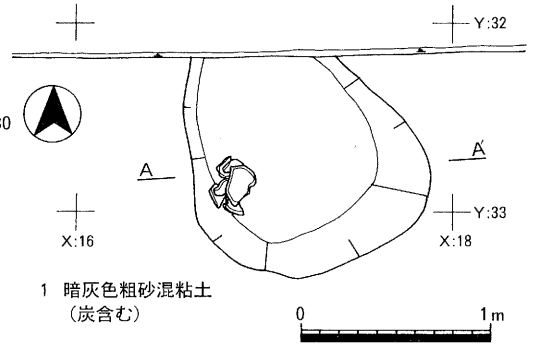
第14図　ＳＥ－４（25・26）ＳＥ－５（27～29）出土遺物実測図

ＳＥ－６

第Ⅳ区で検出した。平面の形状は、南北方向に長い楕円形を呈する。東西幅1.3ｍ、南北幅1.4ｍ、深さ0.57ｍを測る。内部堆積土は上から暗灰色粗砂混粘土（炭含む）である。暗灰色粗砂混粘土内からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－3様式〕のミニチュア壺（30）、甕（31）が出土している。



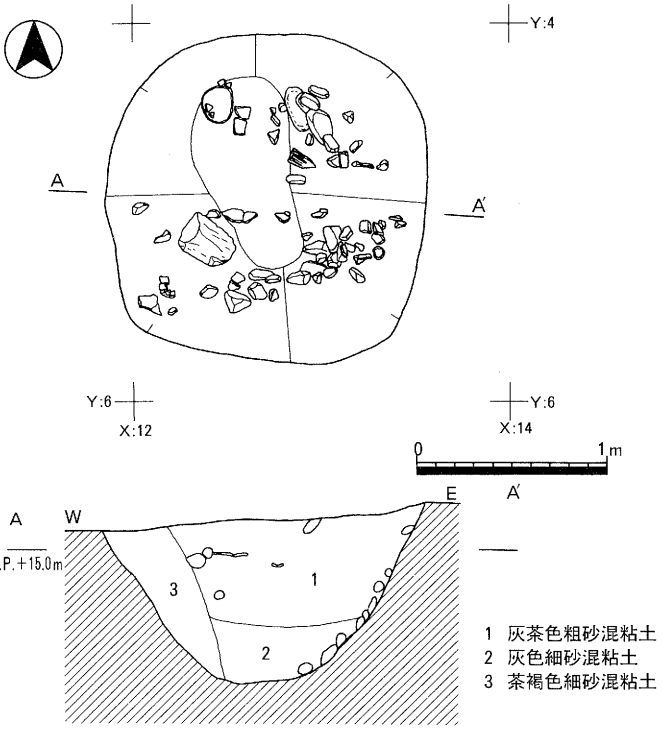
第16図　ＳＥ－６（30・31）出土遺物実測図



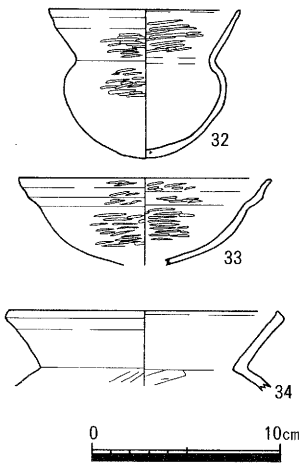
第15図　ＳＥ－６平断面図

ＳＥ－７

第Ⅰ区で検出した。平面の形状は、円形を呈する。径1.7ｍ、深さ0.95ｍを測る。内部堆積土は上から灰茶色粗砂混粘土、灰色細砂混粘土、茶褐色細砂混粘土である。茶褐色細砂混粘土内からは古墳時代前期［布留式期古相］の小形壺（32）、小形鉢（33）、甕（34）が出土している。（32）は体部径より口径が大きい。（33）は二段に屈曲する。（34）は「く」字に屈曲し外反する口縁部をもつ。



第17図　ＳＥ－７平断面図

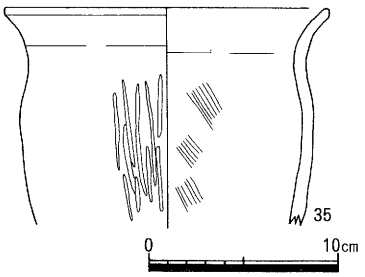


第18図　ＳＥ－７（32～34）出土遺物実測図

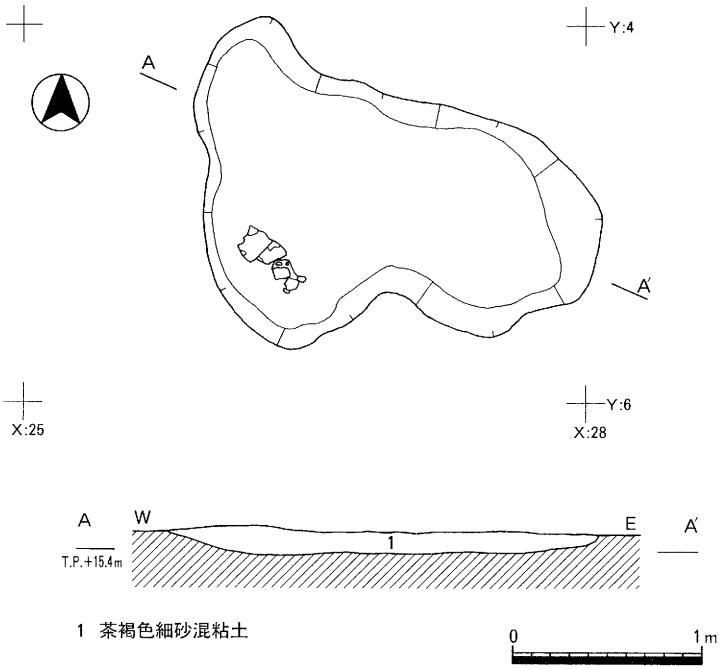
土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

第Ⅰ区で検出した。平面の形状は東西方向に長い不定形で、東西幅2.2ｍ、南北幅1.4ｍ、深さ0.15ｍを測る。内部堆積土は茶褐色細砂混粘土である。土坑内からは弥生時代中期の甕（35）が出土している。（35）は体部径が口径を上回らない。Ⅱ様式の古い様相をもつ。



第20図　ＳＫ－１(35)出土遺物実測図



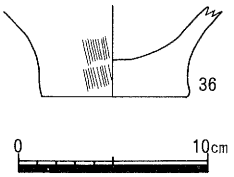
第19図　ＳＫ－1平断面図

ＳＫ－２

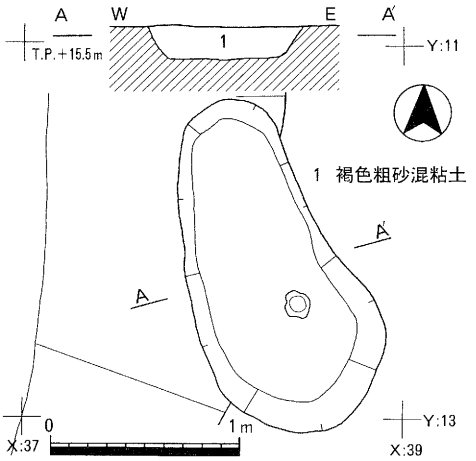
第Ⅱ区で検出した。平面の形状は南北方向に長い楕円形で、東西幅0.96ｍ、南北幅1.85ｍ、深さ0.14ｍを測る。内部堆積土は褐色粗砂混粘土である。土坑内からは弥生時代中期の壺（36）が出土している。

ＳＫ－３

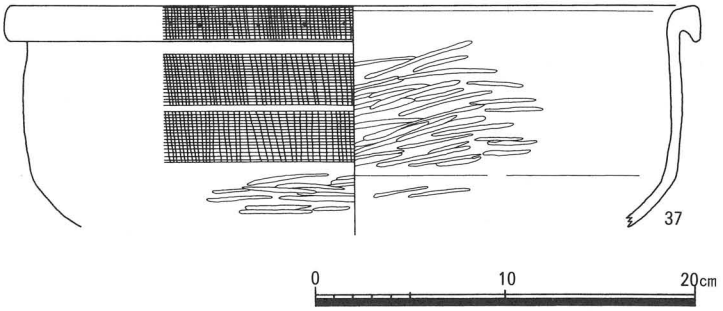
第Ⅲ区で検出した。検出した平面の形状は円形で、径0.7ｍ、深さ0.36ｍを測る。内部堆積土は上から灰褐色細砂混粘土、灰色粘土である。土坑内からは弥生時代中期〔河内Ⅲ－２様式〕の鉢（37）が出土している。（37）は口縁部を垂下させ簾状文と刺突文を施す。



第22図　ＳＫ－２（36）出土遺物実測図



第21図　ＳＫ－２平断面図



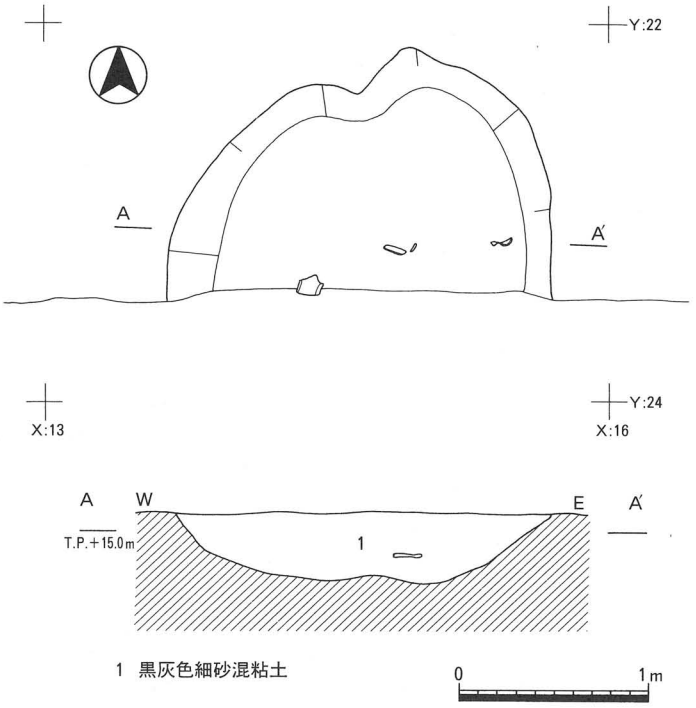
第23図　ＳＫ－３（37）出土遺物実測図

ＳＫ－４

第Ⅲ区で検出した。平面の形状は円形で、径0.74ｍ、深さ0.1ｍを測る。内部堆積土は茶褐色細砂混粘土である。土坑内からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ－５

第Ⅲ区で検出した。平面の形状は半円形で、遺構の規模は、南側が調査区外に至るため不明である。深さ0.37ｍを測る。内部堆積土は黒灰色細砂混粘土で、内部からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－1様式〕の鉢（38）、甕（39・40）が出土している。（38）は直立し端部は面をもつ。（39・40）は口径と体部径がほぼ同じである。



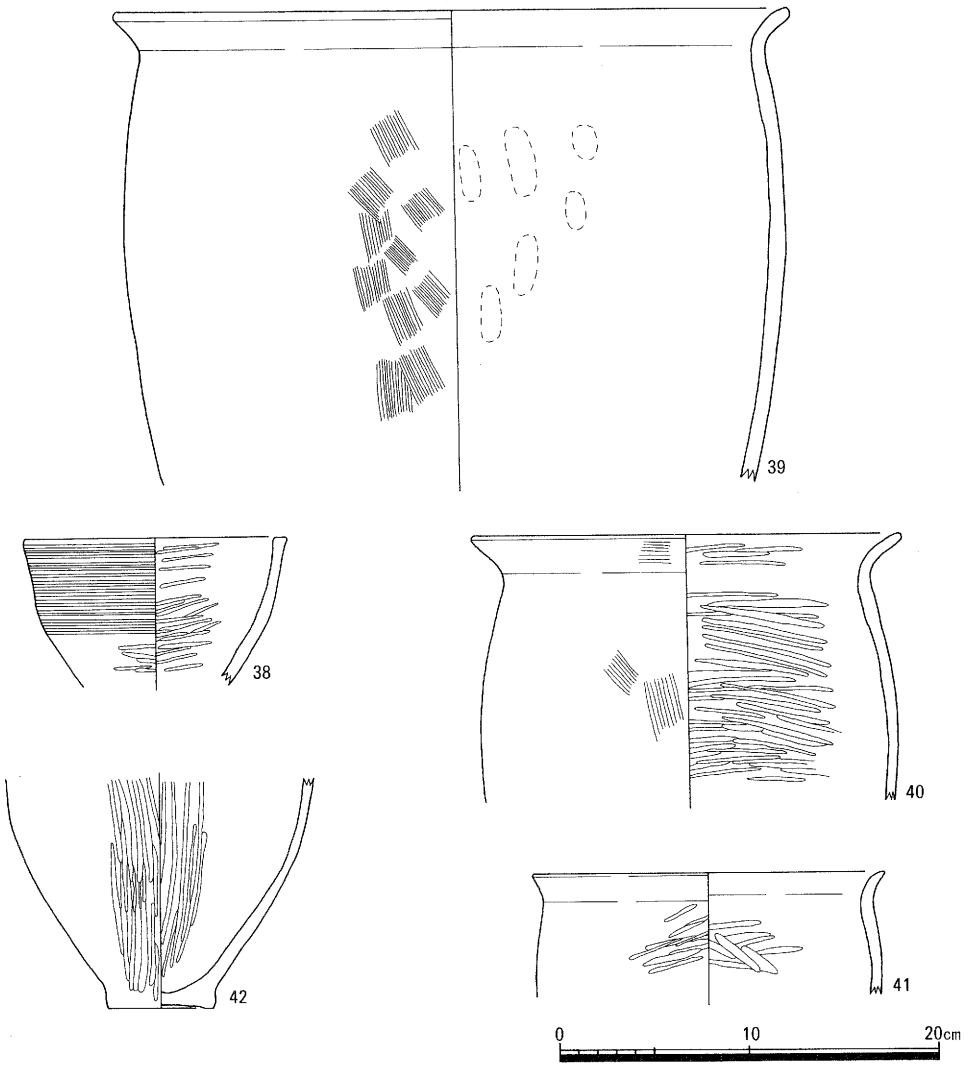
第24図　ＳＫ－５平断面図

ＳＫ－６

第Ⅲ区で検出した。平面の形状は東西方向に長い楕円形で、東西幅0.75ｍ、南北幅0.36ｍ、深さ0.2ｍを測る。内部堆積土は上から暗茶褐色細砂混粘土、黒灰色シルト混粘土である。土坑内からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ－７

第Ⅲ区で検出した。平面の形状は南北方向に長い楕円形で、東西幅0.5ｍ、南北幅0.7ｍ、深さ0.12ｍを測る。内部堆積土は上から暗茶褐色細砂混粘土、茶灰色細砂混粘質土である。土坑



第25図　ＳＫ－５（38～40）ＳＫ－８（41）ＳＫ－９（42）出土遺物実測図

内からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ－８

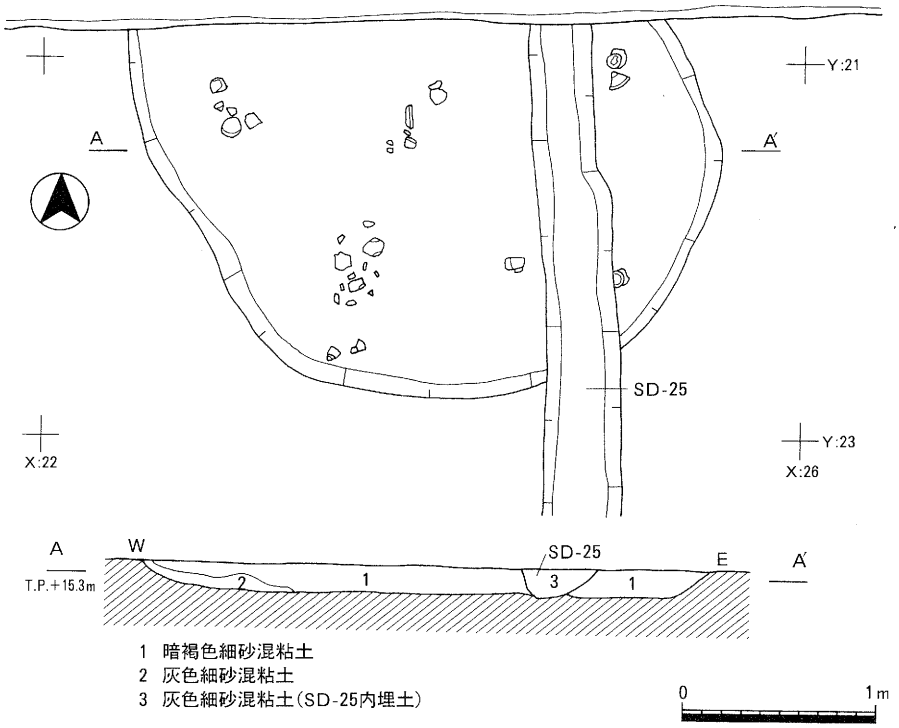
第Ⅲ区で検出した。平面の形状は隅丸の方形で、遺構の規模は、南側が調査区外に至るため不明である。深さ0.1ｍを測る。内部堆積土は灰黒色細砂混粘土である。土坑内からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－１様式〕の甕（41）が出土した。（41）は口径と体部径がほぼ同じ。ヘラミガキの幅は不揃いである。

ＳＫ－９

第Ⅲ区で検出した。平面の形状は南北方向に長い楕円形で、東西幅0.66ｍ、南北幅1.36ｍ、深さ0.14ｍを測る。内部堆積土は灰黒色細砂混粘土である。土坑内からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－２様式〕の甕（42）が出土した。（42）は器壁が薄く体部のふくらみがめだつ。

ＳＫ－10

第Ⅲ区で検出した。平面の形状は半楕円形で、遺構の規模は、北側が調査区外に至るため不明である。深さ0.15ｍを測る。内部堆積土は上から暗褐色細砂混粘土、灰色細砂混粘土である。土坑内からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－１様式〕の壺（43）、高坏（44）、甕（45）、〔河内Ⅲ－１様式〕の甕（46）、石槍（47）、石鏃（48）が出土している。（43）は端部に面をもつ。波状文、



第26図　ＳＫ－10平断面図

直線文を施す。（44）は中実の高坏。（45）は体部最大径より口径が大きい。（46）は体部最大径が口縁を上回る。

ＳＫ－11

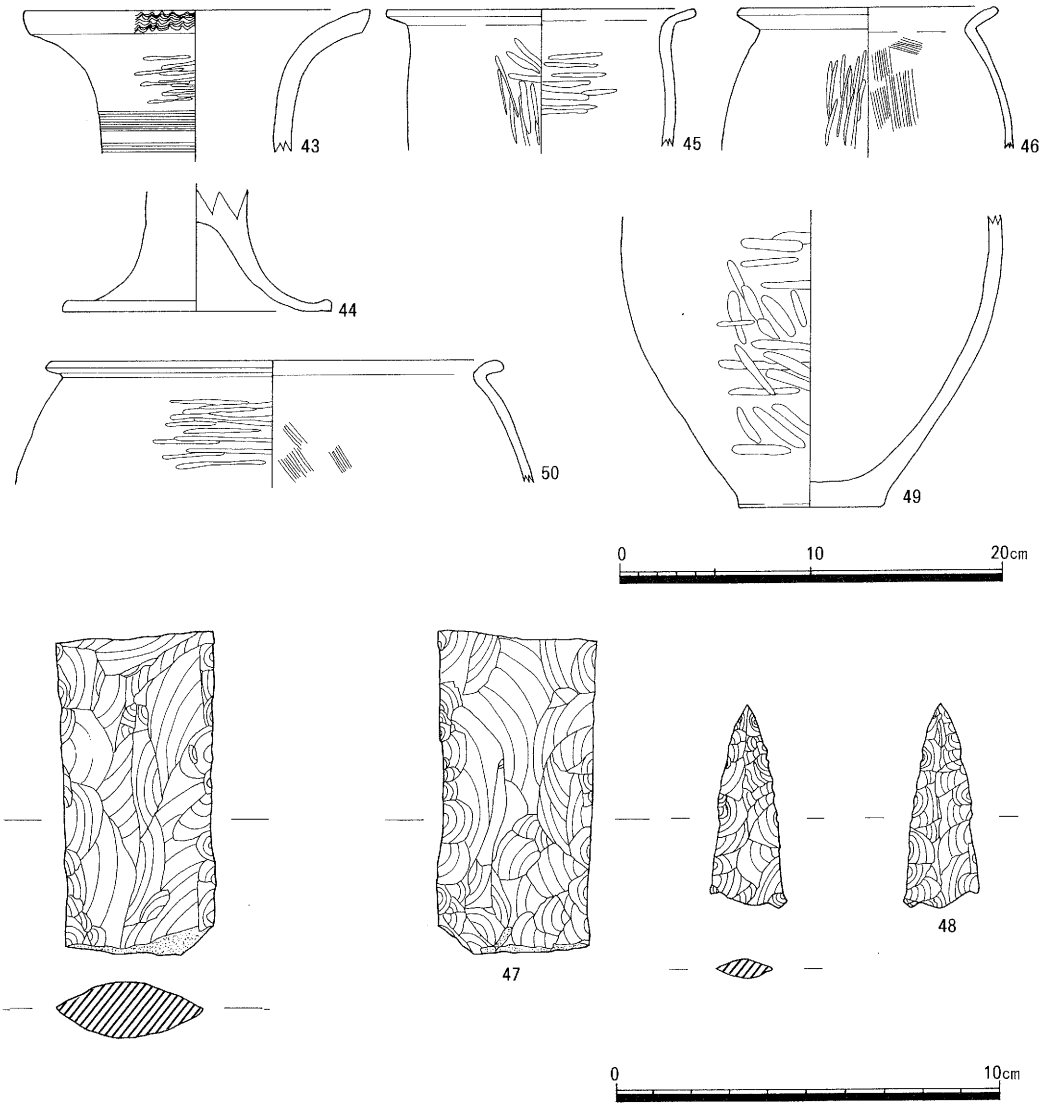
第Ⅲ区で検出した。平面の形状は南北方向に長い楕円形で、東西幅0.34ｍ、南北幅0.72ｍ、深さ0.25ｍを測る。内部堆積土は暗灰色細砂混粘土である。土坑内からの遺物の出土はなかった。

ＳＫ－12

第Ⅲ区で検出した。平面の形状は南北方向に長い楕円形で、東西幅0.5ｍ、南北幅1.2ｍ、深さ0.15ｍを測る。内部堆積土は灰茶色細砂混粘土である。土坑内からは弥生時代中期の壺（49）が出土している。（49）は球形の体部。河内Ⅱ－１からⅡ－３様式の壺と思われる。

ＳＫ－13

第Ⅲ区で検出した。平面の形状は東西方向に長い楕円形で、東西幅0.55ｍ、南北幅0.66ｍ、

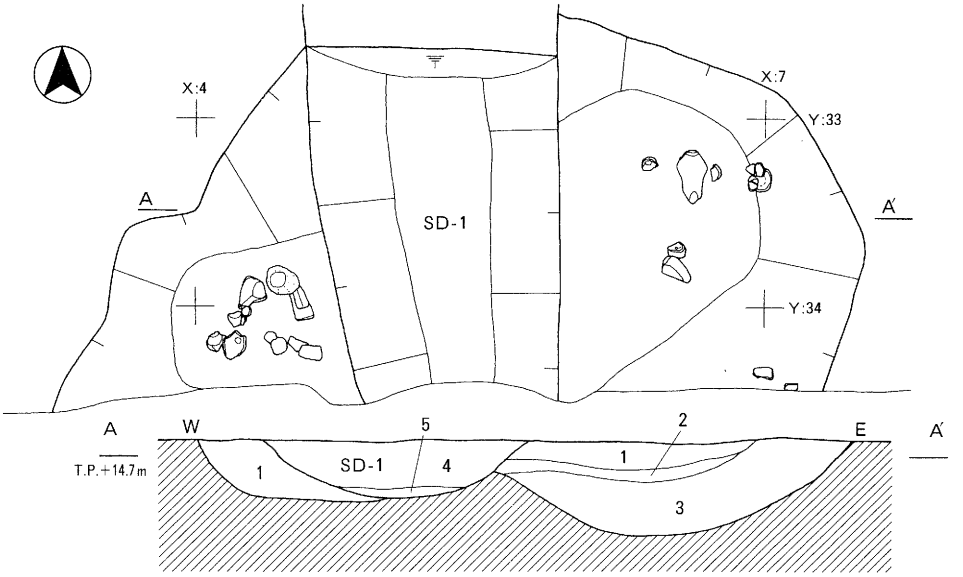


第27図　ＳＫ－10（43～48）ＳＫ－12（49）ＳＫ－13（50）出土遺物実測図

深さ0.24ｍを測る。内部堆積土は暗灰褐色細砂混粘土である。土坑内からは弥生時代中期の甕（50）が出土している。（50）は体部最大径が上半にあたり、口径を上回る。Ⅲ様式と思われる。

ＳＫ－14

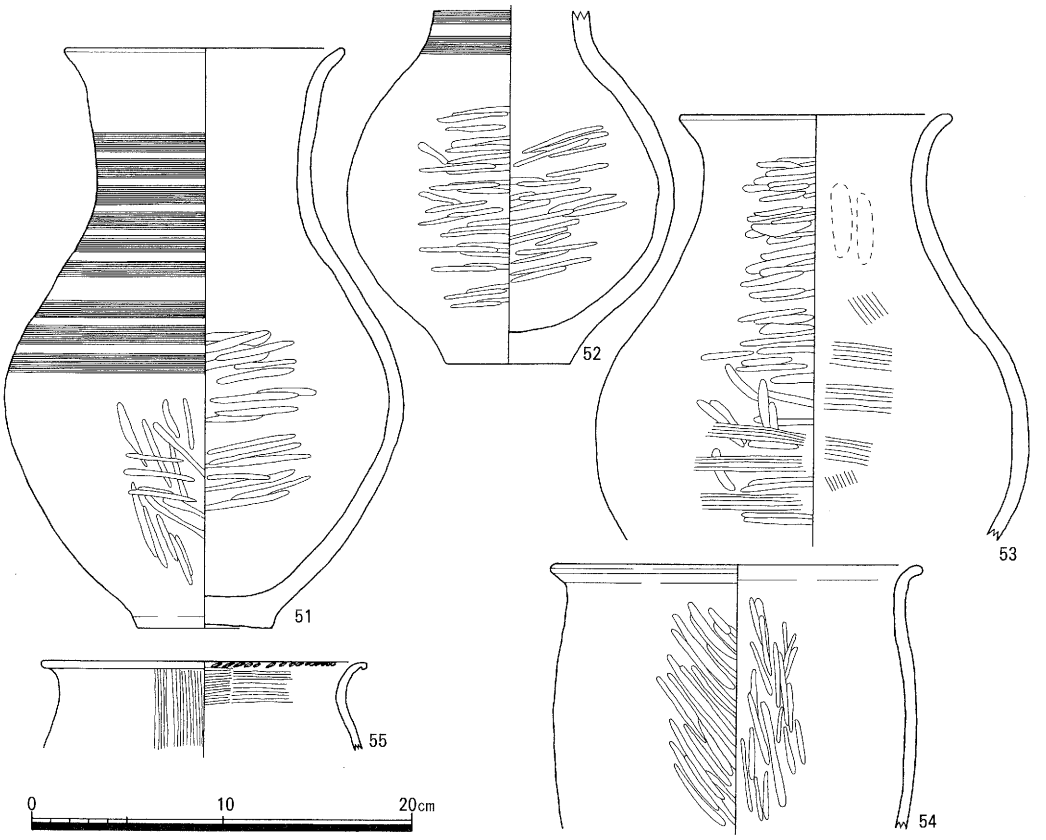
第Ⅳ区で検出した。ＳＤ－１が中央部を南北方向に切り、平面の形状は半楕円形で、遺構の規模は、南側が調査区外に至るため不明である。深さ0.5ｍを測る。内部堆積土は暗灰黒色細砂混粘土、褐色細砂、暗灰色粘土である。土坑内からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－１様式〕の壺（51～53）、甕（54・55）が出土している。（51・53）は算盤玉形に近い球形の体部。直立に立ち上がる頸部から外反する口縁部。丈長の広口壺。（52）は球形の体部から直立に立ち上がる頸部がつく、丈長の広口壺と思われる。（54）は口径と体部最大径がほぼ同じ。ヘラミガキの単



1　暗灰黒色細砂混粘土
2　褐色細砂
3　暗灰色粘土
4　灰色細砂混粘土(SD-1内埋土)
5　灰色粘土　（　〃　）

0　1m

第28図　ＳＫ－14平断面図



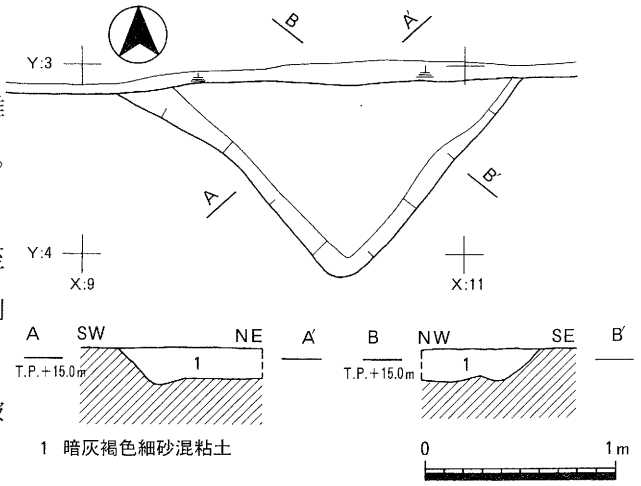
第29図　ＳＫ－14（51～55）出土遺物実測図

位の幅は不揃いである。(55) は内面横方向、外面縦方向のハケ目。口縁端部内面にキザミ目を施す。Ⅱ様式の大和型の甕である。

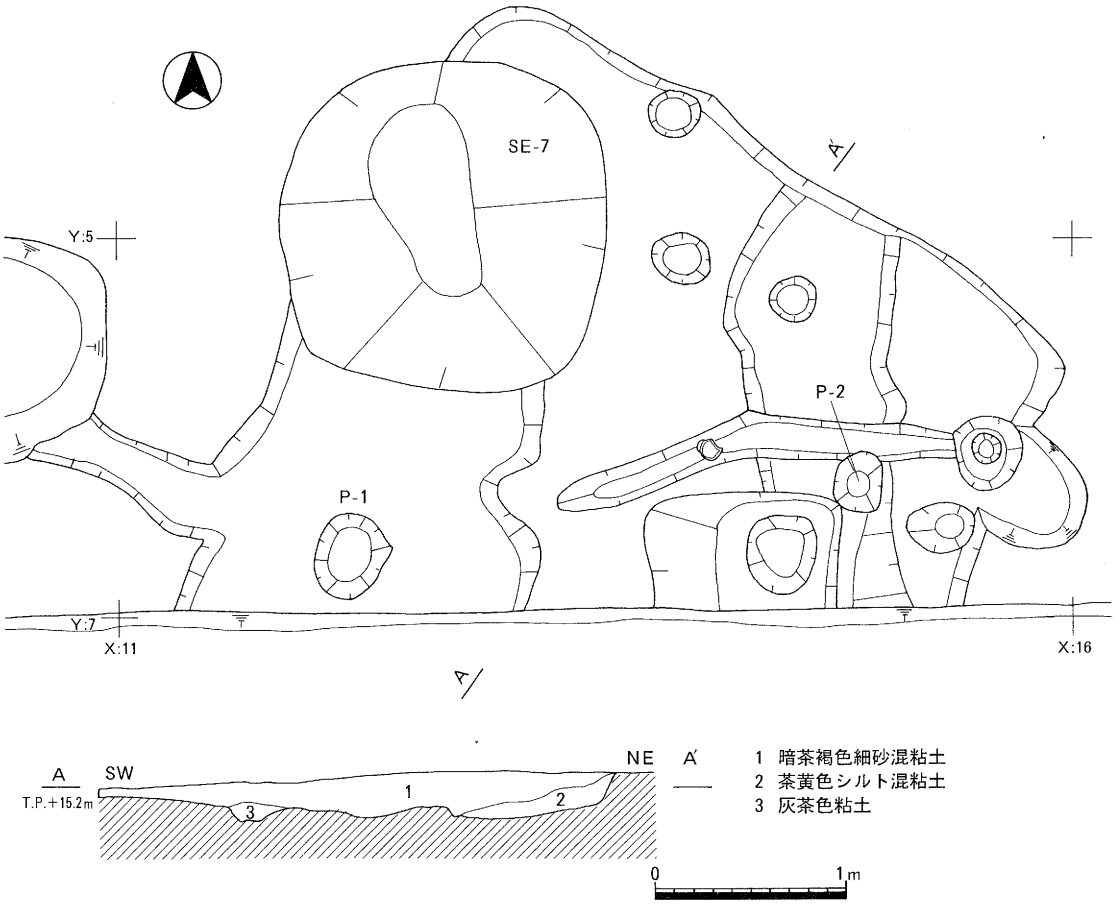
竪穴住居（ＳＩ）

ＳＩ－１

第Ⅰ区で検出した。竪穴住居と推定される南部のコーナーを検出した。平面の形状は隅丸の方形を呈する。遺構の規模は、北側が調査区外に至るため不明である。深さ0.15ｍを測る。埋土は暗灰褐色細砂混粘土で、内部からは弥生時代中期の土器の破片が少量出土している。壁溝状のくぼみが内側に見られた。



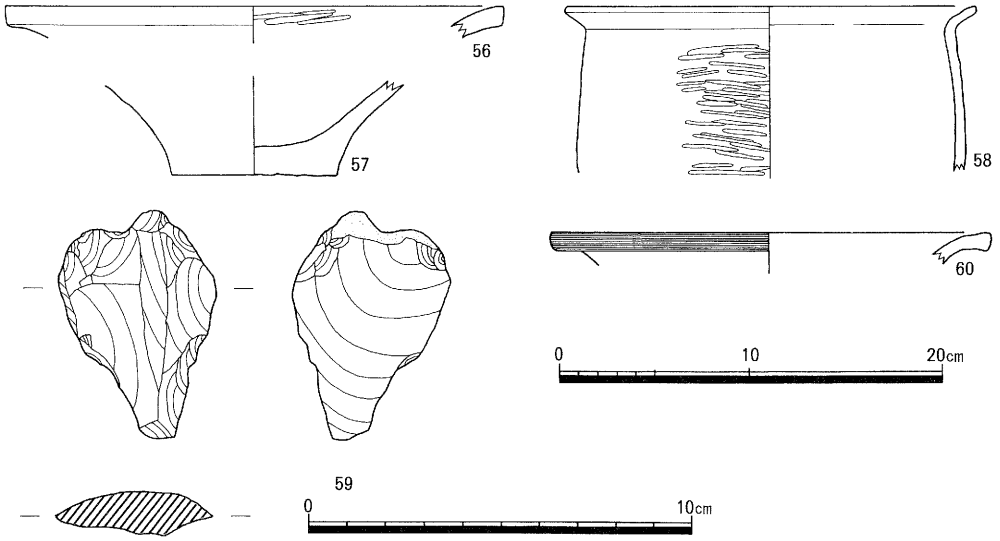
第30図　ＳＩ－１平断面図



第31図　ＳＩ－２平断面図

ＳＩ－２

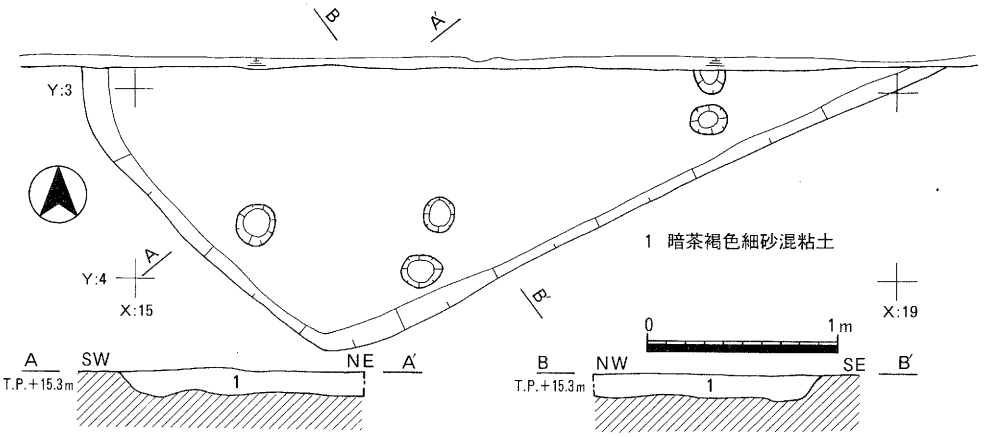
第Ｉ区で検出した。隅丸の方形を呈し、規模は一辺3.6ｍ深さ0.25ｍを測る。床面は東が高く、西が低い。両端の高低差は0.2ｍを測る。埋土は暗茶褐色細砂混粘土、茶黄色シルト混粘土、灰茶色粘土である。主柱穴はＰ－1とＰ－２である。北側の主柱穴はＳＥ－７で切られており、また、南側の主柱穴は調査区の外にあり確認できなかった。内部からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－1様式〕の壺（56・57）、甕（58）、石錐（59）が出土した。（56）は口縁端部に面をもつ。（57）は球形の体部をもつ壺と思われる。（58）は体部最大径と口径がほぼ同じである。



第32図　ＳＩ－２（56～59）ＳＩ－３（60）出土遺物実測図

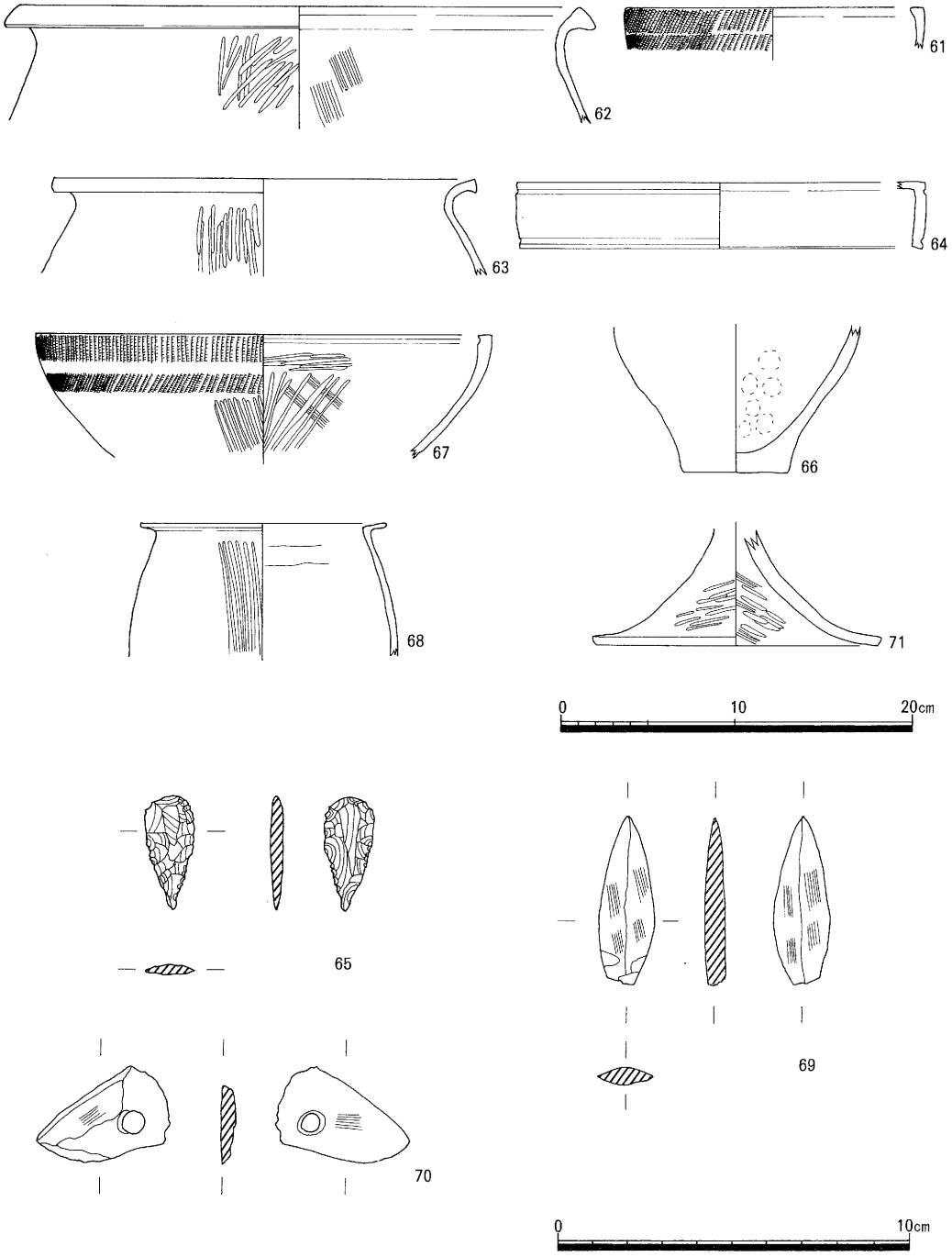
ＳＩ－３

第Ｉ区で検出した。平面の形状は、隅丸の方形を呈する。規模は北側が調査区外に至るため不明である。深さ0.12ｍを測る。床面は東が高く、西が低い。両端の高低差は0.1ｍを測る。



第33図　ＳＩ－３平断面図

埋土は暗茶褐色細砂混粘土で、内部からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－２様式〕の壺（60）が出土した。壁溝状のくぼみが内側に見られた。（60）は口縁端部に面をもち、直線文を施す。



第34図　ＳＰ－13（61・62）ＳＰ－19（63）ＳＰ－23（64）ＳＰ－29（65）ＳＰ－37（66）
ＳＰ－71（67～69）ＳＰ－105（70）ＳＰ－182（71）出土遺物実測図

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１～ＳＰ－195

第Ⅰ区から第Ⅳ区の全域で検出した。平面形状は楕円形と円形が大半で、径0.12～0.88ｍ、深さ0.3～0.45ｍを測る。内部堆積土は下記の表に示した。小穴の中には柱痕が確認できるものも含まれていた。ＳＰ－13内からは弥生時代中期〔河内Ⅳ－1様式〕の細頸壺（61）、甕（62）が、ＳＰ－19内からは弥生時代中期〔河内Ⅳ－1様式〕の甕（63）が、ＳＰ－23内からは弥生時代中期〔河内Ⅳ－２様式〕の高坏（64）が、ＳＰ－29内からは弥生時代中期の石錐（65）が、ＳＰ－37内からは弥生時代中期の壺（66）が、ＳＰ－71内からは弥生時代中期〔河内Ⅳ－1様式〕の高

小穴番号	区	地区	平面形状	径(m)	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	堆積土	出土遺物	備考
SP-1	Ⅰ	1b	円形	0.3			0.06	灰黒色細砂混粘土		
SP-2	Ⅰ	1•2b	楕円形		0.7	0.5	0.05	灰黒色細砂混粘土		
SP-3	Ⅰ	1b	円形	0.27			0.11	灰黒色細砂混粘土		
SP-4	Ⅰ	1b	円形	0.21			0.09	灰黒色細砂混粘土		
SP-5	Ⅰ	1b	円形	0.27			0.11	灰黒色細砂混粘土		
SP-6	Ⅰ	1b	楕円形		0.3	0.24	0.17	灰黒色細砂混粘土		
SP-7	Ⅰ	1b	楕円形		0.32	0.23	0.1	灰黒色細砂混粘土		
SP-8	Ⅰ	1c	楕円形		0.36	0.24	0.19	灰黒色細砂混粘土		
SP-9	Ⅰ	1c	円形	0.28			0.07	灰黒色細砂混粘土		
SP-10	Ⅰ	1e	円形	0.27			0.08	灰黒色細砂混粘土		
SP-11	Ⅰ	2e	円形	0.21			0.1	灰色シルト混粘土		
SP-12	Ⅰ	2e	円形	0.29			0.18	灰色シルト混粘土		
SP-13	Ⅰ	2e	楕円形		0.39	0.32	0.1	灰色シルト混粘土	61•62	
SP-14	Ⅰ	2e	円形	0.29			0.25	灰色シルト混粘土		
SP-15	Ⅰ	2e	円形	0.26			0.1	灰色シルト混粘土		
SP-16	Ⅰ	2e	不定形		0.64	0.46	0.09	灰色シルト混粘土		
SP-17	Ⅰ	2e	円形	0.18			0.1	灰色シルト混粘土		
SP-18	Ⅰ	1e	円形	0.3			0.11	灰色シルト混粘土		
SP-19	Ⅰ	1e	楕円形		0.5	0.28	0.1	灰色シルト混粘土	63	
SP-20	Ⅰ	1e	円形	0.5			0.07	灰色シルト混粘土		
SP-21	Ⅰ	1e	円形	0.22			0.11	灰色シルト混粘土		
SP-22	Ⅰ	1e•f	楕円形		0.9	0.6	0.09	灰色シルト混粘土		
SP-23	Ⅰ	1f	円形	0.22			0.07	灰色シルト混粘土	64	
SP-24	Ⅰ	1f	円形	0.3			0.1	灰色シルト混粘土		
SP-25	Ⅰ	1f	円形	0.2			0.15	灰色シルト混粘土		
SP-26	Ⅰ	1f	楕円形		0.38	0.18	0.2	灰色シルト混粘土		
SP-27	Ⅰ	1f	楕円形		0.42	0.2	0.2	灰色シルト混粘土		
SP-28	Ⅰ	1•2f	円形	0.15			0.14	灰色シルト混粘土		
SP-29	Ⅰ	2f	円形	0.16			0.05	灰色シルト混粘土	65	
SP-30	Ⅰ	2f	円形	0.2			0.15	灰色シルト混粘土		
SP-31	Ⅰ	1f	円形	0.18			0.12	灰色シルト混粘土		
SP-32	Ⅰ	1f	円形	0.23			0.1	灰色シルト混粘土		
SP-33	Ⅰ	1f	円形	0.18			0.14	灰色シルト混粘土		
SP-34	Ⅰ	2f	円形	0.12			0.14	灰色シルト混粘土		
SP-35	Ⅰ	1f	円形	0.16			0.06	灰色シルト混粘土		
SP-36	Ⅰ	1g	円形	0.15			0.1	灰色シルト混粘土		
SP-37	Ⅰ	2f	円形	0.24			0.08	灰色シルト混粘土	66	
SP-38	Ⅱ	3a	楕円形		0.485	0.36	0.168	褐色細砂混粘土		
SP-39	Ⅱ	3a	楕円形		外0.88 内0.46	外0.77 内0.22	外0.365 内0.129	褐色細砂混粘土		
SP-40	Ⅱ	3a	楕円形		0.31	0.22	0.165	褐色細砂混粘土		
SP-41	Ⅱ	3a	円形	0.48			0.12	褐色細砂混粘土		
SP-42	Ⅱ	3b	楕円形		0.47	0.4	0.309	褐色細砂混粘土		
SP-43	Ⅱ	3c	円形	0.22			0.049	褐色細砂混粘土		
SP-44	Ⅱ	3c	円形	0.21			0.151	褐色細砂混粘土		
SP-45	Ⅱ	3c	円形	0.22			0.038	褐色細砂混粘土		
SP-46	Ⅱ	3c	円形	0.13			0.026	褐色細砂混粘土		
SP-47	Ⅱ	3c	楕円形		0.29	0.2	0.103	褐色細砂混粘土		
SP-48	Ⅱ	3c	楕円形		0.34	0.26	0.233	褐色細砂混粘土		
SP-49	Ⅱ	3c	円形	0.31			0.176	褐色細砂混粘土		
SP-50	Ⅱ	3c	楕円形		0.33	0.36	0.13	褐色細砂混粘土		
SP-51	Ⅱ	3c	円形	0.22			0.051	褐色細砂混粘土		
SP-52	Ⅱ	3c	楕円形		0.22	0.18	0.049	褐色細砂混粘土		
SP-53	Ⅱ	3c	楕円形		0.28	0.24	0.063	褐色細砂混粘土		

第２表　小穴法量表（1）

小穴番号	区	地区	平面形状	径(m)	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	堆積土	出土遺物	備考
SP-54	Ⅱ	3c	円形	0.14			0.043	褐色細砂混粘土		
SP-55	Ⅱ	3d	円形	0.19			0.115	褐色細砂混粘土		
SP-56	Ⅱ	3d	円形	0.14			0.26	褐色細砂混粘土		
SP-57	Ⅱ	3d	楕円形		0.38	0.3	0.451	褐色細砂混粘土		
SP-58	Ⅱ	3d	楕円形		0.29	0.24	0.182	褐色細砂混粘土		
SP-59	Ⅱ	3d	円形	0.28			0.132	褐色細砂混粘土		
SP-60	Ⅱ	3d	円形	0.2			0.172	褐色細砂混粘土		
SP-61	Ⅱ	3d	楕円形		0.28	0.25	0.085	褐色細砂混粘土		
SP-62	Ⅱ	3d	円形	0.24			0.17	褐色細砂混粘土		
SP-63	Ⅱ	3d	円形	0.28			0.086	褐色細砂混粘土		
SP-64	Ⅱ	3d	円形	0.2			0.155	褐色細砂混粘土		
SP-65	Ⅱ	3d	円形	0.15			0.064	褐色細砂混粘土		
SP-66	Ⅱ	3d	円形	0.28			0.122	褐色細砂混粘土		
SP-67	Ⅱ	3d	楕円形		0.43	0.2	0.211	褐色細砂混粘土		
SP-68	Ⅱ	3d	円形	0.22				褐色細砂混粘土		
SP-69	Ⅱ	3d・e	楕円形		0.52	0.44		褐色細砂混粘土		
SP-70	Ⅱ	3e	円形	0.28			0.202	褐色細砂混粘土		
SP-71	Ⅱ	3e	楕円形		0.69	0.56	0.318	褐色細砂混粘土	67～69	
SP-72	Ⅱ	3e	長方形		0.64	0.52	0.366	褐色細砂混粘土		
SP-73	Ⅱ	3e	楕円形		0.36	0.25	0.136	褐色細砂混粘土		
SP-74	Ⅱ	3e	円形	0.24			0.276	褐色細砂混粘土		
SP-75	Ⅱ	3e	円形	0.22			0.069	褐色細砂混粘土		
SP-76	Ⅱ	3e	円形	0.24			0.162	褐色細砂混粘土		
SP-77	Ⅱ	3e	円形	0.32			0.196	褐色細砂混粘土		
SP-78	Ⅱ	3e	円形	0.16			0.075	褐色細砂混粘土		
SP-79	Ⅱ	3e	円形	0.3			0.093	褐色細砂混粘土		
SP-80	Ⅱ	3e	円形	0.29			0.357	褐色細砂混粘土		
SP-81	Ⅱ	3e	円形	0.26			0.188	褐色細砂混粘土		
SP-82	Ⅱ	3e	楕円形		0.32	0.2	0.257	褐色細砂混粘土		
SP-83	Ⅱ	3e	円形	0.47			0.2	褐色細砂混粘土		
SP-84	Ⅱ	3e	円形	0.28			0.108	褐色細砂混粘土		
SP-85	Ⅱ	3e	円形	0.23			0.134	褐色細砂混粘土		
SP-86	Ⅱ	3e	円形	0.24			0.108	褐色細砂混粘土		
SP-87	Ⅱ	3e	円形	0.21			0.236	褐色細砂混粘土		
SP-88	Ⅱ	3e	円形	0.16			0.227	褐色細砂混粘土		
SP-89	Ⅱ	3e	円形	0.23			0.193	褐色細砂混粘土		
SP-90	Ⅱ	3e	楕円形		0.2	0.18	0.061	褐色細砂混粘土		
SP-91	Ⅱ	3e	円形	0.31			0.131	褐色細砂混粘土		
SP-92	Ⅱ	3e	円形	0.38			0.313	褐色細砂混粘土		
SP-93	Ⅱ	3e	円形	0.28			0.12	褐色細砂混粘土		
SP-94	Ⅱ	3e	円形	0.22			0.257	褐色細砂混粘土		
SP-95	Ⅱ	3e	円形	0.22			0.09	褐色細砂混粘土		
SP-96	Ⅱ	3e	円形	0.38			0.263	褐色細砂混粘土		
SP-97	Ⅱ	3f	円形	0.24			0.141	褐色細砂混粘土		
SP-98	Ⅱ	3f	楕円形		0.42	0.34	0.26	褐色細砂混粘土		
SP-99	Ⅱ	3f	円形	0.28			0.086	褐色細砂混粘土		
SP-100	Ⅱ	3f	円形	0.2			0.142	褐色細砂混粘土		
SP-101	Ⅱ	3f	楕円形		0.55	0.46	0.385	褐色細砂混粘土		
SP-102	Ⅱ	3f	円形	0.23			0.092	褐色細砂混粘土		
SP-103	Ⅱ	3f	円形	0.17			0.093	褐色細砂混粘土		
SP-104	Ⅱ	3f	円形	0.24			0.144	褐色細砂混粘土		
SP-105	Ⅱ	3f	円形	0.36			0.18	褐色細砂混粘土	70	
SP-106	Ⅱ	3f	円形	0.22			0.101	褐色細砂混粘土		
SP-107	Ⅱ	3f	楕円形		0.38	0.26	0.221	褐色細砂混粘土		
SP-108	Ⅱ	3f	円形	0.18			0.07	褐色細砂混粘土		
SP-109	Ⅱ	3f	円形	0.28			0.128	褐色細砂混粘土		
SP-110	Ⅱ	3f	円形	0.32			0.151	褐色細砂混粘土		
SP-111	Ⅱ	3f	円形	0.68			0.185	褐色細砂混粘土		
SP-112	Ⅱ	3f	楕円形		0.4	0.26	0.19	褐色細砂混粘土		
SP-113	Ⅱ	3f	楕円形		0.39	0.28	0.115	褐色細砂混粘土		
SP-114	Ⅱ	3f	円形	0.24			0.131	褐色細砂混粘土		
SP-115	Ⅱ	3f	円形	0.24			0.198	褐色細砂混粘土		
SP-116	Ⅱ	3f	円形	0.3			0.137	褐色細砂混粘土		
SP-117	Ⅱ	3f	楕円形		0.49	0.29	0.114	褐色細砂混粘土		
SP-118	Ⅱ	3f	楕円形		0.44	0.32	0.236	褐色細砂混粘土		
SP-119	Ⅱ	3f	円形	0.16			0.08	褐色細砂混粘土		
SP-120	Ⅱ	3f	円形	0.37			0.211	褐色細砂混粘土		
SP-121	Ⅱ	3f	楕円形		0.56	0.36	0.284	褐色細砂混粘土		
SP-122	Ⅱ	3f	楕円形		0.71	0.51	0.219	褐色細砂混粘土		
SP-123	Ⅱ	3f	円形	0.3			0.21	褐色細砂混粘土		
SP-124	Ⅱ	3f	円形	0.22			0.171	褐色細砂混粘土		
SP-125	Ⅱ	3f	楕円形		0.38	0.29	0.171	褐色細砂混粘土		
SP-126	Ⅱ	3f	楕円形		0.4	0.24	0.23	褐色細砂混粘土		
SP-127	Ⅱ	3f	楕円形		0.28	0.2	0.178	褐色細砂混粘土		

第３表　小穴法量表（2）

小穴番号	区	地区	平面形状	径(m)	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	堆積土	出土遺物	備考
SP-128	Ⅱ	3f	円形	0.3			0.186	褐色細砂混粘土		
SP-129	Ⅱ	3f	円形	0.4			0.165	褐色細砂混粘土		
SP-130	Ⅱ	3f	楕円形		0.52	0.26	0.185	褐色細砂混粘土		
SP-131	Ⅱ	3f	円形	0.3			0.104	褐色細砂混粘土		
SP-132	Ⅱ	3f	円形	0.25			0.188	褐色細砂混粘土		
SP-133	Ⅱ	3f•g	楕円形		0.26	0.22	0.179	褐色細砂混粘土		
SP-134	Ⅱ	3g	円形	0.17				褐色細砂混粘土		
SP-135	Ⅱ	3g	円形	0.26			0.103	褐色細砂混粘土		
SP-136	Ⅱ	3g	楕円形		外0.54 内0.38	外0.36 内0.14	外0.199 内0.118	褐色細砂混粘土		
SP-137	Ⅱ	3g	円形	0.43			0.045	褐色細砂混粘土		
SP-138	Ⅱ	3f	円形	0.28			0.076	褐色細砂混粘土		
SP-139	Ⅱ	3f	円形	0.2			0.304	褐色細砂混粘土		
SP-140	Ⅱ	3b	円形	0.25			0.262	褐色細砂混粘土		
SP-141	Ⅲ	5a	円形	0.3			0.12	暗褐色細砂混粘土		
SP-142	Ⅲ	5a	円形	0.25			0.21	暗褐色細砂混粘土		
SP-143	Ⅲ	5a	円形	0.36			0.2	暗褐色細砂混粘土		
SP-144	Ⅲ	5a	円形	0.27			0.2	暗褐色細砂混粘土		
SP-145	Ⅲ	5a	円形	0.32			0.26	暗褐色細砂混粘土		
SP-146	Ⅲ	5a	円形	0.28			0.21	暗褐色細砂混粘土		
SP-147	Ⅲ	5b	円形	0.28			0.14	暗褐色細砂混粘土		
SP-148	Ⅲ	5b	円形	0.22			0.14	暗褐色細砂混粘土		
SP-149	Ⅲ	5b	円形	0.19			0.14	暗褐色細砂混粘土		
SP-150	Ⅲ	5b	円形	0.18			0.15	暗褐色細砂混粘土		
SP-151	Ⅲ	5b	円形	0.19			0.07	暗褐色細砂混粘土		
SP-152	Ⅲ	5b	楕円形		0.52	0.38	0.32	暗褐色細砂混粘土		
SP-153	Ⅲ	5b	円形	0.17			0.06	暗褐色細砂混粘土		
SP-154	Ⅲ	5b	楕円形		0.48	0.42	0.16	暗褐色細砂混粘土		
SP-155	Ⅲ	5c	円形	0.21			0.08	暗褐色細砂混粘土		
SP-156	Ⅲ	5c	楕円形		0.8	0.54	0.1	暗褐色細砂混粘土		北側に一段窪みがある。
SP-157	Ⅲ	5c	円形	0.36			0.1	暗褐色細砂混粘土		
SP-158	Ⅲ	5c	円形	0.4			0.12	暗褐色細砂混粘土		
SP-159	Ⅲ	5d	円形	0.24			0.13	暗褐色細砂混粘土		
SP-160	Ⅲ	5d	円形	0.23			0.16	暗褐色細砂混粘土		
SP-161	Ⅲ	5d	円形	0.2			0.12	暗褐色細砂混粘土		
SP-162	Ⅲ	5d	円形	0.24			0.13	暗褐色細砂混粘土		
SP-163	Ⅲ	5d	円形	0.25			0.08	暗褐色細砂混粘土		
SP-164	Ⅲ	5h	楕円形		0.49	0.4	0.08	褐色細砂混粘土		
SP-165	Ⅲ	5h	楕円形		0.46	0.38	0.15	褐色細砂混粘土		
SP-166	Ⅳ	7b	円形	0.35			0.18	灰黒色細砂混粘土		
SP-167	Ⅳ	7c	円形	0.37			0.15	灰黒色細砂混粘土		
SP-168	Ⅳ	7c	楕円形		0.4	0.25	0.2	灰黒色細砂混粘土		
SP-169	Ⅳ	7c	円形	0.25			0.1	灰黒色細砂混粘土		
SP-170	Ⅳ	7c	円形	0.28			0.1	灰黒色細砂混粘土		
SP-171	Ⅳ	7c	円形	0.2			0.15	灰黒色細砂混粘土		
SP-172	Ⅳ	7c	円形	0.19			0.15	灰黒色細砂混粘土		
SP-173	Ⅳ	7c	円形	0.2			0.14	灰黒色細砂混粘土		
SP-174	Ⅳ	7c	円形	0.18			0.04	灰黒色細砂混粘土		
SP-175	Ⅳ	7d	円形	0.12			0.04	灰黒色細砂混粘土		
SP-176	Ⅳ	7d	円形	0.28			0.2	灰黒色細砂混粘土		
SP-177	Ⅳ	7d	円形	0.12			0.12	灰黒色細砂混粘土		
SP-178	Ⅳ	7d	円形	0.22			0.14	灰黒色細砂混粘土		
SP-179	Ⅳ	7d	円形	0.4			0.3	灰黒色細砂混粘土		
SP-180	Ⅳ	7f	円形	0.3			0.22	暗灰色シルト混粘土		
SP-181	Ⅳ	7f	楕円形		0.52	0.32	0.1	暗灰色シルト混粘土		
SP-182	Ⅳ	7f	円形	0.6			0.17	暗灰色シルト混粘土	71	
SP-183	Ⅳ	7f	円形	0.22			0.07	暗灰色シルト混粘土		
SP-184	Ⅳ	7f	円形	0.33			0.12	暗灰色シルト混粘土		
SP-185	Ⅳ	7f	楕円形		0.52	0.36	0.2	暗灰色シルト混粘土		
SP-186	Ⅳ	7f	円形	0.28			0.08	暗灰色シルト混粘土		
SP-187	Ⅳ	7f	円形	0.26			0.14	暗灰色シルト混粘土		
SP-188	Ⅳ	7h	円形	0.3			0.1	暗灰色シルト混粘土		
SP-189	Ⅳ	7h	円形	0.24			0.11	暗灰色シルト混粘土		
SP-190	Ⅳ	7h	楕円形		0.46	0.3	0.04	暗灰色シルト混粘土		
SP-191	Ⅳ	7h	円形	0.34			0.17	暗灰色シルト混粘土		
SP-192	Ⅳ	7h	円形	0.5			0.16	暗灰色シルト混粘土		
SP-193	Ⅳ	7h	円形	0.2			0.08	暗灰色シルト混粘土		
SP-194	Ⅳ	7h	円形	0.45			0.12	暗灰色シルト混粘土		
SP-195	Ⅳ	7h	円形	0.26			0.07	暗灰色シルト混粘土		

第４表　小穴法量表（3）

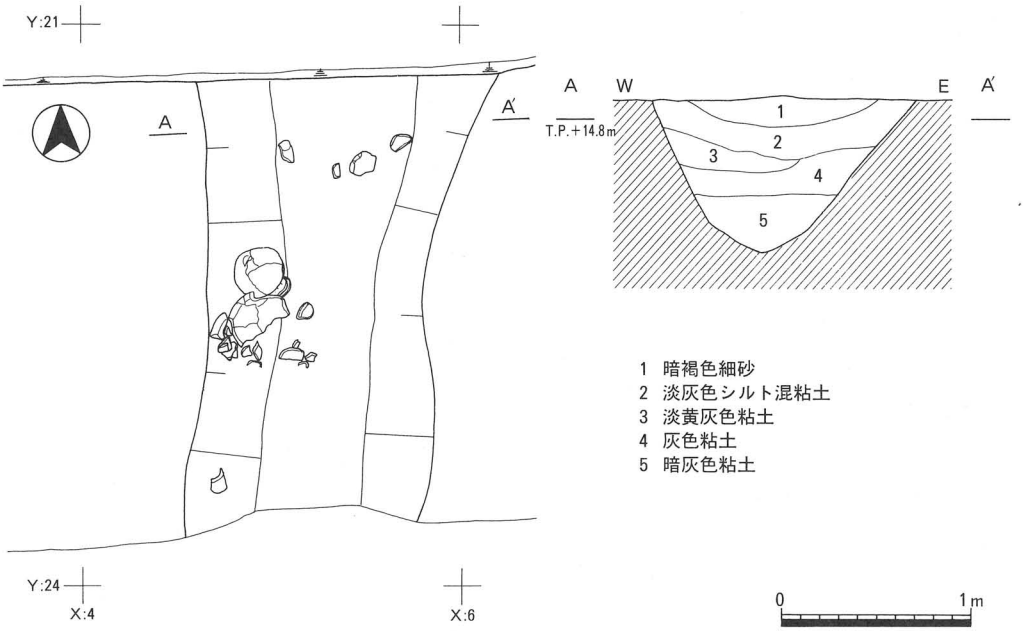
坏（67）、甕（68）、磨製石鏃（69）が、ＳＰ－105内からは弥生時代中期の石包丁（70）、ＳＰ－182内からは弥生時代中期の蓋（71）が出土している。（第2～4表参照）

溝（ＳＤ）

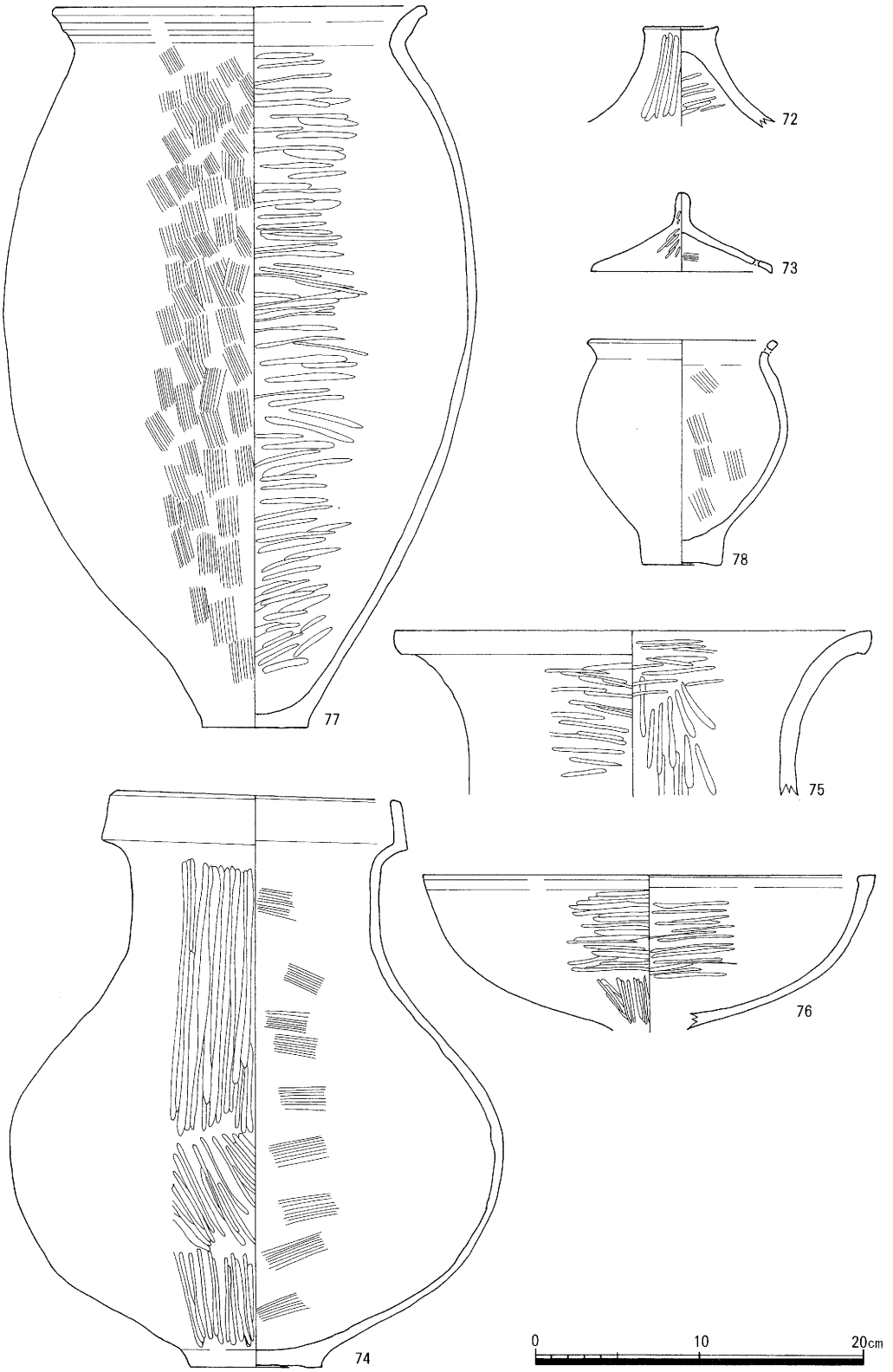
ＳＤ－１

第Ⅰ区～第Ⅳ区で検出した南北方向の溝で、幅1.0～1.8ｍ、深さ0.3～0.8ｍを測る。溝の埋土は暗褐色細砂、淡灰色シルト混粘土、淡黄灰色粘土、灰色粘土、暗灰色粘土で、溝内からは弥生時代中期の蓋（72・73）、壺（74・75）、高坏（76）、甕（77・78）が出土している。（72）は大きく内湾してひろがる、甕用の蓋。Ⅱ～Ⅲ様式と思われる。（73）はハの字にひろがる蓋で、Ⅲ様式と思われる。（74）は受け口状口縁壺。上方のみ拡張する。［河内Ⅲ－１様式］。（75）は口縁端部がやや垂下し、面をもつ。無文の壺。［河内Ⅱ－３様式］。（76）は椀形の高坏。端部を内外に肥厚させて面をもつ。直立気味に立ち上がる口縁部。［河内Ⅳ－１様式］。（77）は「く」字状に外反する口縁部の大形甕。胴部の張りが大きい。［河内Ⅲ－２様式］。（78）は「く」字状に外反する口縁部の小形甕で、（73）が蓋になると思われる。

写真２　第Ⅲ区　ＳＤ－１遺物出土状況（西から）



第35図　第Ⅲ区　ＳＤ－１平断面図

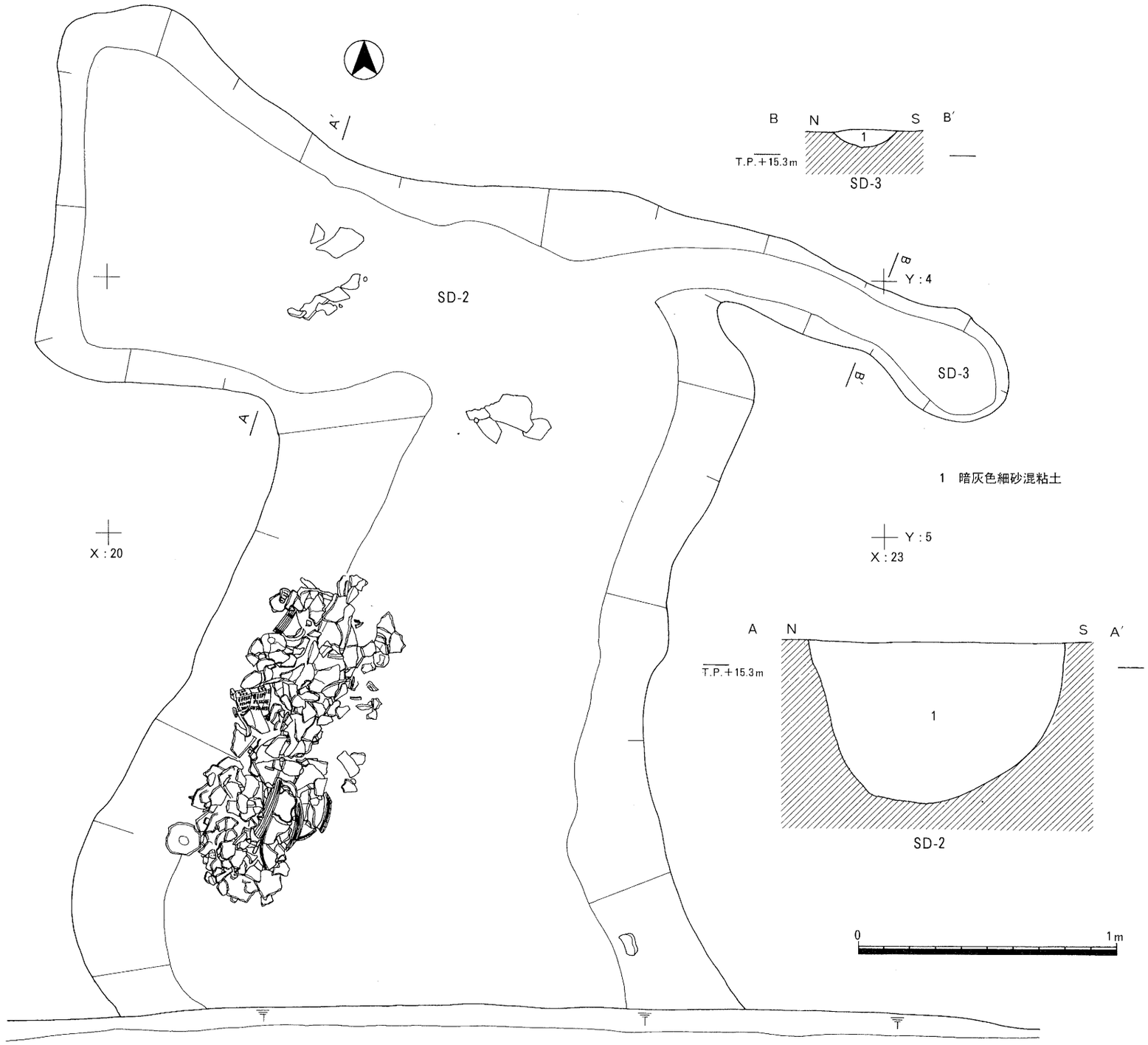


第36図　ＳＤ－１（72～78）出土遺物実測図

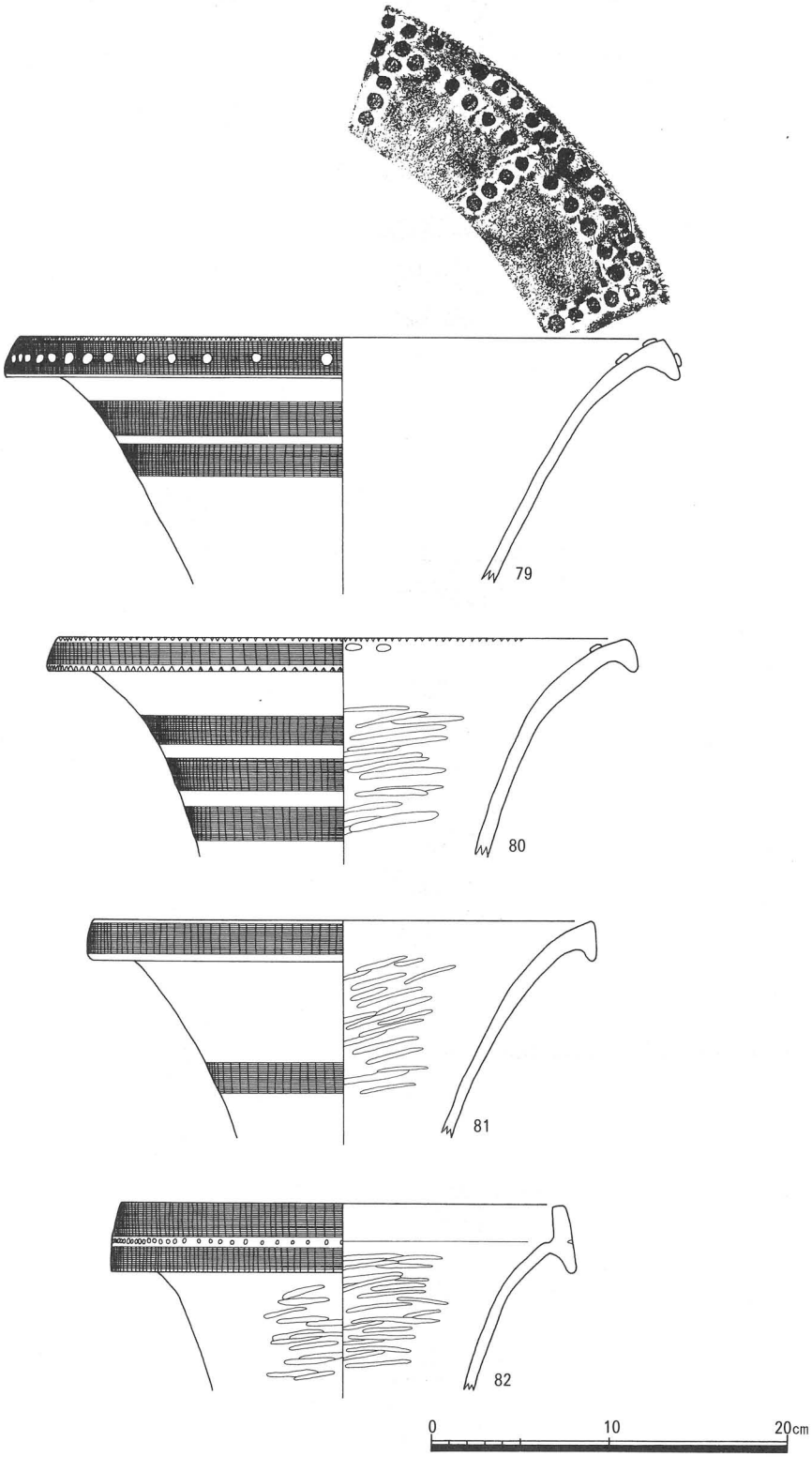
ＳＤ－２

第Ⅰ区で検出した南北方向の溝で、北はＳＤ－３と合流し、南は調査区外に至る。幅1.0～1.6ｍ、深さ0.6ｍを測る。埋土は、暗灰色細砂混粘土で、溝内から弥生時代中期の垂下口縁を持つ壺（79～81）、垂下口縁に内傾する付加状口縁を持つ壺（82・83）、口縁部内外面に加飾を持つ壺（84・85）、大形細頸壺（86・87）、鉢（88・89）、高坏（90）、甕（91・92）、蓋（93）が出土している。（79）は口縁下端が垂下する。口縁部内面の全面に円形浮文を貼り付ける大形広口壺。［河内Ⅳ－３様式］。（80・81）の形態は（79）と同じ。［河内Ⅳ－２～Ⅳ－３様式］。（82）は付加状の口縁をもち、下方部へ大きく垂下する広口壺。［河内Ⅳ－１様式］。（83）の形態は（82）と同じ。長頸の広口壺。［河内Ⅳ－１様式］。（84）は頸部と口縁端面に凹線文を施す。口縁部内面に列点文、円形竹管文を施す。［河内Ⅳ－１～２様式］。（85）は頸部と口縁端面に凹線文を施す。口縁部内面に列点文、波状文を施す。［河内Ⅳ－１～２様式］。（86）の口縁部は内湾し、端部に面をもつ大形の細頸壺。［河内Ⅳ－２様式］。（87）は直立ぎみでやや内湾する口縁部をもつ大形の細頸壺。［河内Ⅳ－１様式］。（88）の口縁部は段状に肥厚して面をもつ。やや内側へ口縁部が傾斜する鉢。［河内Ⅳ－２様式］。（89）の口縁部は段状に肥厚して面をもつ。直立する口縁部をもつ鉢。［河内Ⅳ－２様式］。（90）は口縁端部に面をもつ。櫛描列点を施す高坏。［河内Ⅳ－１様式］。（91）は口縁部が下方に垂下する。Ⅲ～Ⅳ様式と思われる。（92）は外面ハケを施す。口縁部はくびれが鋭く、端面を上方に拡張させる甕。［河内Ⅳ－１様式］。（93）はハの字にひらく。Ⅲ様式の蓋と思われる。

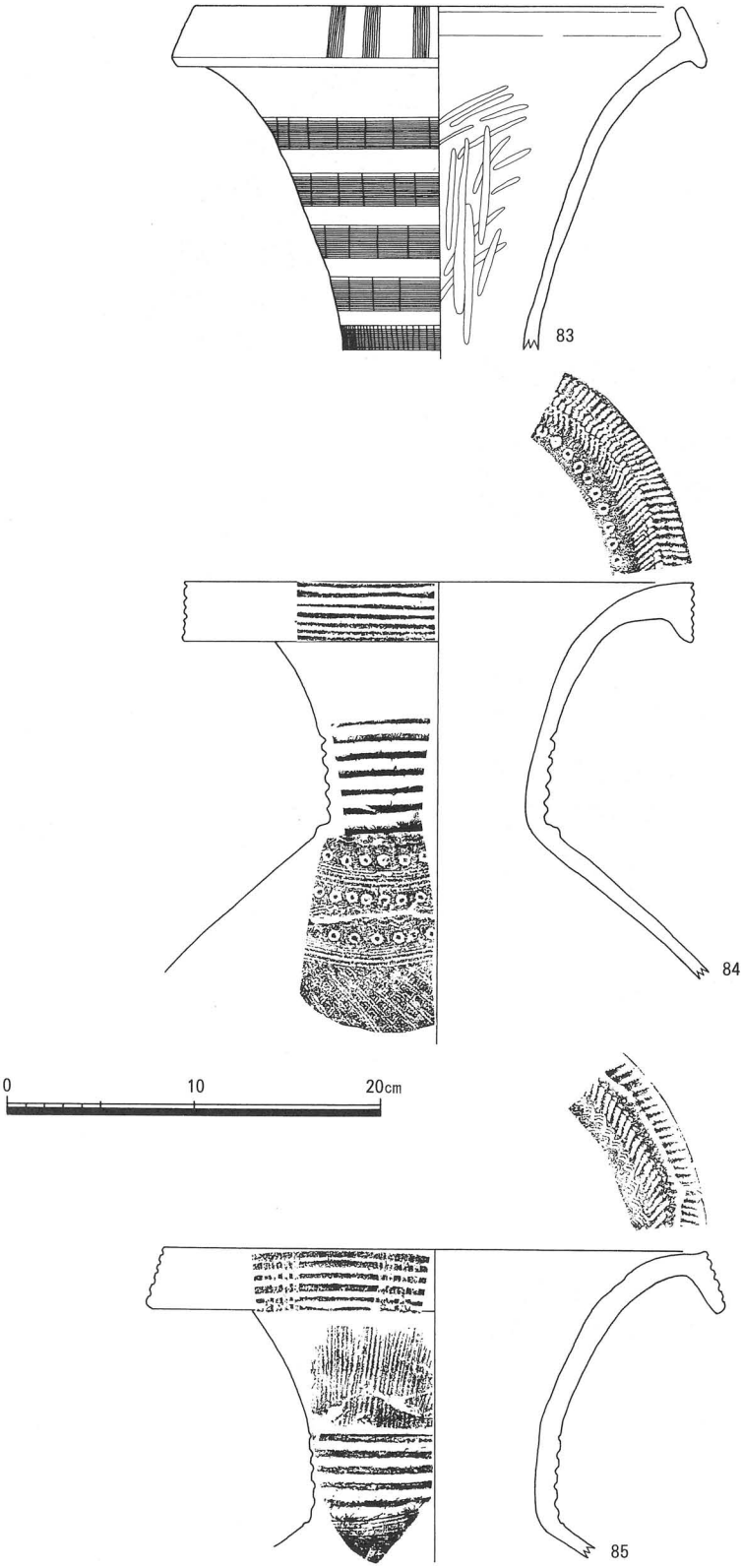
写真３　ＳＤ－２遺物出土状況（西から）



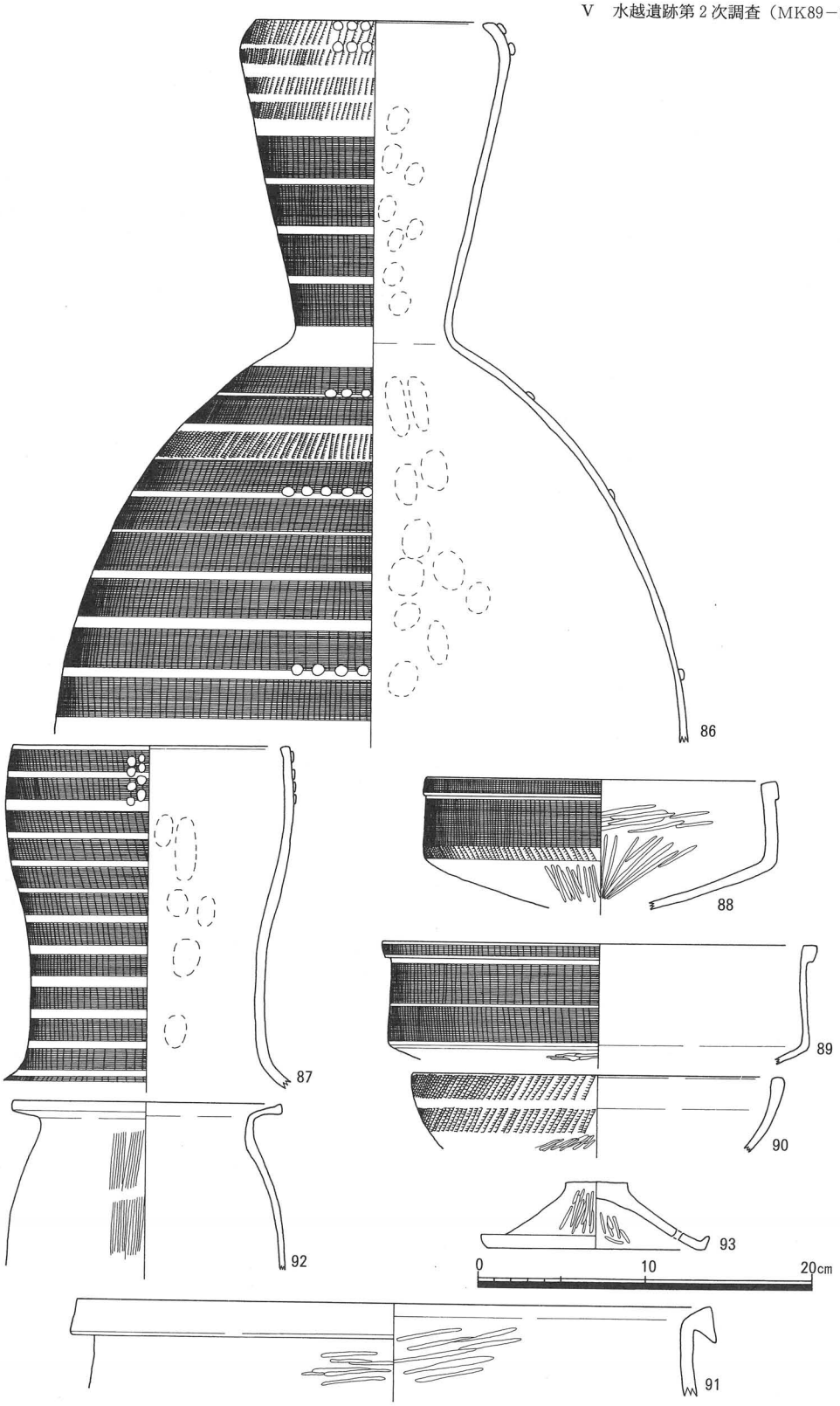
第37図　ＳＤ－２・ＳＤ－３平断面図



第38図　ＳＤ－２（79～82）出土遺物実測図



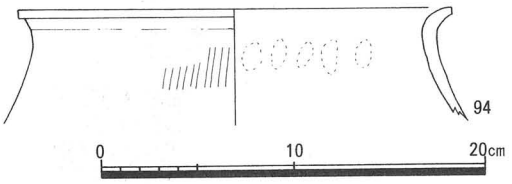
第39図　ＳＤ－２（83～85）出土遺物実測図



第40図　ＳＤ－２（86～93）出土遺物実測図

ＳＤ－３

第Ⅰ区で検出した東西方向の溝で、ＳＤ－２と合流する。幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からは弥生時代中期の甕（94）が出土している。（94）はゆるやかに短く外反する口縁部。粗いハケを施すⅢ様式のものと思われる。



第41図　ＳＤ－３（94）出土遺物実測図

ＳＤ－４

第Ⅰ区で検出した東西方向の溝で、幅0.6ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は灰色粘土で、溝内からは弥生時代中期の土器の破片が少量出土している。

ＳＤ－５

第Ⅰ区で検出した南東－北西方向の溝で、幅0.2ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からの遺物の出土はなかった。

ＳＤ－６

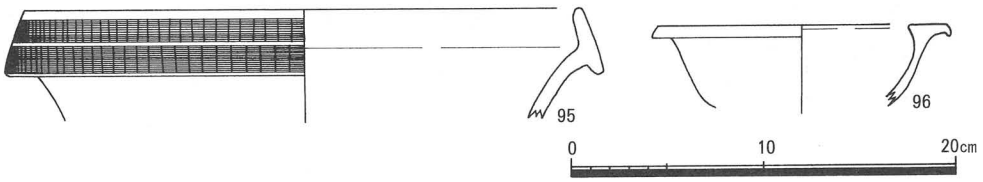
第Ⅰ区で検出した南北方向の溝で、幅0.5ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰色粘土で、溝内からの遺物の出土はなかった。

ＳＤ－７

第Ⅱ区で検出した東西に伸び、東で北へ直角に曲がる溝で、幅0.2～0.65ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からは弥生時代中期の土器の破片が少量出土している。

ＳＤ－８

第Ⅱ区で検出した東西方向の溝で、幅0.4～0.65ｍ、深さ0.25～0.45ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からは弥生時代中期〔河内Ⅲ－1様式〕の壺（95）、高坏（96）が出土した。（95）は有段口縁で下方へ垂下する。（96）は水平口縁をもつ。



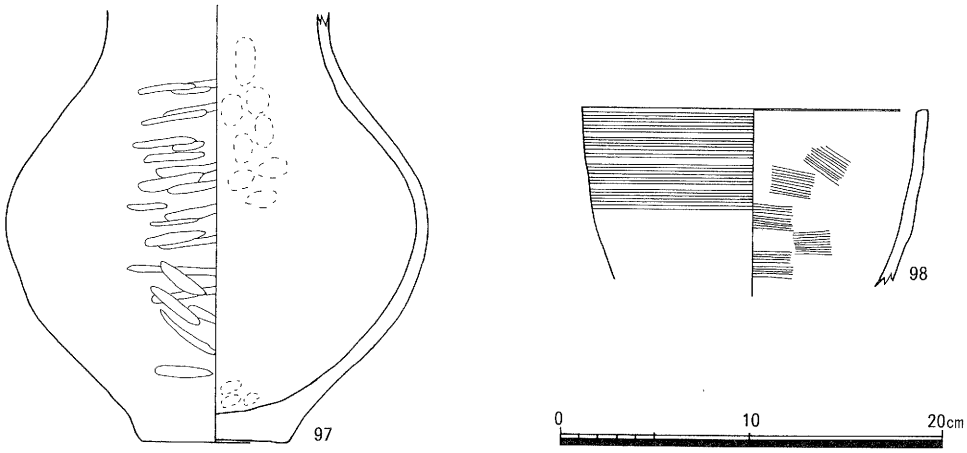
第42図　ＳＤ－８（95・96）出土遺物実測図

ＳＤ－９

第Ⅱ区で検出した南西－北東方向の溝で、幅0.3～0.4ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からは弥生時代中期の土器の破片が少量出土している。

ＳＤ－10

第Ⅱ区で検出した南東－北西方向の溝で、幅0.9ｍ、深さ1.5ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘



第43図　ＳＤ－10（97・98）出土遺物実測図

土で、溝内からは弥生時代中期〔河内Ⅱ－1様式〕の壺（97）、鉢（98）が出土した。（97）は算盤玉形に近い球形の体部から直立ぎみの頸部をもつ。（98）は直立する口縁で端部は面をもつ。

ＳＤ－11

第Ⅱ区で検出した東西方向の溝で、幅0.3～0.5ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からの遺物の出土はなかった。

ＳＤ－12

第Ⅱ区で検出した東西方向の溝で、幅0.4ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からの遺物の出土はなかった。

ＳＤ－13

第Ⅲ区で検出した東西方向の溝で、幅0.1ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からの遺物の出土はなかった。

ＳＤ－14

第Ⅲ区で検出した南北方向の溝で、幅0.25ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からの遺物の出土はなかった。

ＳＤ－15

第Ⅲ区で検出した南東－北西方向の溝で、幅0.2～0.6ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からは弥生時代中期の土器の破片が少量出土している。

ＳＤ－16

第Ⅲ区で検出した南西－北東方向の溝で、幅0.3～0.6ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からは弥生時代中期の土器の破片が少量出土している。

ＳＤ－17

第Ⅲ区で検出した南北方向の溝で、幅0.5ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からの遺物の出土はなかった。

ＳＤ－18

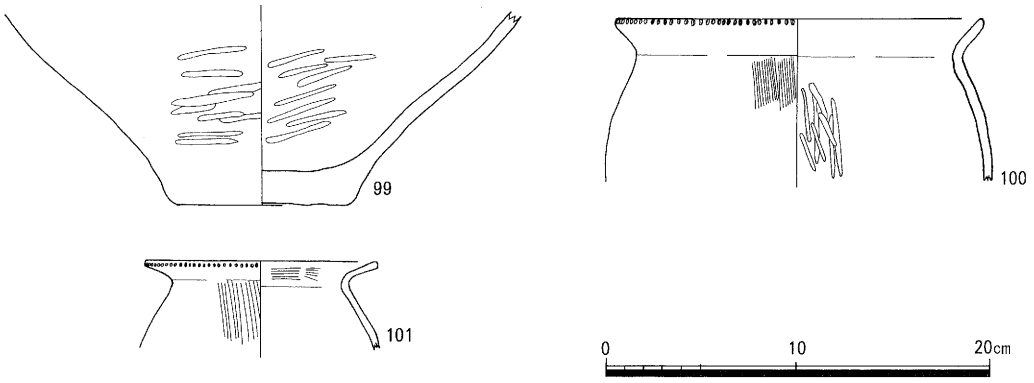
第Ⅳ区で検出した東西方向の溝で、幅0.3～0.6ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は暗褐色細砂混粘土で、溝内からは弥生時代中期の土器の破片が少量出土している。

ＳＤ－19

第Ⅳ区で検出した南西－北東方向の溝で、幅0.2ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は暗灰色細砂混粘土で、溝内からの遺物の出土はなかった。

ＳＤ－20

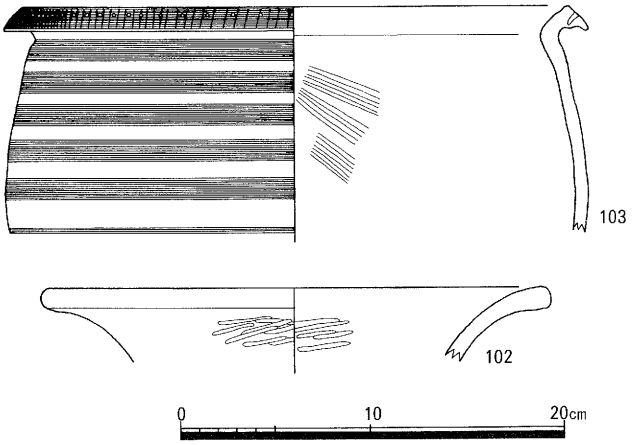
第Ⅳ区で検出した南西－北東方向の溝で、幅0.25～0.35ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は暗灰色細砂混粘土で、溝内からは弥生時代中期の土器の破片が少量出土している。



第44図　ＳＤ－21（99～101）出土遺物実測図

ＳＤ－21

第Ⅳ区で検出した南西－北東方向の溝で、幅0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は暗灰色細砂混粘土で、溝内からは弥生時代中期の壺（99）、甕（100・101）が出土した。（100・101）は端部にキザミ目を施す大和形の甕と思われる。



第45図　ＳＤ－22（102・103）出土遺物実測図

ＳＤ－22

第Ⅳ区で検出した南北方向の溝で、幅1.0ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は暗灰色細砂混粘土で、溝内からは弥生時代中

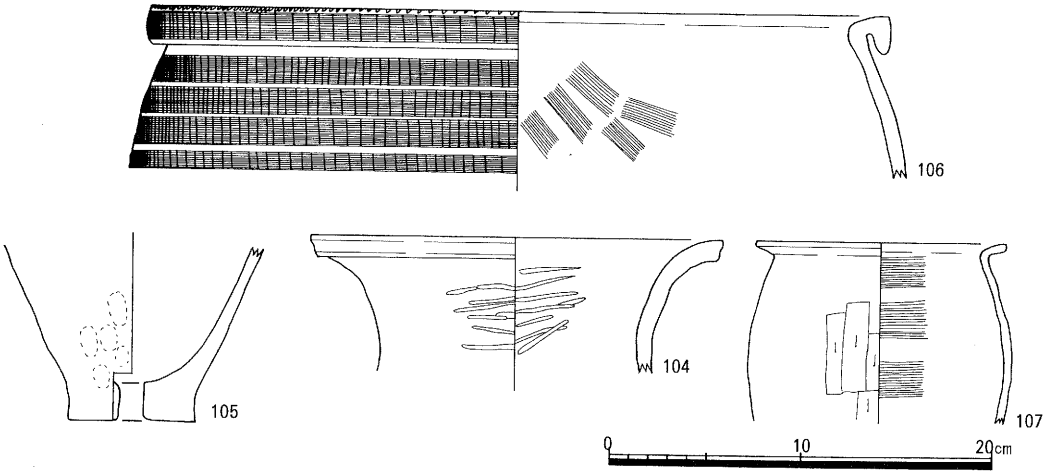
期〔河内Ⅲ－３様式〕の無文の壺（102）、〔河内Ⅲ－１様式〕の有文の鉢（103）が出土した。

ＳＤ－23

第Ⅳ区で検出した東西方向の溝で、幅0.3～0.5ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は暗灰色粘土で、溝内からは弥生時代中期の土器の破片が少量出土している。

ＳＤ－24

第Ⅰ～Ⅳ区で検出した。幅4.9～8.1ｍ、深さ1.3～1.9ｍを測る。検出した断面はＶ字型を呈し、第Ⅰ区の東端から第Ⅳ区の南東側へ向かう上面の標高はT.P.＋15.5 ｍ～ T.P.＋15.4ｍと



第46図　ＳＤ－24（104～107）出土遺物実測図

やや緩やかな傾斜をもつ環濠と推定される。埋土は①灰色細砂混粘土②褐色細砂混粘土③灰色細砂混粘土④暗灰色細砂混粘土⑤暗灰色粘土⑥灰青色細砂⑦暗灰色シルト混粘土⑧褐灰色シルト混粘土⑨灰色シルト混粘土⑩灰色礫混粘土⑪灰青色微砂で、溝内からは弥生時代中期の壺（104）、底部有孔土器（105）、河内Ⅲ－２様式の鉢（106）、甕（107）が出土した。（104）はゆるやかに外反し、面をもつ無文の壺。［河内Ⅱ－３様式］。（105）は丈長の甕の形になる。底部に孔がある。（106）は口縁部が垂下し面をもつ。口縁部は内傾し、端面にキザミ目を施す有文の鉢。［河内Ⅲ－１様式］。（107）は口縁部「く」字状に外反し水平にひろがる。外面にヘラケズリを施す。形は河内形と思われるが、調整は紀伊のものと思われる。［河内Ⅲ－１様式］

ＳＤ－25

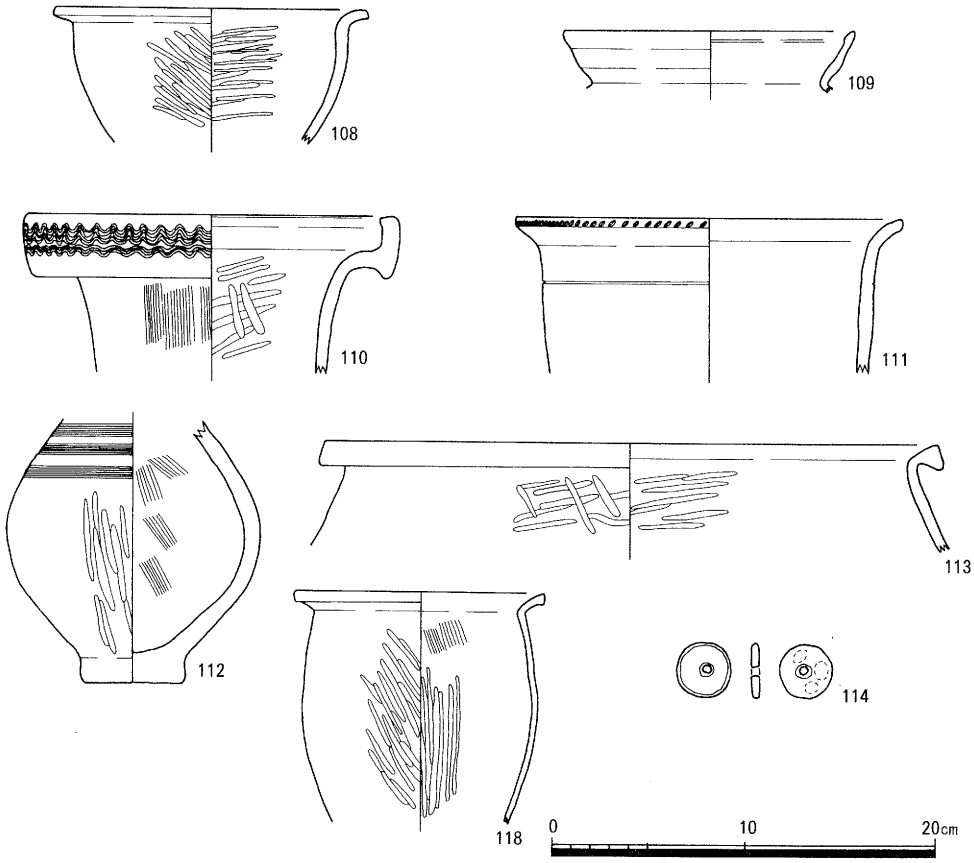
第Ⅲ区で検出した南北方向の溝で、幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は灰色細砂混粘土で、溝内からは、土師器の破片が少量出土している。

ＳＤ－26

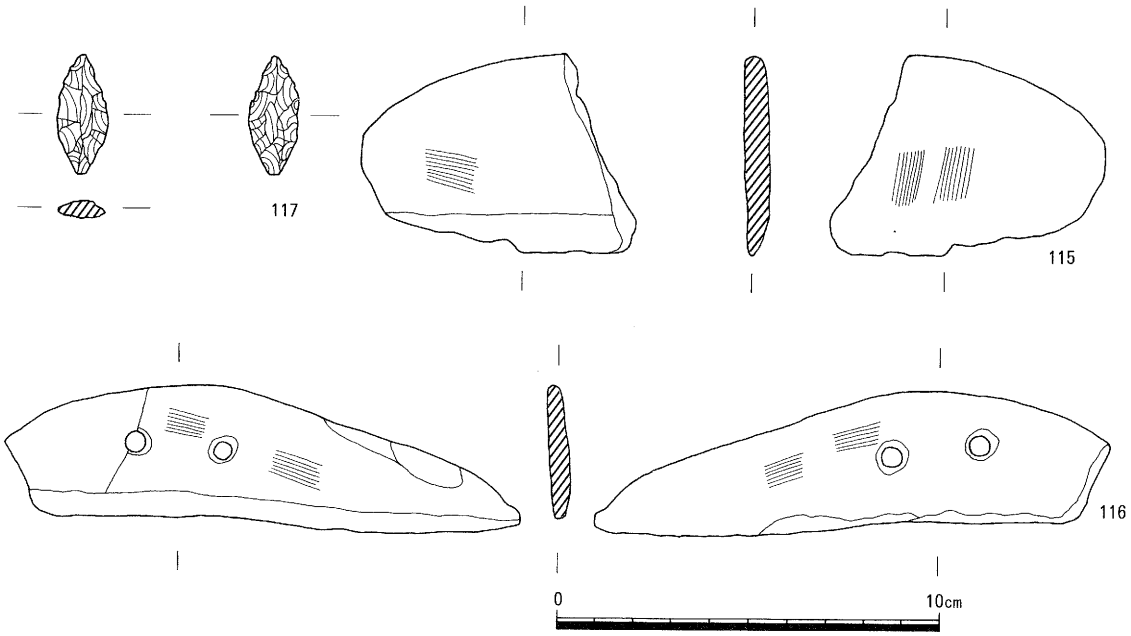
第Ⅳ区で検出した南北方向の溝で、幅4.5ｍ、深さ1.6ｍを測る。埋土は上から褐色シルト混粘土、灰色細砂混粘土で、溝内からは、土師器の破片が少量出土している。

第１層内出土遺物

第Ⅰ区では弥生時代中期［河内Ⅲ－２様式］の鉢（108)、古墳時代前期〔布留式〕の甕（109）が出土している。第Ⅱ区では弥生時代中期の壺（110)、弥生時代前期［河内Ⅰ－２様式］の甕（111）が、第Ⅲ区では弥生時代中期の壺（112)、甕（113)、紡錘車（114)、石包丁（115・116)、石鏃（117）が、第Ⅳ区では弥生時代中期［河内Ⅳ－１様式］の甕（118）が出土した。



第47図　第1層（108～114・118）出土遺物実測図



第48図　第1層（115～117）出土遺物実測図

第３章　出土遺物観察表

報告番号 図版番号	出土遺構	種類 器種	口径 器高 底径 (cm)	裾径 長さ 幅 厚み	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
1 五	NR-1	縄文土器 深鉢	40.0		口縁内外面ヨコナデ。内面と口縁端部に縄文を施す。外面に縄文を施した後、沈線を施す。縄文時代中期の船元式である。	灰白色 (10YR8/1)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
2 五	SE-1	弥生土器 細頸壺	14.0		口縁内外面ヨコナデ。外面に簾状文を施す。	黒褐色 (10YR2/2)	1㎜程度の砂粒含む。	良好	
3	SE-1	弥生土器 壺	7.0		底部内外面ナデ。	黒褐色 (10YR2/2)	1㎜程度の砂粒含む。	良好	
4	SE-1	弥生土器 高坏		14.0	裾部内面ヨコナデ、外面ヘラミガキ。	褐色 (10YR4/6)	1㎜程度の砂粒含む。	良好	
5	SE-1	弥生土器 甕	40.0		口縁内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。	黄褐色 (10YR5/8)	1㎜程度の砂粒含む。	良好	
6	SE-1	弥生土器 甕	11.2		口縁内外面ヨコナデ。体部内外面ハケ。	黒褐色 (10YR2/2)	1㎜程度の砂粒含む。	良好	
7 五	SE-1	太型蛤刃 石斧		8.7 6.5 4.8	基部を欠損している。両面とも研磨されている。	暗緑灰色 (5G4/1)			
8	SE-2	弥生土器 広口壺	20.0		口縁内外面ヨコナデ。	橙色 (7.5YR7/6)	2㎜程度の砂粒含む。	良好	
9	SE-2	弥生土器 細頸壺	12.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。体部外面に櫛描き直線文を施す。	黒褐色 (7.5YR3/1)	2㎜程度の砂粒含む。	良好	
10	SE-2	弥生土器 壺			体部内面ナデ。外面に太細併用櫛描き直線文を施す。	灰褐色 (7.5YR5/2)	2㎜程度の砂粒含む。	良好	
11	SE-2	弥生土器 壺	8.2		体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。底部内外面ナデ。	橙色 (7.5YR7/6)	2㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
12 五	SE-2	弥生土器 甕	34.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケ、外面ヘラミガキ。	黒褐色 (10YR2/2)	5㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
13 五	SE-2	石鏃		5.1 1.8 0.6	鋸刃状に端部を剥離している。	暗青灰色 (5B4/1)			
14 五	SE-2	石槍		6.5 4.0 1.5	両面に剥離痕がある。	暗青灰色 (5B4/1)			

報告番号 図版番号	出土遺構	種類 器種	口径 器高 底径 (cm)	裾径 長さ 幅 厚み	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
15 五	SE-3	弥生土器 壺	17.4		口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ナデ。頸部外面に櫛描き直線文を施す。	赤色 (10R5/8)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
16 五	SE-3	弥生土器 壺	12.0		口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ヘラミガキ。口縁端面に列点文、体部外面に櫛描き直線文を施す。	灰黄褐色 (10YR4/2)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
17 六	SE-3	弥生土器 壺	5.8		体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。底部内外面ナデ。	灰黄褐色 (10YR4/2)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
18 六	SE-3	弥生土器 壺	10.0		体部内面ハケ、外面ヘラミガキ。底部内外面ナデ。体部上位に直線文と格子文あり。	灰白色 (10YR8/1)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
19 六	SE-3	弥生土器 鉢	22.4		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	灰白色 (10YR8/1)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
20 六	SE-3	弥生土器 鉢	7.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラケズリ。口縁部に２個一対の孔あり。他地域のものか。	褐色 (10YR4/4)	1mm程度の砂粒含む。	良好	
21 六	SE-3	弥生土器 高坏		12.0	裾部内外面ヨコナデ。脚部内面ナデ、外面ヘラミガキ。	灰白色 (10YR7/1)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
22 六	SE-3	弥生土器 甕	16.0 25.0 4.6		口縁部内面ハケナデのちヨコナデ、外面ヨコナデ。体部内外面ハケナデ。口縁端部に沈線を一条施す。外面に二次焼成による煤付着。	明黄褐色 (10YR6/6)	1mm程度の砂粒含む。	良好	
23 六	SE-3	弥生土器 小型甕	9.2 11.0 3.2		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	黒褐色 (10YR3/1)	1mm程度の砂粒含む。	良好	
24	SE-3	砥石		0.2	両面共に研磨がある。 両面に使用したと思われるくぼみが残っている。	灰白色 (10YR7/1)			
25 六	SE-4	弥生土器 壺	38.0		口縁部内外面ヨコナデ。口縁端面に沈線を一条施す。端面下方にキザミ目を施す。	黄褐色 (10YR5/6)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
26 七	SE-4	弥生土器 甕	26.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。	明褐色 (7.5YR5/6)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
27	SE-5	弥生土器 壺	14.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	赤褐色 (5YR4/6)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
28 七	SE-5	弥生土器 壺			体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。外面に直線文を施したのち扇形文を施す。下部には流水文を施す。	褐色 (10YR4/4)	3mm程度の砂粒含む。	良好	
29	SE-5	弥生土器 甕	13.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。外面に二次焼成による煤付着。	褐色 (7.5YR4/4)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	

報告番号 図版番号	出土遺構	種類 器種	口径 器高 底径 (cm)	裾径 長さ 幅 厚み	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
30 七	SE-6	弥生土器 ミニチュア壺	3.0 5.5 2.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内外面ナデ。	黒褐色 (10YR3/1)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
31 七	SE-6	弥生土器 甕	16.4		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、ヘラによる押さえあり。外面ヘラミガキ。外面に二次焼成による煤付着。	褐色 (7.5YR4/4)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
32 七	SE-7	土師器 (布留) 小型壺	10.0 7.8		口縁部内外面ヘラミガキのちヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	橙色 (5YR6/8)	2mm程度の砂粒極少量含む。	良好	
33 七	SE-7	土師器 (布留) 小型鉢	13.2		口縁部内外面ヘラミガキのちヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	橙色 (5YR6/8)	2mm程度の砂粒極少量含む。	良好	
34 七	SE-7	土師器 (布留) 甕	14.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ、外面タタキ。	灰色 (N5/)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
35 七	SK-1	弥生土器 甕	17.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
36	SK-2	弥生土器 壺		7.6	底部内面ナデ、外面ハケナデ。	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
37 八	SK-3	弥生土器 鉢	36.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。口縁端面と体部外面に簾状文を施す。口縁端面には等間隔に刺突文を施す。	明赤褐色 (5YR5/8)	1mm～3mm程度の砂粒多量含む。	良好	
38 八	SK-5	弥生土器 鉢	13.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。体部外面に直線文を施す。	褐色 (7.5YR4/6)	1mm～3mm程度の砂粒少量含む。	良好	
39 八	SK-5	弥生土器 甕	35.2		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ハケナデ。	明赤褐色 (5YR5/8)	1mm～3mm程度の砂粒少量含む。	良好	
40 八	SK-5	弥生土器 甕	22.4		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ、外面ハケナデ。	赤褐色 (5YR4/8)	1mm～3mm程度の砂粒少量含む。	良好	
41	SK-8	弥生土器 甕	18.4		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	赤色 (10R4/8)	1mm程度の砂粒少量含む。	良好	
42 八	SK-9	弥生土器 甕		5.4	体部内外面ヘラミガキ。底部内外面ナデ。体部外面に2次焼成による煤付着。	灰黄褐色 (10YR5/2)	1mm～3mm程度の砂粒少量含む。	良好	
43 八	SK-10	弥生土器 壺	18.0		口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ナデ、外面ヘラミガキ。口縁端面に波状文、体部外面に直線文を施す。	褐色 (7.5YR4/6)	1mm～3mm程度の砂粒多量含む。	良好	
44	SK-10	弥生土器 高坏		14.0	裾部内外面ヨコナデ。脚部内面ヘラミガキ、外面ナデ。	浅黄橙色 (10YR8/6)	1mm～3mm程度の砂粒多量含む。	良好	

報告番号 図版番号	出土遺構	種類 器種	口径 器高 底径 (cm)	裾径 長さ 幅 厚み	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
45	SK-10	弥生土器 甕	16.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。	褐色 (10YR4/6)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
46	SK-10	弥生土器 甕	13.2		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ハケナデ。	橙色 (7.5YR6/8)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
47 八	SK-10	石槍		4.0 1.4	先端部を欠損している。両面共に調整剥離がある。	暗青灰色 (5B3/1)			
48 八	SK-10	石鏃		2.0 0.5	基部が欠損している。両面共に調整剥離がある。	青灰色 (5B6/1)			
49	SK-12	弥生土器 壺	7.2		体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。底部内外面ナデ。	明黄褐色 (10YR6/6)	1㎜～3㎜程度の砂粒多量含む。	良好	
50	SK-13	弥生土器 甕	24.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケナデ、外面ヘラミガキ。	褐灰色 (10YR5/1)	1㎜程度の砂粒を極少量含む。	良好	
51 九	SK-14	弥生土器 広口壺	14.4 30.7 7.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部および底部内外面ヘラミガキ。頸部から体部にかけて直線文を施す。	暗赤褐色 (2.5YR3/6)	1㎜～3㎜程度の砂粒多量含む。	良好	
52 九	SK-14	弥生土器 壺	6.4		体部下位および底部内面ヘラミガキ。体部上位ハケナデ。体部および底部外面ヘラミガキ。頸部から体部にかけて直線文を施す。	灰黄褐色 (10YR5/2)	1㎜～3㎜程度の砂粒多量含む。	良好	
53 九	SK-14	弥生土器 広口壺	16.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ、外面ヘラミガキのちハケナデ。	明褐色 (7.5YR5/8)	2㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
54	SK-14	弥生土器 甕	19.0		口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。体部外面に２次焼成による煤付着。	褐色 (7.5YR4/6)	2㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
55 九	SK-14	弥生土器 甕	16.8		口縁部内面横方向のハケナデ。外面縦方向のハケナデ。体部内面ナデ、外面ハケナデ。	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	1㎜～3㎜程度の砂粒多量含む。	良好	
56 九	SI-2	弥生土器 壺	26.0		口縁部内面ヨコナデ後ヘラミガキ。外面ヨコナデ。	暗赤褐色 (2.5YR3/6)	1㎜～3㎜程度の砂粒多量含む。	良好	
57	SI-2	弥生土器 壺	8.8		体部内外面ナデ。底部内外面ナデ。	明赤褐色 (5YR5/8)	1㎜～5㎜程度の砂粒多量含む。	良好	
58 九	SI-2	弥生土器 甕	21.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。	明褐色 (7.5YR5/8)	2㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
59 九	SI-2	石錐		6.0 4.1 1.1	未製品。両面ともに調整剥離がある。	灰色 (N4/)			

報告番号 図版番号	出土遺構	種類 器種	口径　裾径 器高　長さ 底径　幅 (cm)　厚み	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
60 九	SI-3	弥生土器 壺	23.2	口縁部内外面ヨコナデ。端面に直線文を施す。	明赤褐色 (5YR5/8)	1mm～5mm程度の砂粒少量含む。	良好	
61	SP-13	弥生土器 細頸壺	16.8	口縁部内外面ヨコナデ。外面に列点文を施す。	明赤褐色 (5YR5/8)	1mm～3mm程度の砂粒多量含む。	良好	
62	SP-13	弥生土器 甕	32.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケナデ、外面ヘラミガキ。	灰黄褐色 (10YR6/2)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
63	SP-19	弥生土器 甕	24.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。	灰黄褐色 (10YR5/2)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
64	SP-23	弥生土器 高坏	23.2	坏部内外面ヨコナデ。外面に凹線文を2条施す。	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	1mm程度の砂粒含む。	良好	
65 一○	SP-29	石錐	3.4 1.4 0.3	両面共に調整剥離が見られる。	暗青灰色 (5B4/1)			
66 一○	SP-37	弥生土器 壺	6.0	体部内外面ナデ。内面に指頭圧痕あり。底部内外面ナデ。	褐色 (10YR4/6)	1mm～5mm程度の砂粒多量含む。	良好	
67	SP-71	弥生土器 高坏	26.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケナデのちヘラミガキ、外面ヘラミガキ。外面に列点文を施す。	黒褐色 (10YR2/2)	1mm～3mm程度の砂粒少量含む。	良好	
68 一○	SP-71	弥生土器 甕	14.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。内面に粘土接合痕あり。	黒褐色 (10YR3/2)	1mm～3mm程度の砂粒少量含む。	良好	
69 一○	SP-71	磨製石鏃	4.9 1.6 0.6	両面共にしのぎがある。基部両側部は面をもつ。両面と側面共に丁寧に研磨されている。	暗青灰色 (5B3/1)			
70 一○	SP-105	石包丁	0.4	両面共丁寧に研磨されている。紐孔1ヶ所あり。	暗緑灰色 (10G4/1)			
71 一○	SP-182	弥生土器 蓋	16.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ後ハケナデ、外面ヘラミガキ。	赤褐色 (5YR4/6)	1mm～3mm程度の砂粒少量含む。	良好	
72	SD-1 (第Ⅲ区)	弥生土器 蓋		体部内外面ヘラミガキ。天井部内外面ナデ。	灰黄褐色 (10YR4/2)	1mm程度の砂粒少量含む。	良好	
73 一○	SD-1 (第Ⅲ区)	弥生土器 蓋	11.0	天井部外面に突起あり。内面ハケナデ、外面ヘラミガキ。2個一対の紐孔が2ヶ所あり。	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1mm程度の砂粒少量含む。	良好	
74 一一	SD-1 (第Ⅲ区)	弥生土器 壺	16.8 35.0 8.0	口縁部内外面ヨコナデ、頸部および体部内面ハケナデ、粘土接合痕あり。外面ヘラミガキ。	黄褐色 (10YR5/8)	1mm～3mm程度の砂粒少量含む。	良好	

報告番号 図版番号	出土遺構	種類 器種	口径　裾径 器高　長さ 底径　幅 (cm)　厚み	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
75 一一	SD-1 (第Ⅲ区)	弥生土器 壺	29.0	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ヘラミガキ。	褐色 (10YR4/6)	1mm～3mm程度の砂粒少量含む。	良好	
76 一一	SD-1 (第Ⅲ区)	弥生土器 高坏	27.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	明赤褐色 (5YR5/8)	1mm～3mm程度の砂粒多量含む。	良好	
77 一一	SD-1 (第Ⅲ区)	弥生土器 甕	22.4 44.2 6.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ヘラミガキ、外面ハケナデ。	赤褐色 (5YR4/8)	1mm～3mm程度の砂粒多量含む。	良好	
78 一一	SD-1 (第Ⅲ区)	弥生土器 甕	11.0 13.7 4.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケナデ、外面ナデ。口縁部２個一対の孔あり。	灰黄褐色 (10YR5/2)	1mm～3mm程度の砂粒多量含む。	良好	
79 一一	SD-2	弥生土器 壺	36.0	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ナデ。口縁端面に簾状文と刺突文、頸部外面に簾状文を施す。口縁部内面に円形浮文を施す。口縁内面端部にキザミ目を施す。	明褐色 (7.5YR5/6)	1mm程度の砂粒含む。	良好	
80 一一	SD-2	弥生土器 壺	32.0	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ヘラミガキ、外面ナデ。口縁端面と頸部外面に簾状文を施す。口縁部内面に円形浮文を施す。口縁内面端部にキザミ目を施す。	灰黄褐色 (10YR6/2)	1mm～2mm程度の砂粒含む。	良好	
81 一一	SD-2	弥生土器 壺	28.0	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内面ヘラミガキ、外面ナデ。口縁端面と頸部外面に簾状文を施す。	灰黄褐色 (10YR6/2)	1mm程度の砂粒含む。	良好	
82 一二	SD-2	弥生土器 壺	24.8	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内外面ヘラミガキ。口縁端面に簾状文と刺突文を施す。	明赤褐色 (5YR5/6)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
83 一二	SD-2	弥生土器 壺	26.0	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内面ヘラミガキ、外面ナデ。口縁端面縦方向の直線文、頸部外面に簾状文と刺突文を施す。	灰色 (7.5YR6/2)	1mm程度の砂粒含む。	良好	
84 一二	SD-2	弥生土器 壺	27.0	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内外面ナデ。口縁部内面に列点文、円形竹管文、口縁端面に凹線文、頸部外面に凹線文、体部外面に波状文、直線文、斜格子文と円形竹管文を施す。	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1mm程度の砂粒含む。	良好	
85 一二	SD-2	弥生土器 壺	29.0	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内外面ハケナデ。口縁部内面に列点文、波状文、口縁端面に凹線文、頸部外面に凹線文、体部外面に波状文、直線文を施す。	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1mm程度の砂粒含む。	良好	
86 一二	SD-2	弥生土器 大型細頸壺	14.0	口縁部内外面ヨコナデ。頸部から体部内外面ナデ。口縁部外面と頸部外面上位に列点文、下位に簾状文、体部外面に簾状文を施し、口縁部と体部に円形浮文を施す。	明黄褐色 (10YR6/8)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
87 一二	SD-2	弥生土器 大型細頸壺	16.4	口縁部内外面ヨコナデ。頸部から体部内外面ナデ。口縁部から体部外面に簾状文を施す。頸部上位と体部上位に円形浮文を施す。	灰黄色 (2.5Y6/2)	2mm程度の砂粒含む。	良好	
88 一二	SD-2	弥生土器 鉢	20.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。口縁端面と体部上位外面に簾状文と列点文を施す。	赤褐色 (5YR4/8)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	
89 一二	SD-2	弥生土器 鉢	26.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。口縁端面と体部上位外面に簾状文と刺突文を施す。	黄褐色 (10YR5/6)	1mm～3mm程度の砂粒含む。	良好	

報告番号 図版番号	出土遺構	種類 器種	口径　裾径 器高　長さ 底径　幅 （㎝）　厚み	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
90 一三	SD-2	弥生土器 高坏	22.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ヘラミガキ。体部上位外面に列点文を施す。	黄褐色 (10YR5/6)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
91 一三	SD-2	弥生土器 甕	38.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
92	SD-2	弥生土器 甕	16.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ハケナデ。	橙色 (5Y6/6)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
93 一三	SD-2	弥生土器 蓋	13.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。天井部内外面ナデ。2個一対の孔を施す。	黄褐色 (10YR5/6)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
94	SD-3	弥生土器 甕	22.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、指頭圧痕あり。外面ハケナデ。	明赤褐色 (5YR5/6)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
95 一三	SD-8	弥生土器 壺	29.2	口縁部内外面ヨコナデ、外面に簾状文2条施す。頸部内外面ナデ。	黄褐色 (10YR5/8)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
96	SD-8	弥生土器 高坏	14.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	黄褐色 (10YR5/8)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
97 一三	SD-10	弥生土器 壺	7.6	体部内面ナデ、指頭圧痕あり。外面ヘラミガキ。	明黄褐色 (10YR6/8)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
98 一三	SD-10	弥生土器 鉢	18.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケナデ、外面ナデ。外面に直線文を施す。	暗褐色 (10YR3/3)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
99	SD-21	弥生土器 壺	8.8	体部内外面ヘラミガキ。底部内外面ナデ。	明褐色 (7.5YR5/8)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
100 一三	SD-21	弥生土器 甕	18.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ、外面ハケナデ。口縁端面にキザミ目を施す。	橙色 (7.5YR6/8)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
101 一三	SD-21	弥生土器 甕	12.0	口縁部内外面ハケナデ。体部内面ナデ、外面ハケナデ。口縁端面にキザミ目を施す。	褐色 (7.5YR4/3)	1㎜程度の砂粒少量含む。	良好	大和型
102	SD-22	弥生土器 壺	26.0	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ヘラミガキ。	橙色 (7.5YR6/8)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
103 一四	SD-22	弥生土器 鉢	28.4	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケナデ。外面ナデ。口縁端面に簾状文と刺突文、体部外面に直線文を施す。	褐灰色 (10YR6/1)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
104 一四	SD-24	弥生土器 壺	21.4	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ヘラミガキ。	橙色 (7.5YR6/8)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	

報告番号 図版番号	出土遺構	種類 器種	口径　裾径 器高　長さ 底径　幅 (cm)　厚み	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
105 一四	SD-24	弥生土器 底部有孔 土器	6.6	体部内外面ハケナデ、指頭圧痕あり。底部に孔あり。	橙色 (7.5YR6/8)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
106 一四	SD-24	弥生土器 鉢	38.2	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケナデ。外面ナデ。口縁端面に簾状文とキザミ目、体部外面に簾状文を施す。	褐灰色 (10YR6/1)	1㎜～3㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
107 一四	SD-24	弥生土器 甕	13.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ハケナデ。外面ヘラケズリ。	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1㎜程度の砂粒少量含む。	良好	
108 一四	第１層	弥生土器 鉢	16.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
109	第１層	土師器 （布留） 甕	15.0	口縁部内外面ヨコナデ。	橙色 (5YR6/8)	1㎜程度の砂粒極少量含む。	良好	
110 一四	第１層	弥生土器 壺	19.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ、外面ハケナデ。口縁端面に櫛描き波状文を施す。	赤褐色 (5YR4/6)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
111 一四	第１層	弥生土器 甕	20.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。口縁端部にキザミ目を施す。体部に沈線を一条施す。	赤褐色 (5YR4/6)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
112	第１層	弥生土器 壺	5.0	体部内面ハケナデ、外面ヘラミガキ。体部上位外面に直線文を施す。	黄褐色 (10YR5/6)	1㎜～4㎜程度の砂粒多量含む。	良好	
113	第１層	弥生土器 甕	32.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ヘラミガキ。	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	5㎜程度の砂粒含む。	良好	
114	第１層	紡錘車	2.9 0.4	内外面はナデ、指頭圧痕あり。ほぼ中央に１個の孔があけられている。	暗褐色 (10YR3/3)	1㎜～3㎜程度の砂粒含む。	良好	
115 一五	第１層	石包丁	0.5	両面共に研磨されている。	暗緑灰色 (5G4/1)			
116 一五	第１層	石包丁	0.5	両面共に研磨されている。ほぼ中央に２個の孔があけられている。	暗緑灰色 (5G4/1)			
117 一五	第１層	石鏃	3.1 1.3 0.5	両面共に調整剥離痕あり。	暗青灰色 (5B4/1)			
118 一五	第１層	弥生土器 甕	13.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面上位ハケナデ、下位ヘラミガキ、外面ヘラミガキ。体部外面に２次焼成による煤付着。	暗褐色 (10YR3/3)	1㎜程度の砂粒多量含む。	良好	

第４章　まとめ

今回の調査地は生駒山地の西麓に広がる扇状地上に位置している関係上、河内平野の沖積地特有の堆積状況とはことなり、現地表面から約0.5～0.6ｍで弥生時代、古墳時代前期、中世、近世の遺構が検出され、平野部にくらべ、比較的浅い部分に遺跡が存在していることが判明した。また下層確認トレンチでは、縄文時代中期の遺構を検出している。

縄文時代中期の遺構について

縄文時代中期の河川（ＮＲ－1）を検出した。出土した遺物は流れ込みであるが、遺物の摩耗の度合いは少なく、上流の近い地点に集落が存在していた可能性があると思われる。

弥生時代中期の遺構について

検出した遺構の中でも弥生時代中期初頭から中期後半（河内Ⅱ－1様式～河内Ⅳ－４様式）[註1]にかけてのものが大半を占め、当調査地で生活を営んでいることがわかった。

調査区の東側で地形的に高い（T.P.＋15.4ｍ付近）場所で検出した断面Ｖ字形の溝（ＳＤ－24）は、集落を区画している環濠と推定され、この溝の西に居住域（一部東側にも存在している）があったことが判明した。この溝は、扇状地を南西－北東に切っている環濠である。

集落内の井戸の位置は、各調査区の西側の地形的に低い（T.P.＋15.0ｍ付近）場所に集中している。この井戸より東側の地形的に高い部分に居住域を築いていたと推定でき、特に第Ⅱ区のＳＥ－3からＳＤ－24まではT.P.＋15.2ｍ～15.4ｍで一段高くなっており、建物（おそらく掘立柱建物）が数回もしくは数十回建て替えられたと考えられる小穴を多数検出した。北側の第Ⅰ区ではＳＤ－1から東側で竪穴住居を検出しており、調査地内の北側に居住域が集中していることがわかった。

弥生時代前期の遺構はＳＥ－４の一ケ所だけであり、また後期の遺構は検出していないことから、今回の調査地では、弥生時代前期末から中期全般にわたり生活していたと推定できる。

周辺の調査を含めて

今回の調査地より東側には地形的に4～5ｍのなだらかに生駒山地へ向かって上っていく段差がある。この段差の上（今回の調査地から約170ｍ東）には昭和53年度調査地（第１図の④）[註2]があり、弥生時代の方形周溝墓、溝、土器溜などを検出していることから、東には墓域が広がっており、今回の調査地に居住域が存在していることがわかった。

北東約30ｍの平成５年度調査地（第１図の⑩）[註3]では、今回検出した遺構の時期と同じ弥生時代中期後半頃の遺構を検出している。環濠の外側にあるのか内側なのかははっきりしないが、少なくとも上記調査地まで弥生時代中期の集落が広がっていることは確実である。また、南西

へ約５ｍと近接している昭和57年度調査地（第１図の⑥）でも弥生時代中期の遺構を検出していることから弥生時代中期の居住域は南にも広がっていることがわかった。[註4]

南西へ約100ｍの昭和56年度調査地（第１図の⑤）では弥生時代の中期の自然河川を検出しているが、居住域は検出していない。[註5] 弥生時代中期の居住域は上記調査地（第１図の⑤）より北側に広がっていることが考えられる。

生産域は、今回の調査では検出していない。近接している調査地においても生産域は明らかにされていない。西へ約１㎞と離れている大竹西遺跡では、弥生時代前期から後期にかけての水田を検出している。[註6] このことから、生駒山地西麓の扇状地上に居住域を構え生活していた集落の生産域は、おそらく扇状地末端から西側に広がる河内平野内に存在していると考えられる。

古墳時代前期の遺構について

古墳時代前期の遺構は第Ⅰ区で検出した井戸（ＳＥ－7）である。調査地の北西側に同時期の集落が存在していると推定できるが、周辺での調査が乏しいため集落の位置は不明である。

中世の遺構について

中世の遺構は第Ⅲ区で検出した溝（ＳＤ－25）である。南北方向に伸びる素掘りの溝で、条里に伴う溝の可能性が考えられるが詳細は不明である。

近世の遺構について

近世の遺構は第Ⅳ区で検出した溝（ＳＤ－26）である。南北方向に伸びる素掘りの溝で、条里に伴う溝の可能性が考えられるが詳細は不明である。

註

註１　寺沢薫　森岡秀人編著　1989　『弥生土器の様式と編年―近畿編Ⅰ―』木耳社

註２　八尾市役所　昭和63年10月27日発行　『八尾市史（前近代）』本文編

註３　吉田野乃他　1994.3『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告29　平成５年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

註４　米田敏幸他　1983.3『八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書』－教興寺の調査－八尾市文化財調査報告９　昭和57年度国庫補助事業 八尾市教育委員会

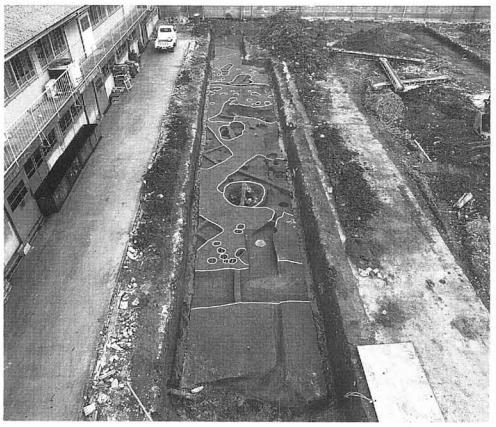
註５　西村公助「第２章　水越遺跡発掘調査概要報告」1983『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』昭和56・57年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告3 財団法人八尾市文化財調査研究会

註６　高萩千秋他　1991「20.大竹西遺跡第1次調査(OTN90-1)」『平成2年度財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

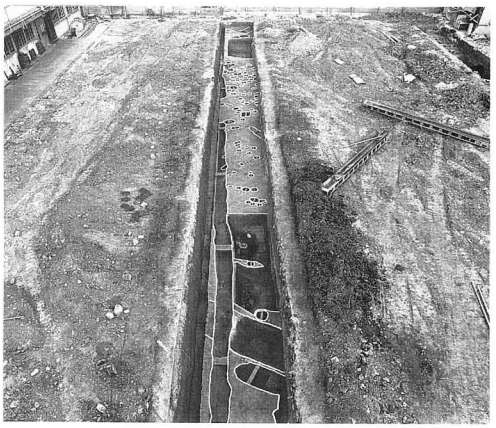
参考文献

・佐原真　1968「畿内地方」『弥生式土器集成　本編』
・田代克己他　1980『恩智遺跡Ⅰ』（本文編）瓜生堂遺跡調査会
・井藤暁子他　1979『池上遺跡　第２分冊　土器編』（財）大阪文化財センター
・渡辺昌宏他　1985『美園』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（財）大阪文化財センター

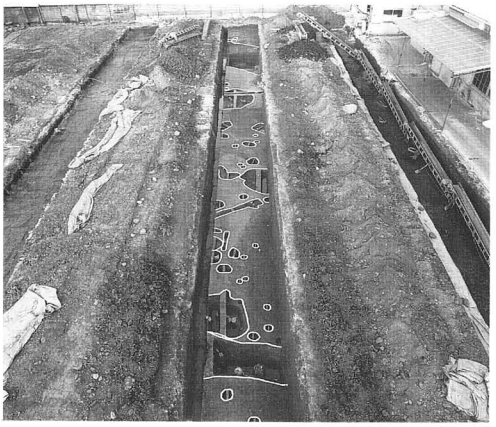
図　　版



第Ⅰ区 全景（西から）

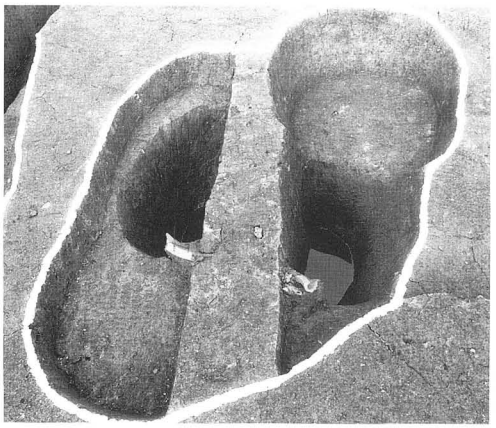


第Ⅱ区 全景（西から）

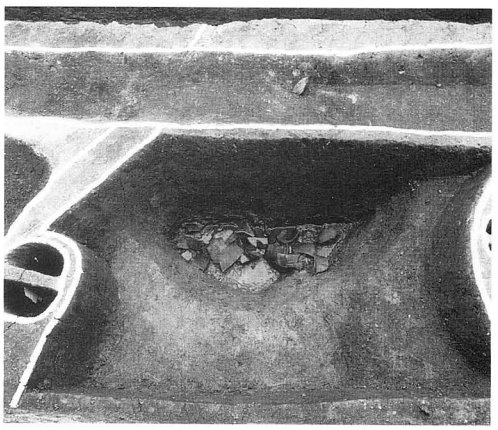


第Ⅲ区 全景（西から）

第Ⅳ区 全景（東から）

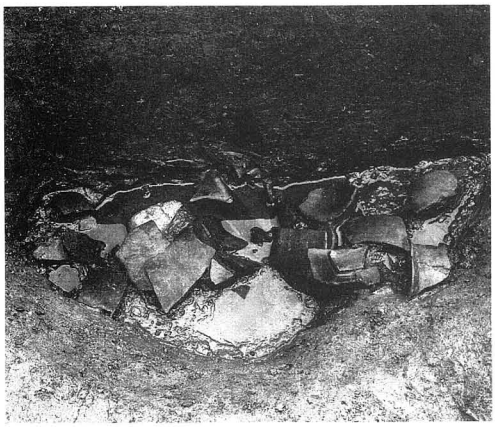


第Ⅰ区 ＳＥ－１（西から）

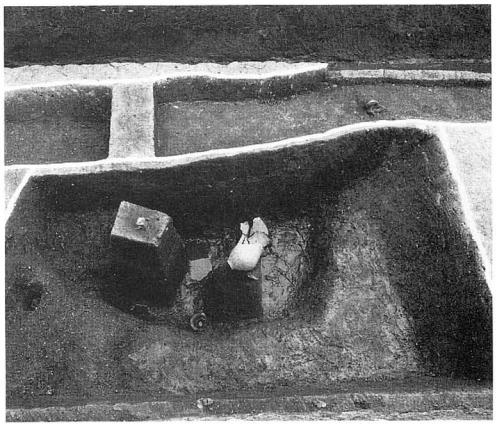


第Ⅱ区 ＳＥ－２（南から）

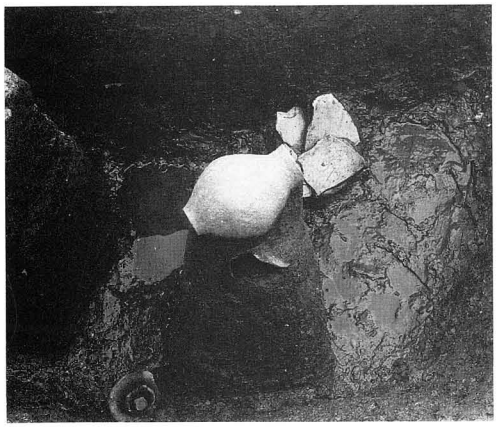
図版二



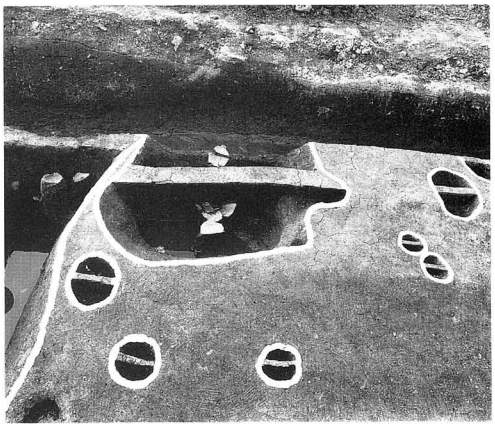
第Ⅱ区　ＳＥ－２遺物出土状況（南から）



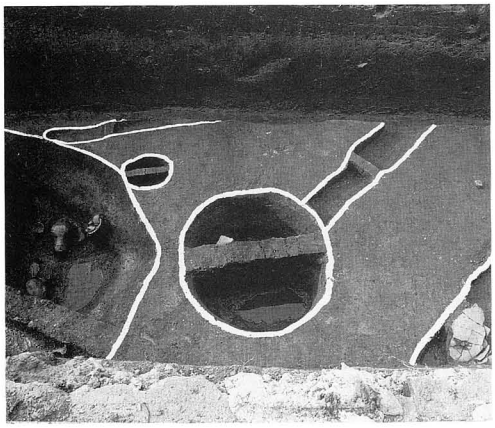
第Ⅱ区　ＳＥ－３（南から）



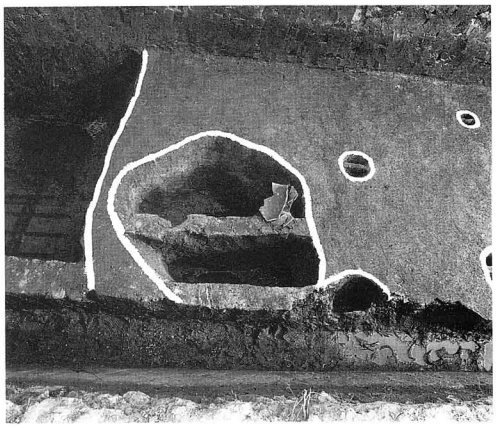
第Ⅱ区　ＳＥ－３遺物出土状況（南から）



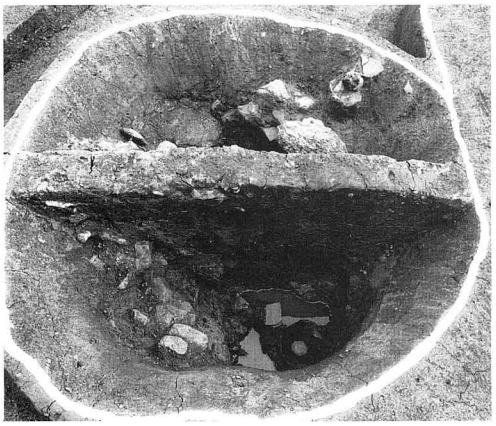
第Ⅲ区　ＳＥ－４（南から）



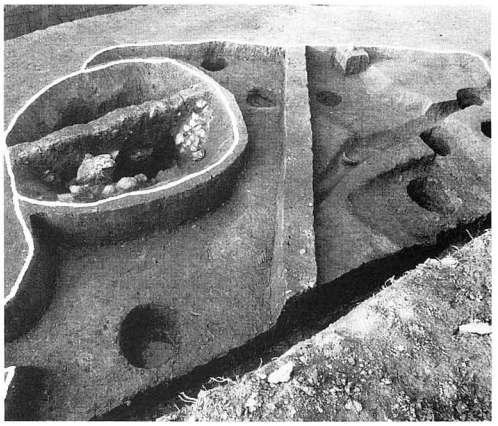
第Ⅳ区　ＳＥ－５（南から）



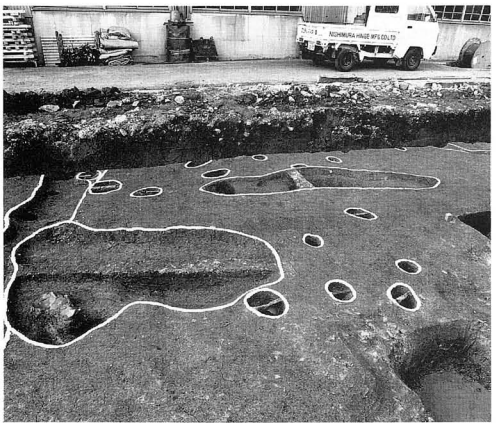
第Ⅳ区　ＳＥ－6（北から）



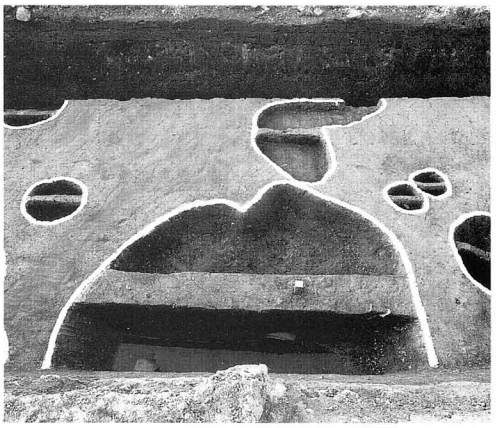
第Ⅰ区 ＳＥ－７（北から）



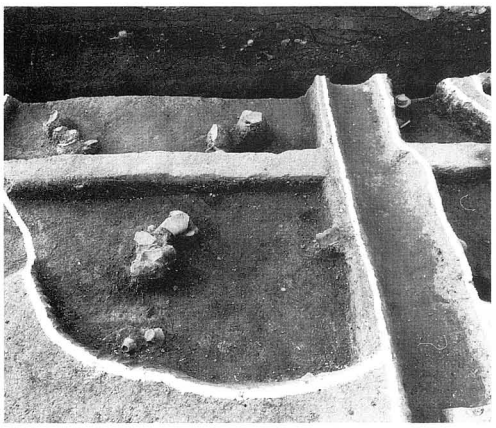
第Ⅰ区 ＳＩ－２（南西から）



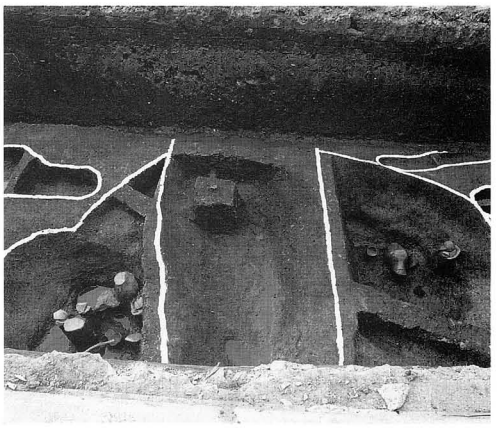
第Ⅰ区 ＳＫ－１（南から）



第Ⅲ区 ＳＫ－５（南から）

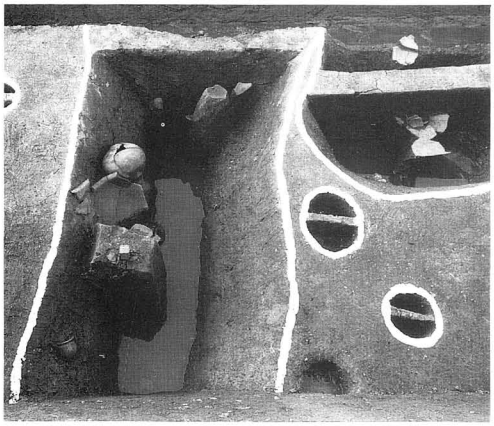


第Ⅲ区 ＳＫ－10（南から）



第Ⅳ区 ＳＫ－14 ＳＤ－１（南から）

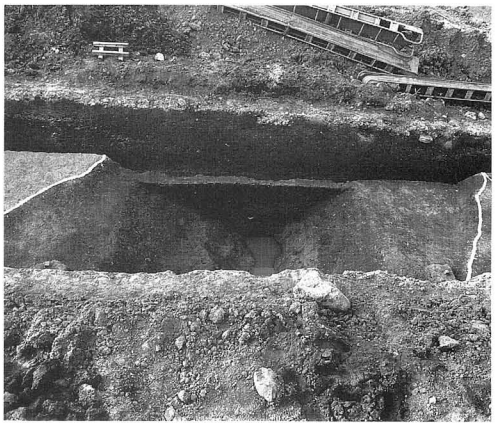
図版四



第Ⅲ区　ＳＤ－１（南から）

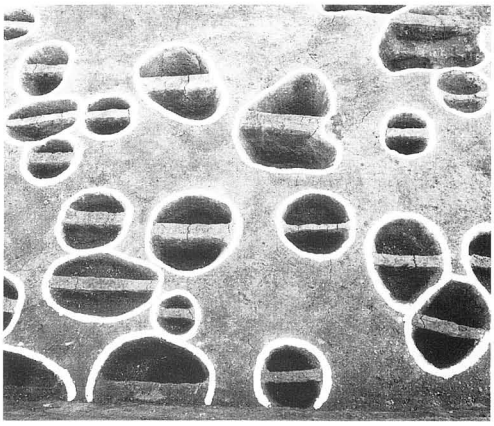
第Ⅰ区　ＳＤ－２（南から）

第Ⅰ区　ＳＤ－２遺物出土状況（東から）

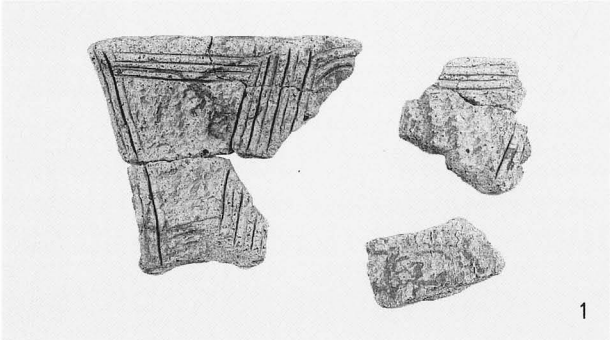


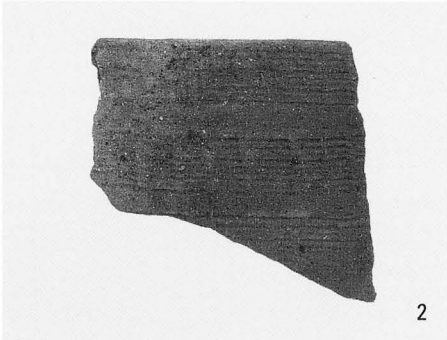
第Ⅲ区　ＳＤ－24（南から）

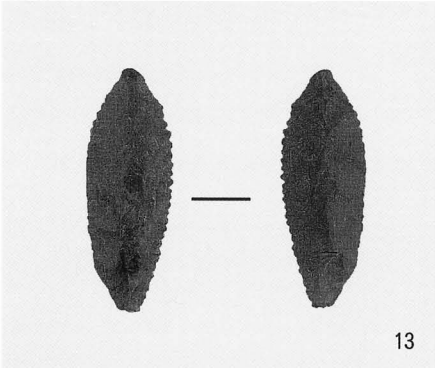
第Ⅳ区　ＳＤ－24（東から）

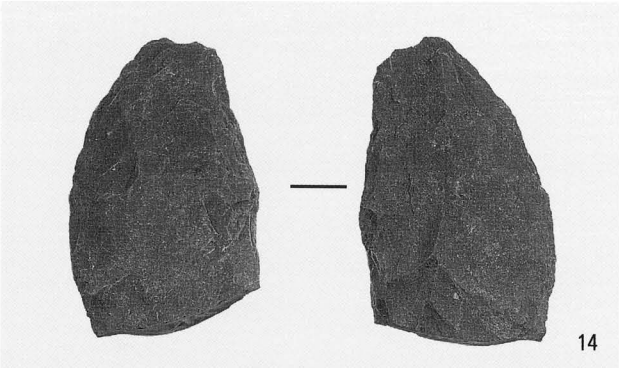


第Ⅱ区　3f地区小穴（南から）

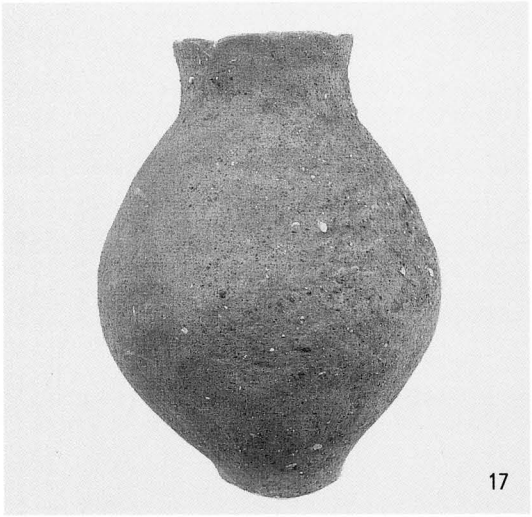


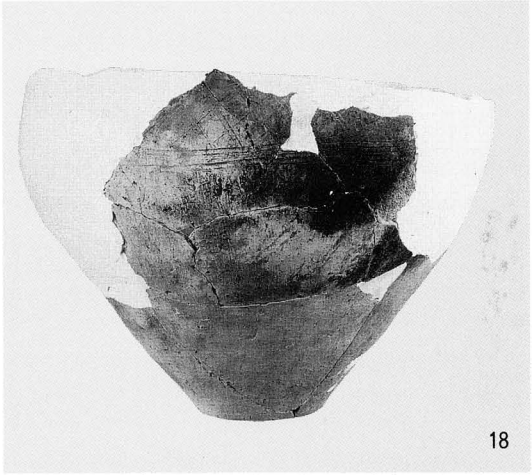


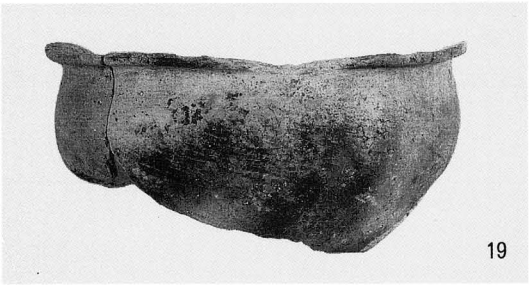


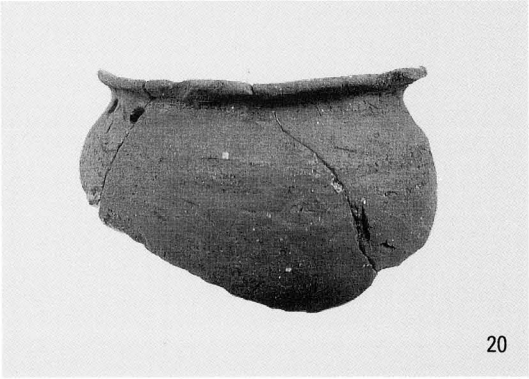


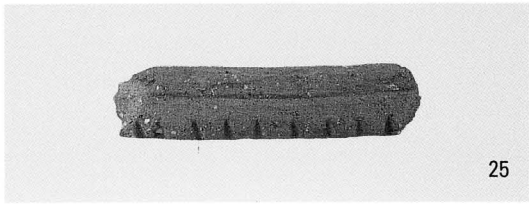
NR－1（1）SE－1（2・7）SE－2（12～14）SE－3（15・16）出土遺物



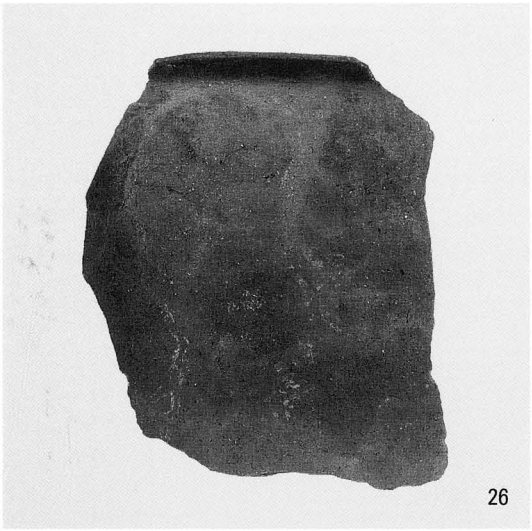


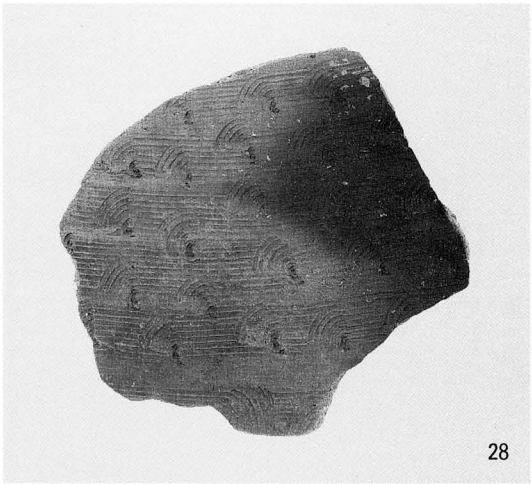


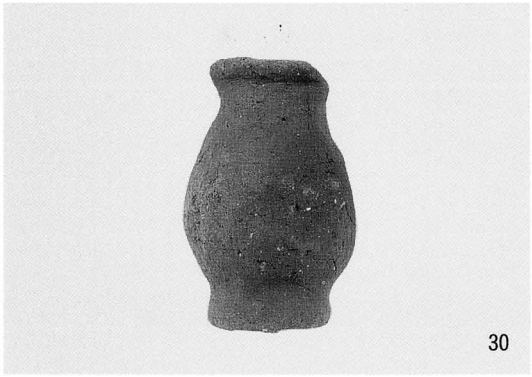


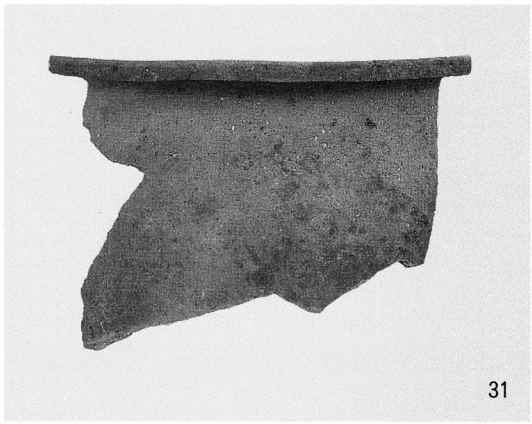


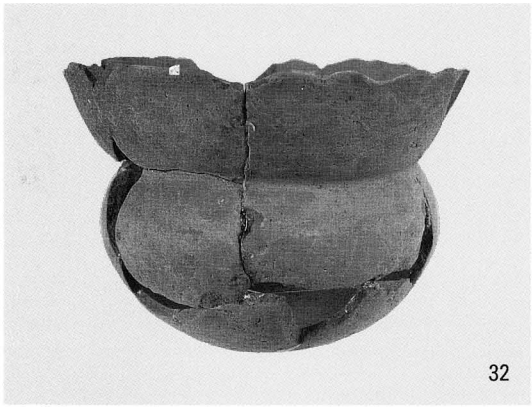
ＳＥ－３（17～23）ＳＥ－４（25）出土遺物

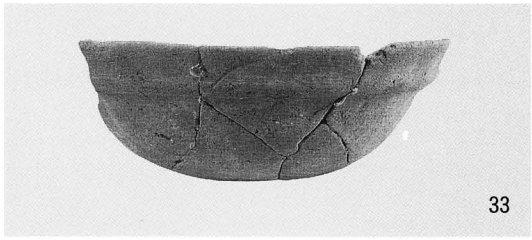


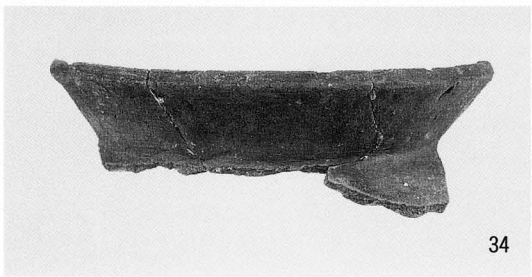


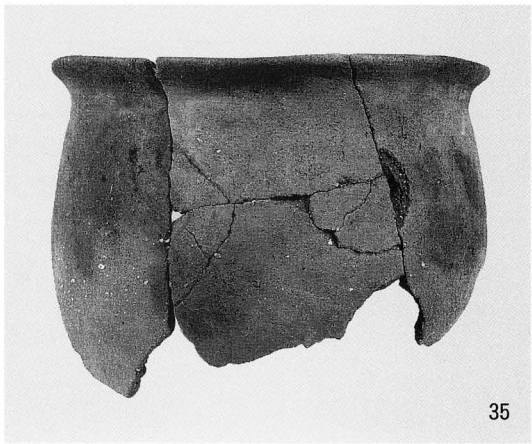




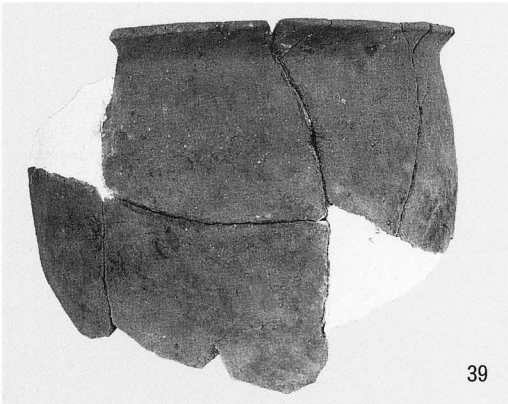


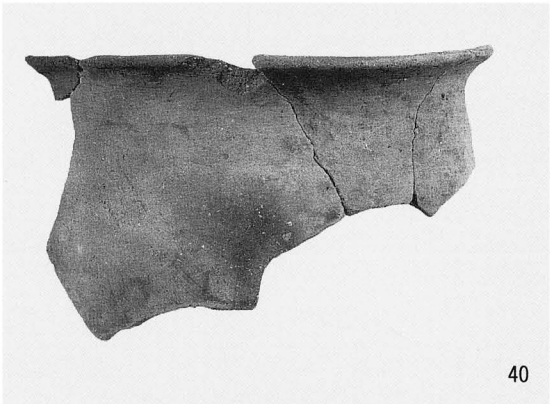


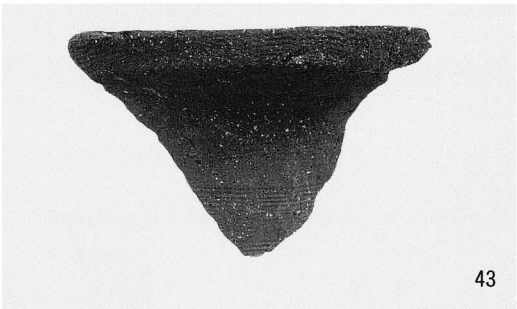


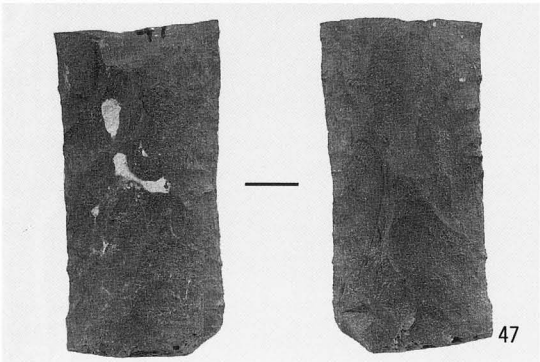


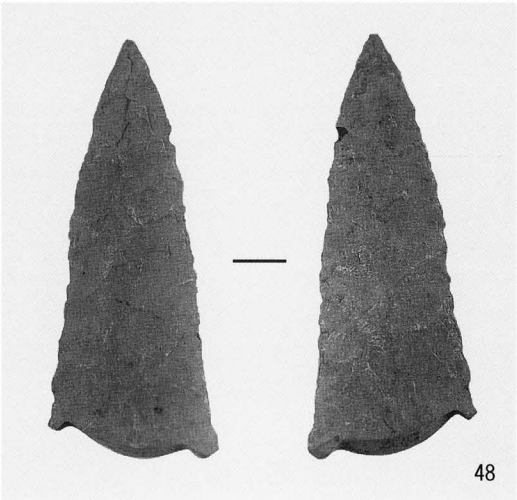
ＳＥ－４（26）ＳＥ－５（28）ＳＥ－６（30・31）ＳＥ－７（32～34）ＳＫ－１（35）出土遺物



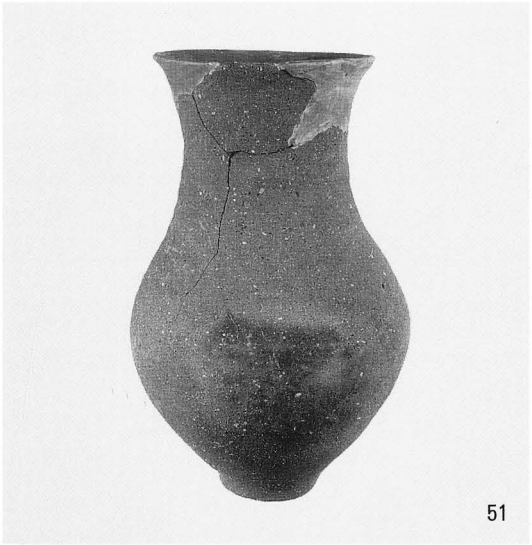


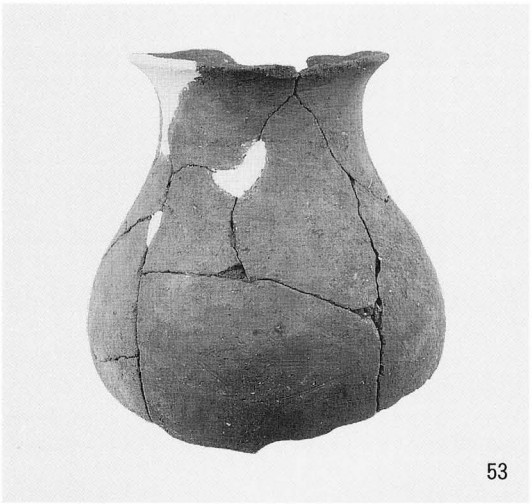


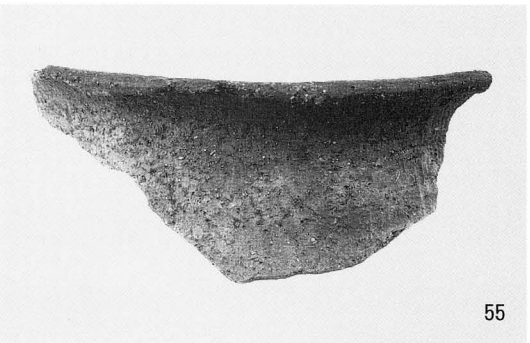


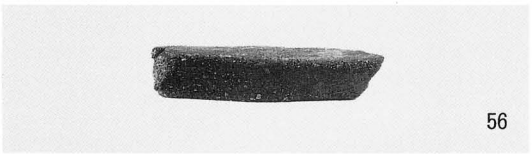


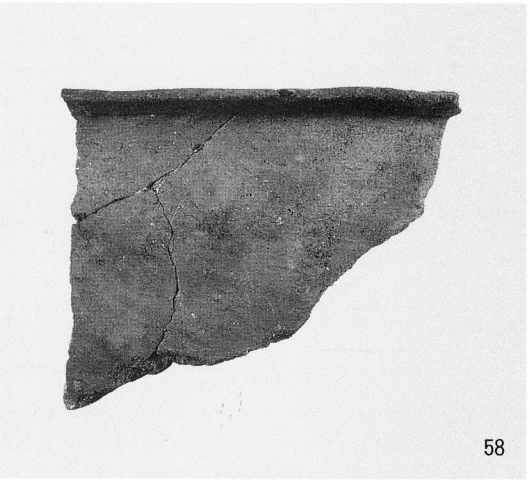
ＳＫ－３（37）ＳＫ－５（38～40）ＳＫ－９（42）ＳＫ－10（43・47・48）出土遺物

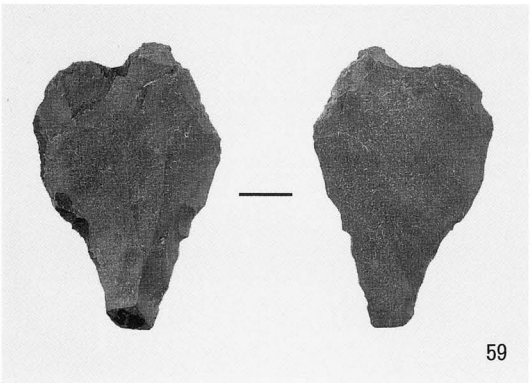


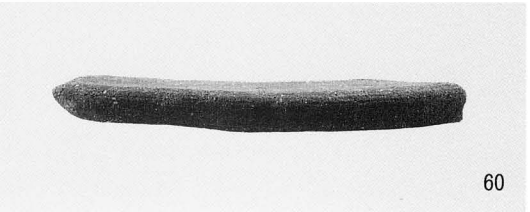




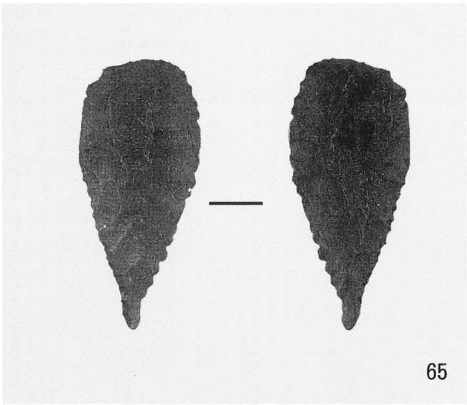


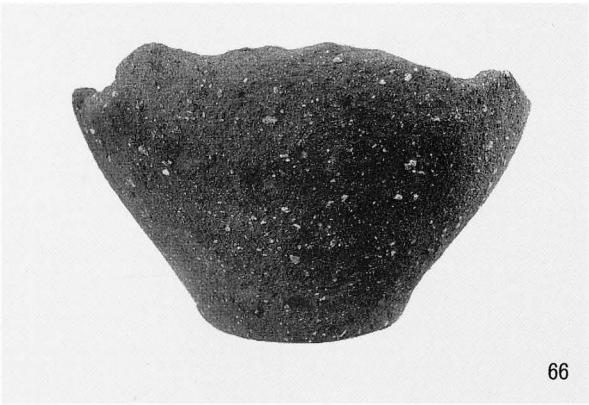


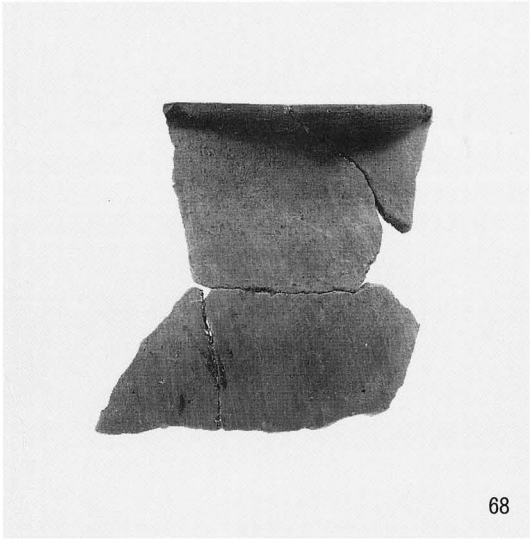


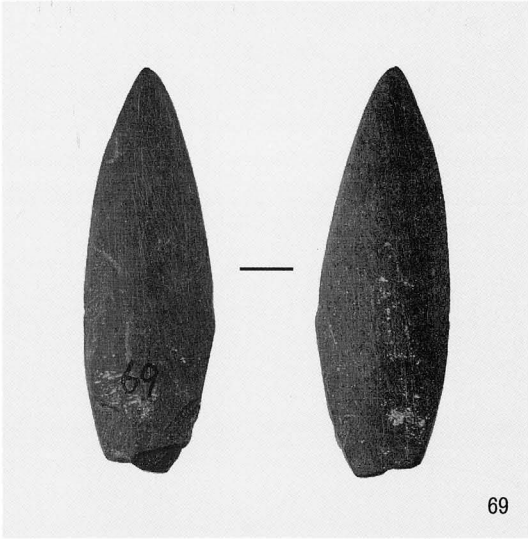


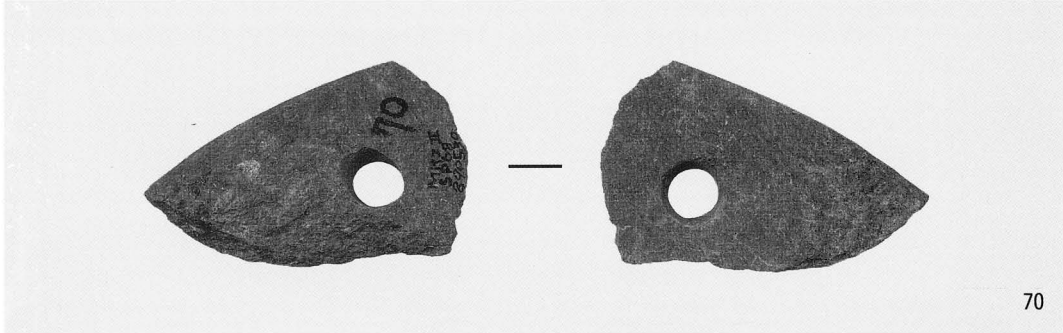
ＳＫ－14（51～53・55）ＳＩ－２（56・58・59）ＳＩ－３（60）出土遺物

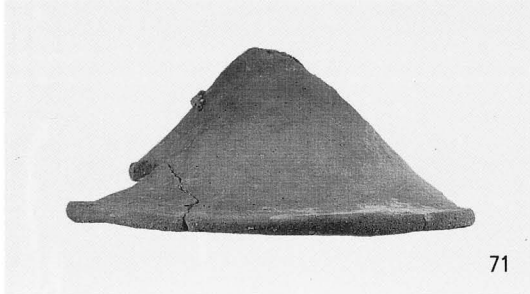


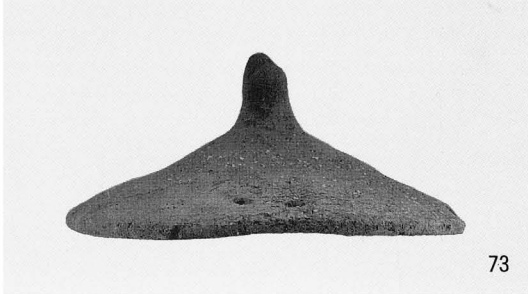




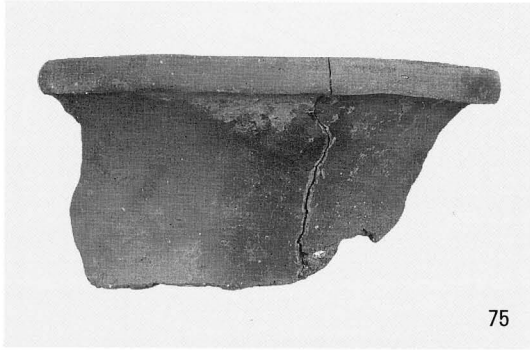


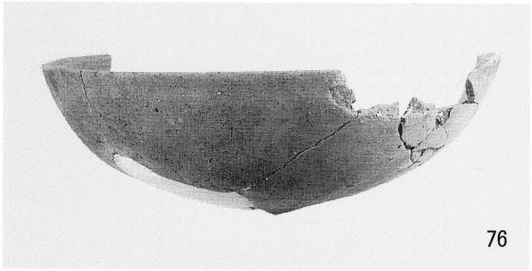


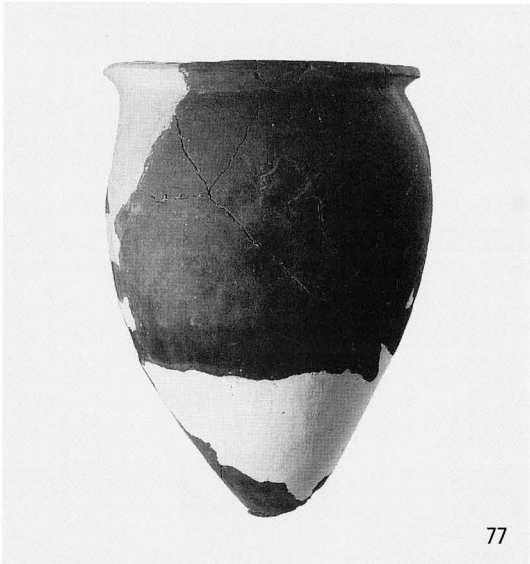


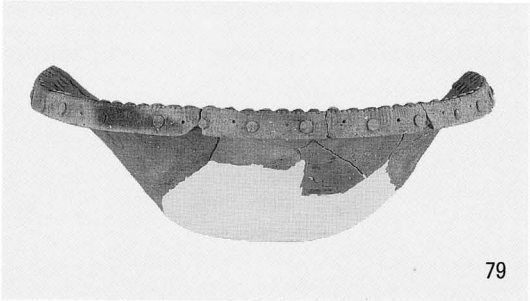


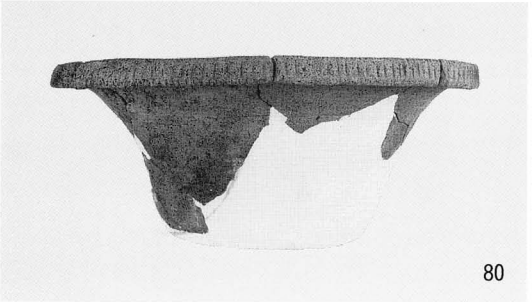
ＳＰ－29（65）ＳＰ－37（66）ＳＰ－71（68・69）ＳＰ－105（70）ＳＰ－182（71）　ＳＤ－１（73）出土遺物

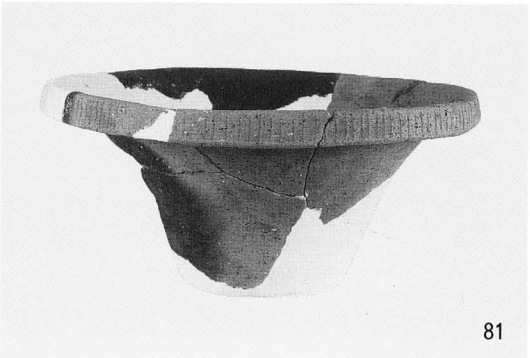




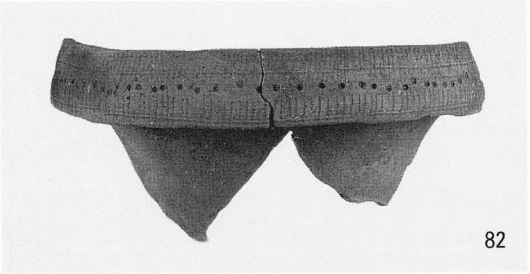


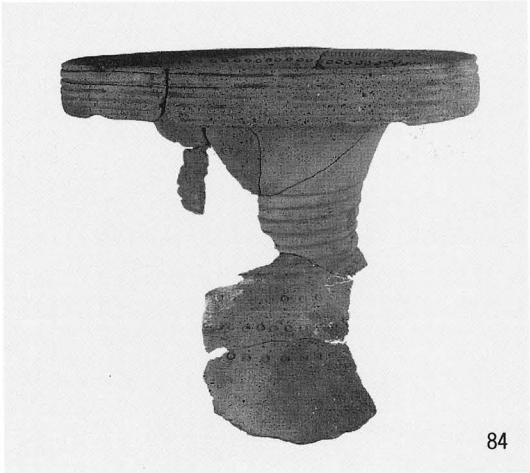


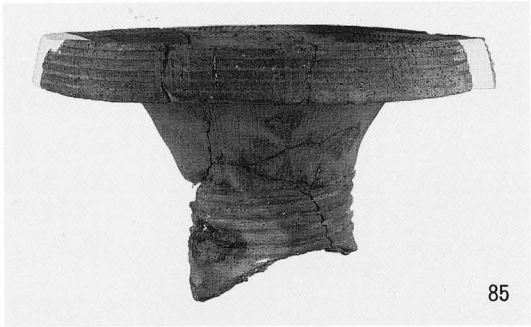


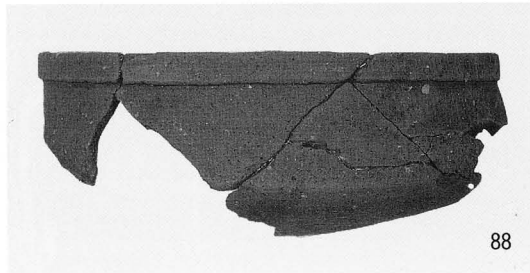


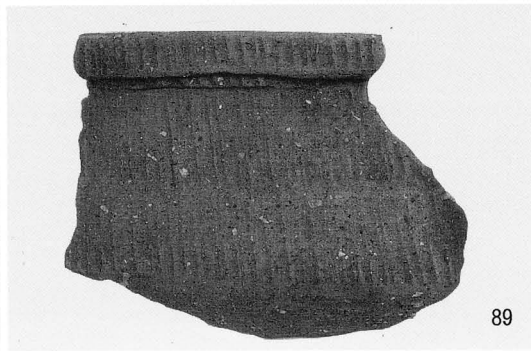
ＳＤ－１（74～78）ＳＤ－２（79～81）出土遺物



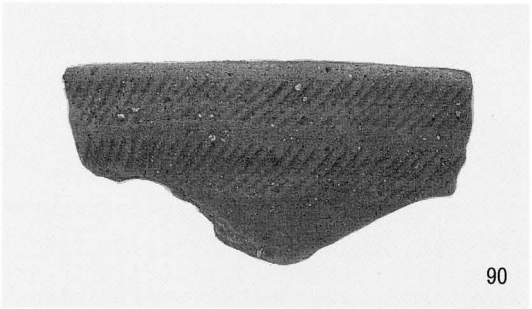


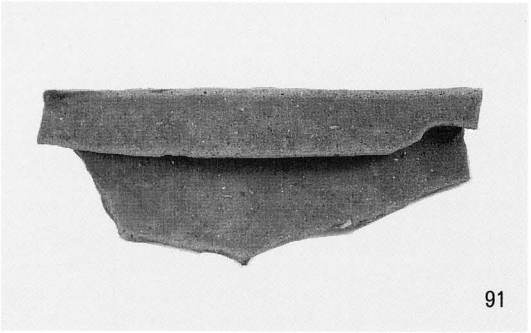


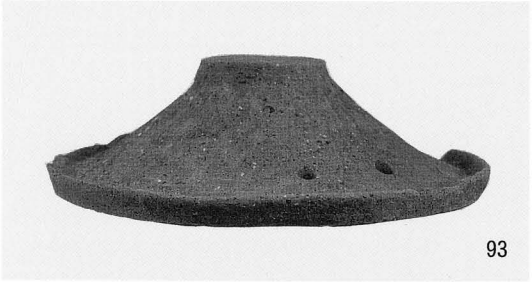


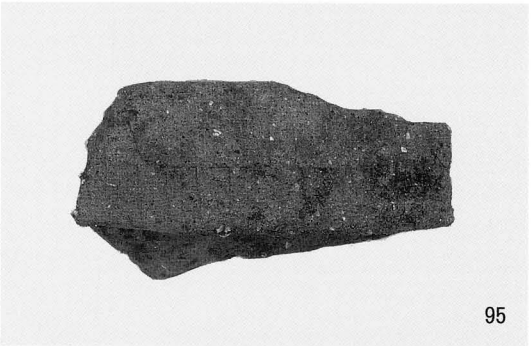


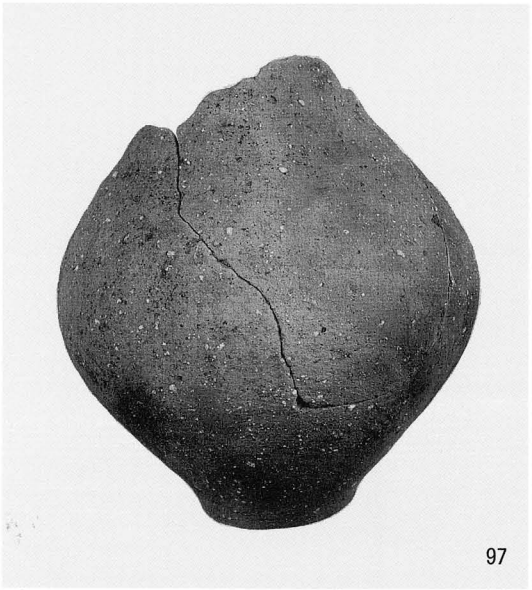
ＳＤ－２（82～89）出土遺物

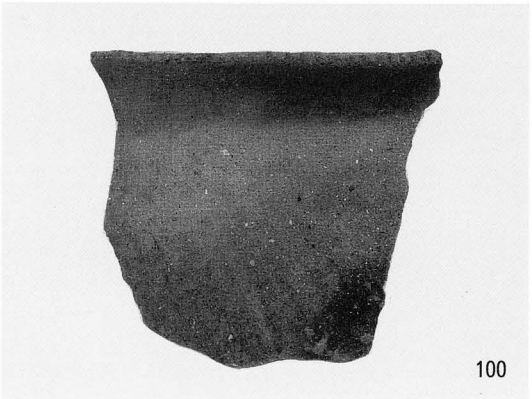


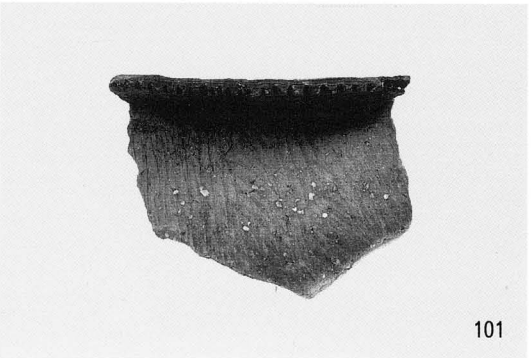




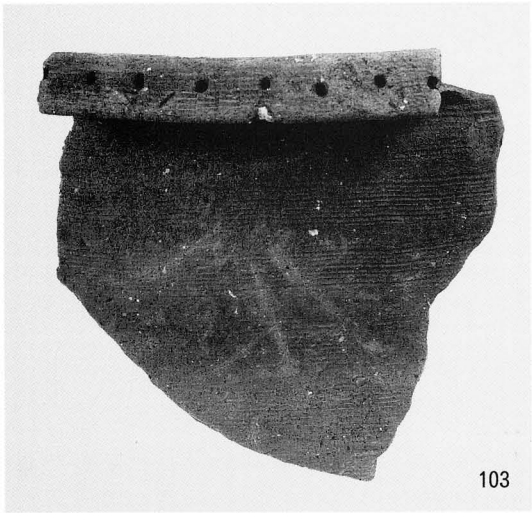


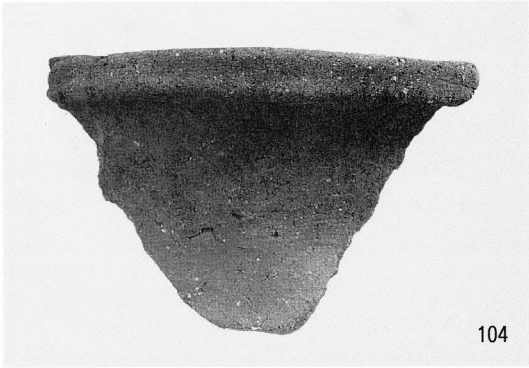


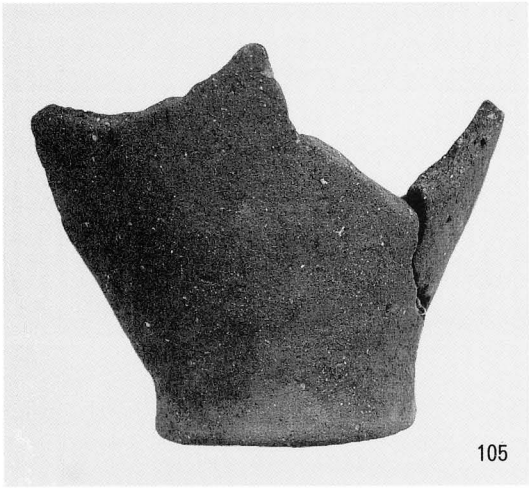


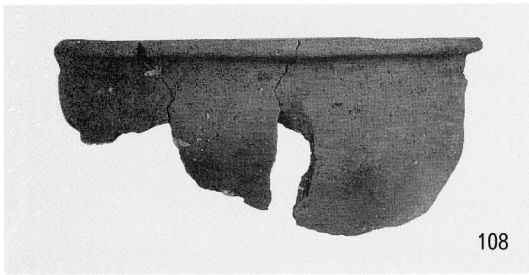


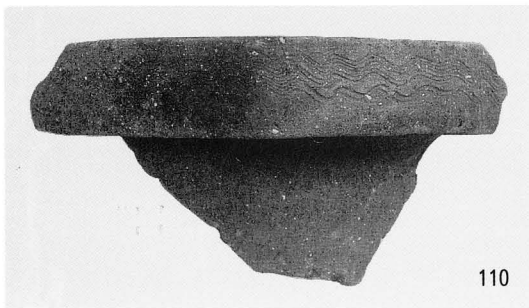
ＳＤ－２（90・91・93）ＳＤ－８（95）ＳＤ－10（97・98）ＳＤ－21（100・101）出土遺物

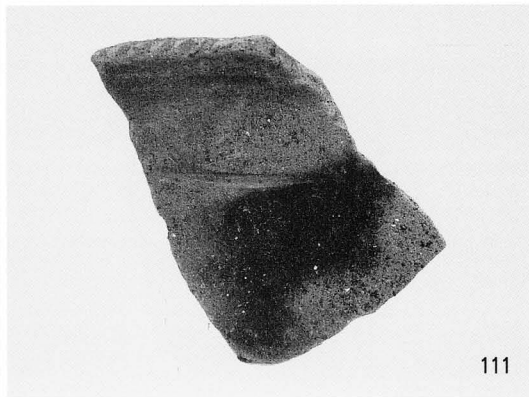




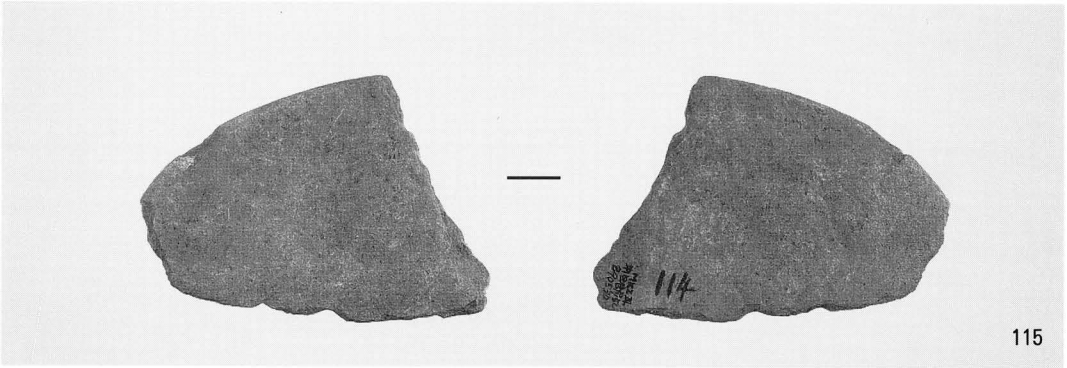


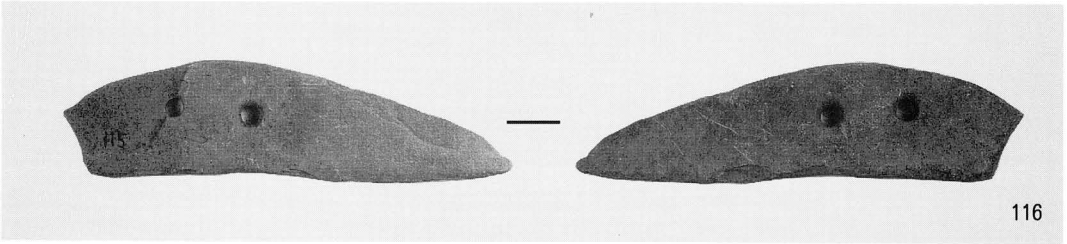


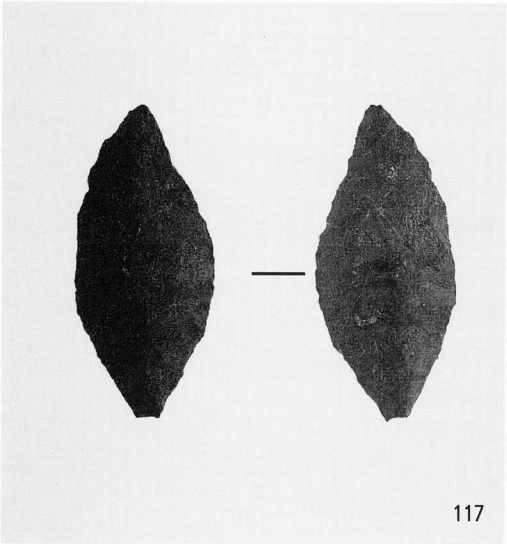




ＳＤ－22（103）ＳＤ－24（104～107）第1層（108・110・111）出土遺物







第1層（115～118）出土遺物

Ⅵ　水越遺跡第３次調査（ＭＫ89－３）

例　言

1．本書は、大阪府八尾市水越181番地に所在する八尾市立高安中学校で実施した屋内運動場建て替えに工事に伴う水越遺跡第３次発掘調査（ＭＫ89－３）の報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書（八教社文第埋143号　平成元年１月24日付）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成元年６月26日から７月19日にかけて、高萩千秋・青木勘時を担当者として実施した。調査面積は、約451.6㎡である。

1．内業整理は、調査に並行して随時行い、平成９年３月に終了した。

1．現地調査および内業整理に参加した調査補助員は以下のとおりである（五十音字順）。
岡田聖一・小椋(岩本)多貴子・亀田(村田)英子・市森千恵子・西岡千恵子・中村百合・中谷嘉多

1．方位は磁北である。図面の縮尺については、ことわりのないものに限り、遺構は100分の１、遺物は４分の１である。

本　文　目　次

第１章　はじめに ……157
第２章　調査概要 ……158
　第１節　調査の経過と方法 ……158
　第２節　基本層序 ……159
　第３節　検出遺構と出土遺物 ……159
　第４節　出土遺物観察表 ……165
第３章　まとめ ……168

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺図 ……157
第２図　基本層序柱状図 ……159
第３図　遺構平面図 ……160
第４図　ＮＲ－１出土遺物実測図１ ……162
第５図　ＮＲ－１出土遺物実測図２ ……163
第６図　ＮＲ－１出土遺物実測図３ ……164
第７図　遺構に伴わない出土遺物実測図 ……164

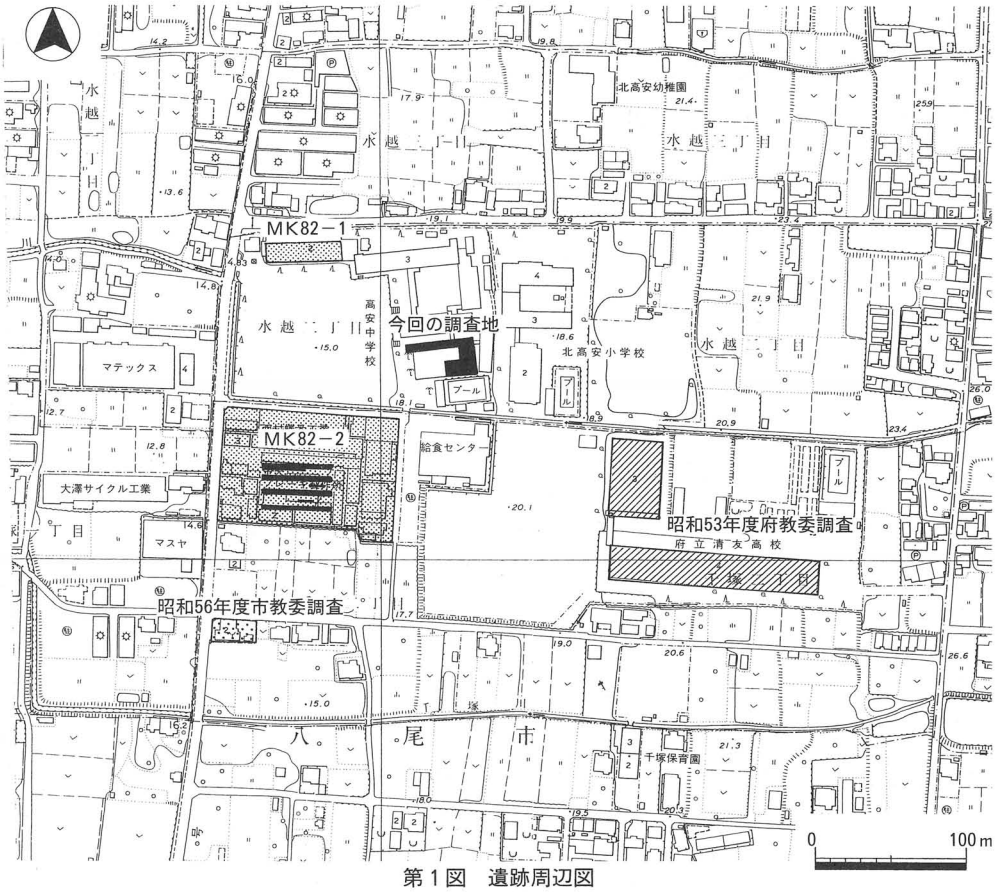
図　版　目　次

図版一　調査区東部（北から）
　　調査区西部（西から）
図版二　ＳＫ－１・ＳＫ－２（西から）
　　ＮＲ－１断面（東から）
図版三　出土遺物　ＮＲ－１
図版四　出土遺物　ＮＲ－１
図版五　出土遺物　ＮＲ－１
図版六　出土遺物　ＮＲ－１、包含層

第１章　はじめに

水越遺跡は、現在の行政区画では八尾市の北東部に所在する水越・千塚一帯に広がる縄文時代から中世に至る複合遺跡である。

当遺跡の地形は、生駒山地西麓の尾根から西に広がる扇状地の末端部（標高15～20ｍ）にあたり、南を千塚川、北を上代川の両谷川に挟まれ、東西に幾筋かみられる小高い丘陵地状に形成された上に立地する。西側には旧大和川の沖積作用によって堆積した低平地が広がっている。当遺跡と同一扇状地には、南に恩智遺跡、北に大竹遺跡・太田川遺跡・楽音寺遺跡・花岡山遺跡などの縄文時代（一部で旧石器を出土しているが不明）からはじまる遺跡が連接している。また、古墳時代に築造された墳墓が現在でも多数残存し、その景観が今なおみられる。例えば、前期では西の山古墳・向山古墳・花岡山古墳、中期では心合寺山古墳・鏡塚古墳・中谷山古墳、後期では郡川東塚古墳・郡川西塚古墳、終末期に入ると群集墳で知られる高安古墳群をはじめとし、生駒山地西麓には大県古墳群・平尾山古墳群・山畑古墳群などが存在する。



第１図　遺跡周辺図

当遺跡の契機は、大正９年に清原得巌氏がふとしたことから石鏃を採集したことがきっかけである。その後も遺跡の南部にあたる千塚区域を中心に各種石鏃をはじめ、滑石製小玉及び同質整管玉の未製品などが採集されており、これらを清原氏が所蔵していることが確認された。また昭和９年２月当遺跡内の西方を南北に通る旧東高野街道の道路改修工事が行われた。この時、当調査地（市立高安中学校）の西側の字一里外にあたる地点で掘削された際、その地表下約60㎝を測る土層（黒色土）内から弥生時代後期に比定される土器が発見されている。

その後、本格的な調査が実施されたのは、昭和53年度千塚地区内の府立清友高等学校新設工事に伴う発掘調査である。その調査の成果では縄文時代から鎌倉時代にいたる遺構・遺物が検出され、当遺跡に遺構の存在が確認された。さらにその後、当遺跡では現在（平成７年３月）までに４回の発掘調査（八尾市教育委員会１回・当調査研究会３回）が実施された。その結果、弥生時代中期の集落遺構をはじめ、縄文時代中期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出されている。

第２章　調査概要

第１節　調査の経過と方法

今回の調査地は、南北に通る旧東高野街道から東に入る式内社の玉祖神社へ参道「松の馬場」の接点で、この南東部にあたる水越181番地内に所在する市立高安中学校の敷地内である。調査は八尾市施設課の計画事業である体育館建て替え工事に伴うもので、当調査研究会が当遺跡内で実施した第３次調査にあたる。

調査区は、市立高安中学校の南東部の敷地内で旧体育館跡に新体育館を新築するものである。調査区の設定はその計画地内で建設基礎工事によって破壊される部分を対象としたが、既設（旧体育館）の基礎で破壊されている為、その部分は除外して設定することとなった。その結果、調査区は「逆Ｌ」字形で、東側に東西9.5ｍ、南北24.3ｍを測る調査区、この調査区の南西角から西に延びる幅3.5ｍ、長さ34.5ｍを測る調査区である。掘削については、八尾市教育委員会の試掘データに基づき、現地表下0.3ｍまでの機械掘削であったが、西側が深く落ち込んでおり、西部では最深約1.5ｍまで掘削した。また、東部では破壊されていない部分が若干残存しており、その部分については新たに追加して掘削した。

調査区の区割りは調査区の東部に任意の点を設定し、これを基点として調査区の方向に合わせて南北軸を設定した。そして調査区の東西50ｍ、南北30ｍの範囲に10ｍ方眼で区画した。区名は東西線が北から数字（１～５）、南北線は東からアルファベット（Ａ～Ｄ）を付称し、北西部から１Ａ～５Ｄ区と付して調査を進めた。なお、現地調査は平成元年度６月26日～７月19

日までの調査期間で、実働21日を要した。

第２節　基本層序

当調査区では現地表面から約2.7ｍまでに存在する土層内から普遍的にみられる６層を摘出して基本層序とした。現地表面は標高17.5ｍを測る。

第１層　盛土。層厚40～250㎝。当中学校の建設の際に整地された土層である。西側に行くに従い厚く堆積しており、西端で約250㎝を測る。また旧体育館の基礎部分は大きく攪乱されている。

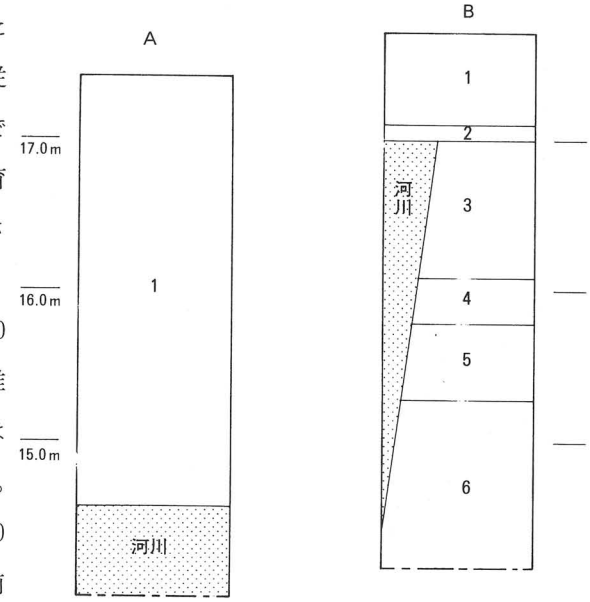
第２層　暗茶灰色細砂混粘土。層厚10～20㎝。この土層は近世の堆積で、東側にみられ、西側は造成によって削平されてない。

第３層　淡橙茶色粘質土。層厚60～80㎝。この上面から古墳時代前期の遺構が切り込んでいた。西部・南部の一部は攪乱されている。

第４層　青灰色細砂混粘質土。層厚20～30㎝。

第５層　暗青灰色細砂混粘質土。層厚20～30㎝。

第６層　黒灰色粘質土。層厚50～80㎝。



1．盛土
2．暗茶灰色細砂混粘土
3．淡橙茶色粘質土
4．青灰色細砂混粘質土
5．暗青灰色細砂混粘質土
6．黒灰色粘質土

第２図　基本層序柱状図

以上、当調査地内の層序である。このうち第３層上面が今回の調査面である。

第３節　検出遺構と出土遺物

第３層上面を調査対象面とした。調査区西部では削平されており、主に東側部分の調査となった。調査の結果、弥生時代後期の土坑２基、古墳時代前期に比定される自然河川１条、近世の畦を検出した。下層確認の調査では時期不明の自然河川と思われる砂層を確認した。

第３図　遺構平面図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

調査区中央部（３Ｃ区）で検出した。平面の形状は東西に長い楕円形を呈し、東西２ｍ、南北0.6ｍ、深さ15㎝を測る。断面は浅い逆台形を呈し、内部には暗茶褐色細砂混粘質土が堆積している。遺物は内部から弥生時代後期末（Ｖ様式）に比定される長頸壷の口縁部２片が出土した。

ＳＫ－２

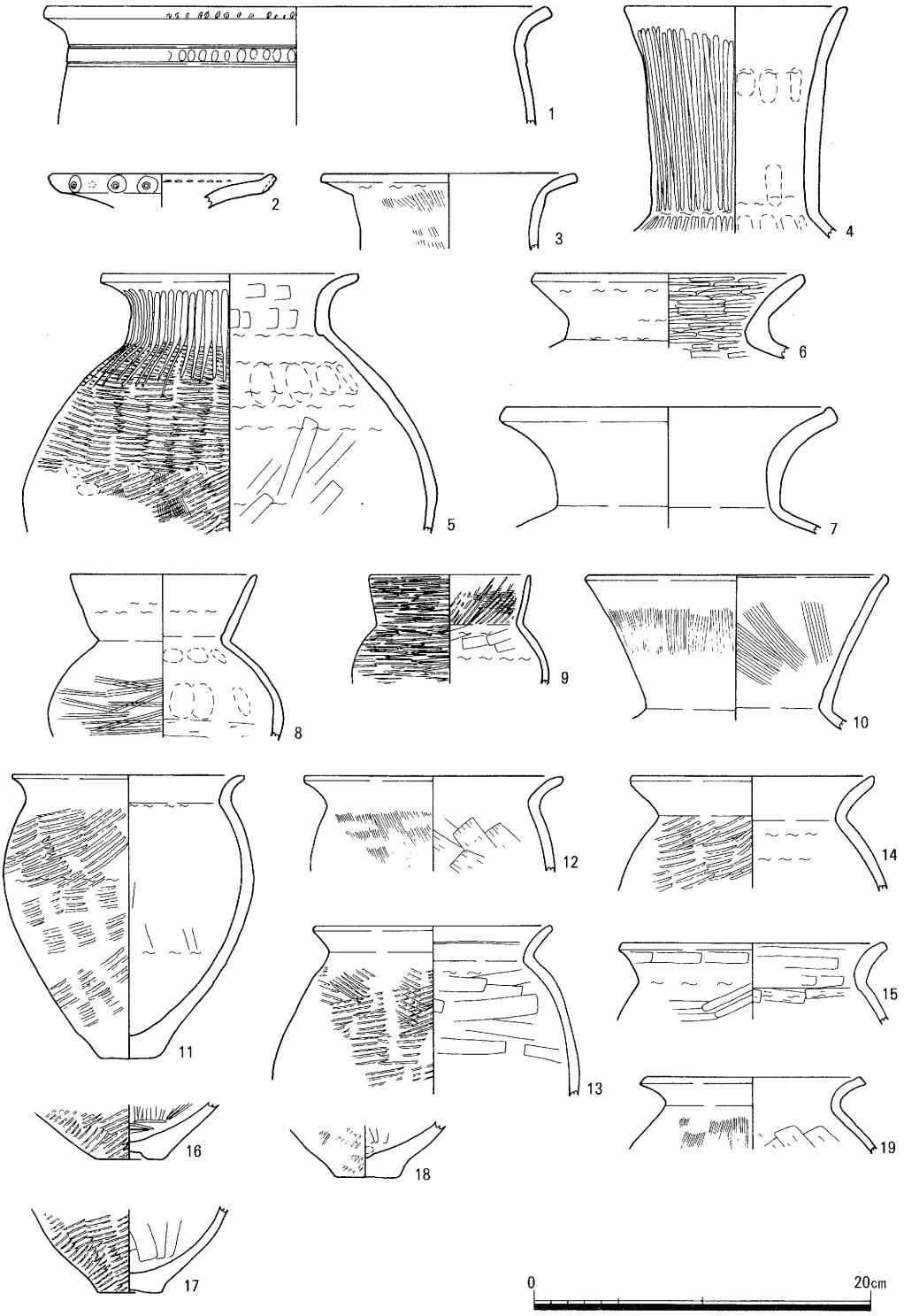
ＳＫ－１の東側隣接（３Ｃ区）で検出した。北部は近世の溝によって切られており、平面形状は検出部で半円形を呈している。規模は東西１ｍ、南北0.6ｍ、深さ15㎝を測る。断面は逆台形を呈し、内部には炭を少量含む淡灰褐色細砂混粘質土の一層が堆積している。遺物は出土していない。

河川（ＮＲ）

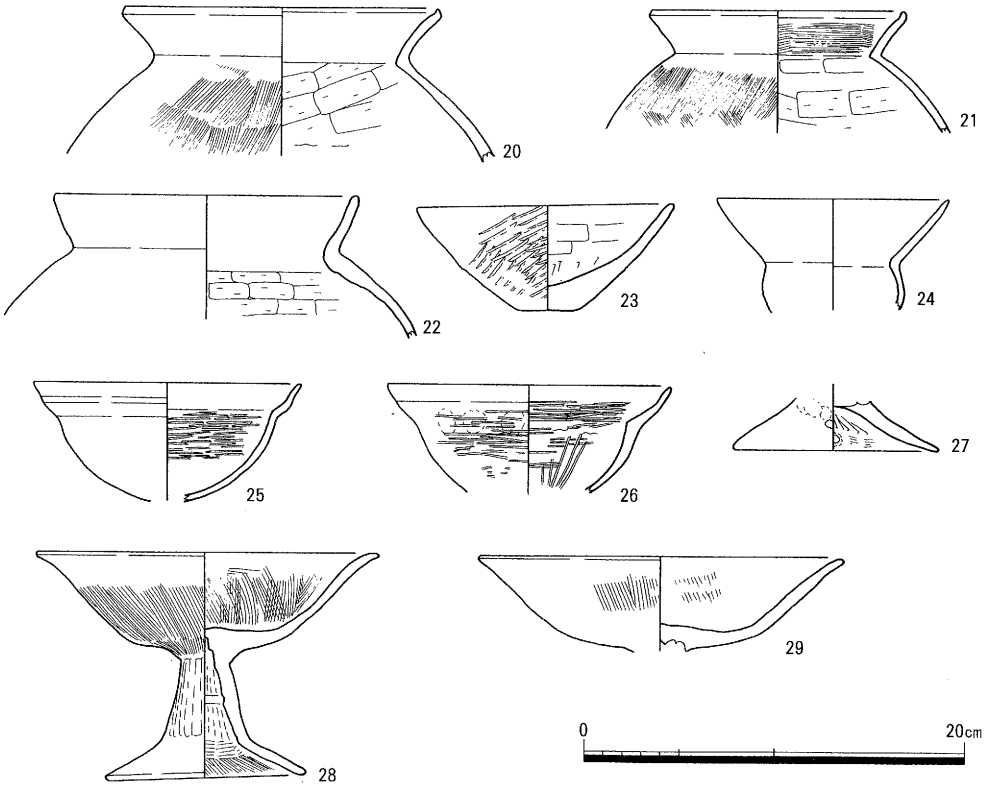
ＮＲ－１

調査区の北部で検出した自然河川跡で、東から西へ流れをもつものである。幅７～10ｍ、深さ3.5ｍを測り、断面は半円形を呈している。内部堆積土は砂礫を基調とし、その間にシルト及び粘土層が薄くサンド状に堆積している。底面付近では植物遺体が沈殿する黒灰褐色粘質土がみられ、緩やかな流れがあったことを示すものである。また、この堆積状況の観察から大きく３つに分けられ、大きな氾濫が３回以上あったことが窺える。最後の氾濫では河川から溢れた土砂（砂礫）が調査区の南東部にまで堆積しているのを検出した。遺物は河川の堆積（主に砂礫層）内から縄文時代晩期・弥生時代前期・弥生時代後期（Ｖ様式）～古墳時代前期（布留式新相）に比定される土器の破片が出土している。遺物量はコンテナにして約２箱分を数える。その中から図示できたものは40点である。第４図～第５図の１～29は河川の北部で出土したの遺物である。第６図の30～40は調査区南東部で検出した河川のオーバーフローした砂層内出土の遺物である。

河川の北部で検出した遺物は弥生時代前期新段階に比定される甕（１）、弥生時代後期末に比定される壺（２・３）・長頸壺（４）・壺（５～７）、古墳時代初頭に比定される壷（８～10）・Ｖ様式系の甕（11～18）・瀬戸内系の甕（19）・鉢（23）、庄内式新相の甕（20・21）、布留式新相の甕（22）・小型丸底壺（24）・鉢（25・26）・高坏（27～29）である。河川の縄文時代晩期の深鉢（30）、古墳時代前期に比定される壺（31～33）・小型丸底壺（34・35）・小型台付壺（36）・Ｖ様式系甕（37）、庄内式新相の甕（38・39）、布留式新相の高坏（40）である。



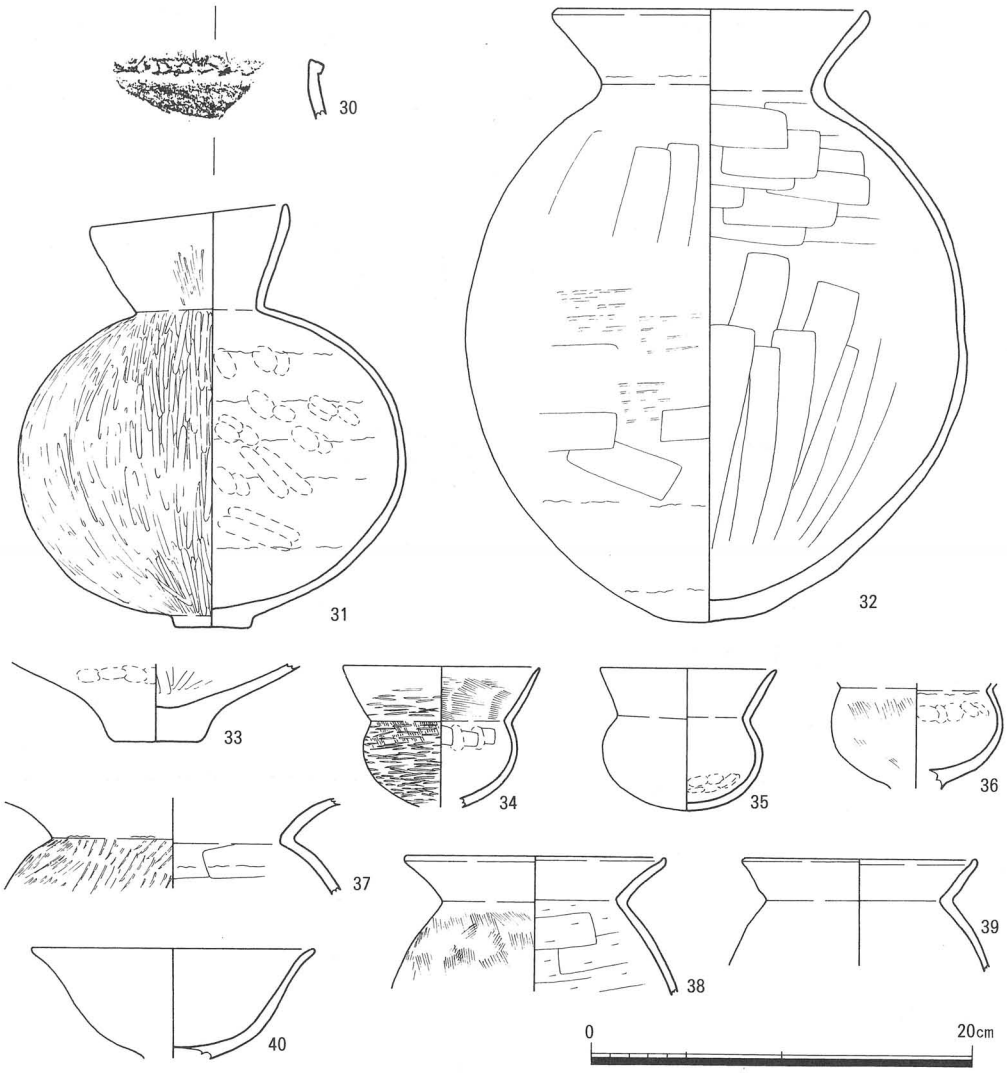
第４図　ＮＲ－１出土遺物実測図１



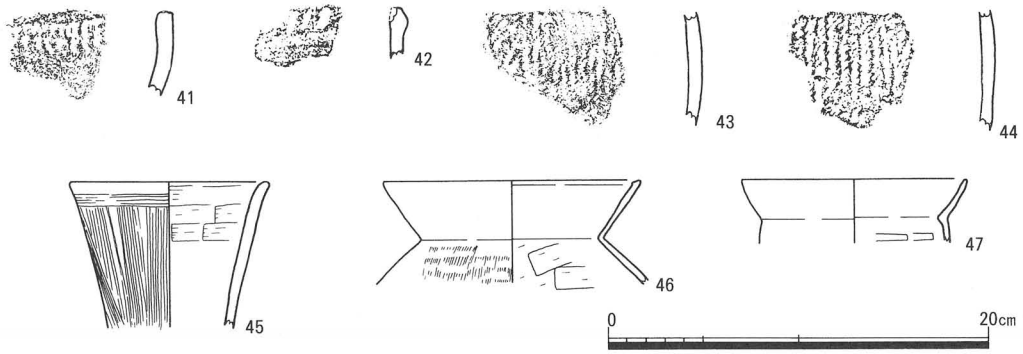
第５図　ＮＲ－１出土遺物実測図２

遺構に伴わない出土遺物

第２層～第６層から縄文時代～近世の遺物を少量出土している。縄文時代後期に比定される鉢形土器（41～44）、古墳時代前期（布留式古相）に比定される長頸壷（45）・甕（46）・小型丸底壺（47）である。



第６図　ＮＲ－１出土遺物実測図３



第７図　遺構に伴わない出土遺物実測図

第４節　出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種	法量（cm）　口径 器高	調整・技法の特徴	色　調	胎　土	焼成	残存量	備　考
1 三	甕 （土師器） ＮＲ－１	口径　29.8	口縁部外面ヨコナデで、端部キザミ目、体部外面ヨコナデ、二条の沈線の間に丸いヘラ状の押さえを有す。	外:乳灰茶色 内:暗灰茶色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・石英・赤褐色酸化粒）	良好	口縁1/5	
2 三	壺 （土師器） ＮＲ－１	口径　13.2	口縁上部外面ヨコナデ・円形浮文を有す、下部剥離の為調整不明瞭、内面ナデ、上部に円形圧文を有す。	茶褐色	5mm以下の砂粒を多量含む（雲母・長石）	良好	1/12	
3 三	同上	口径　15.0	口縁上部外面ヨコナデ・接合痕残存、下部ハケナデ（6本）、内面磨耗の為調整不明瞭。	乳橙色	5mm以下の砂粒を多量含む（赤褐色酸化粒・長石）	良好	1/6	
4 三	長頸壺 （土師器） ＮＲ－１	口径　13.2	口縁上部外面ヨコナデ、下部ヘラミガキ・接合痕残存、内面ナデ。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ・接合痕・指頭圧痕残存。	茶灰色	3mm以下の砂粒を多量含む（雲母・角閃石・長石）	良好	口縁1/4	1/4
5 三	壺 （土師器） ＮＲ－１	口径　15.2 体部最大径 24.8	口縁上部外面ヨコナデ、下部～体部上部ヘラナデ、他タタキ（4本）・接合痕・指頭圧痕残存。口縁部内面ヘラナデ、体部上部ナデ・接合痕・指頭圧痕残存、下部ナデ後板ナデ・接合痕残存。	外:茶褐色～茶灰色 内:灰茶色	6mm以下の砂粒を少量含む（長石・角閃石・雲母）	良好	1/2	煤付着
6 三	同上	口径　16.0	口縁部外面ナデ・接合痕残存、内面ヘラミガキ。体部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	茶褐色	6mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	1/4	煤付着
7 三	同上	口径　19.4	口縁端部外面ヨコナデ、他剥離の為調整不明瞭、内面ヨコナデ。体部内外面ともに剥離の為調整不明瞭。	茶褐灰色	4.5mm以下の砂粒を含む（赤褐色酸化粒・長石・雲母）	良好	1/5	
8	同上	口径　11.0	口縁部内外面ともにヨコナデ・接合痕残存。体部外面上部ヨコナデ、他ハケナデ、内面ナデ・指頭圧痕残存、下部ヘラケズリ。	茶灰色	6mm以下の砂粒を少量含む（雲母・長石・角閃石）	良好	1/2	煤付着
9 三	同上	口径　9.6	口縁部外面ヘラミガキ、内面ハケナデ後ヘラミガキ。体部外面ハケナデ後ヘラミガキ、内面ヘラナデ・接合痕残存。	淡褐灰色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石・赤褐色酸化粒）	良好	1/4	煤付着
10 三	同上	口径　17.6	口縁上部内外面ともにヨコナデ、中部外面ハケナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ、下部内外面ヨコナデ。体部外面ハケナデ、内面ヨコナデ。	暗茶灰色	3.5mm以下の砂粒を含む（長石・雲母）	良好	口縁完形	
11 三	甕 （土師器） ＮＲ－１	口径　13.8 器高　16.9 底径　3.4	口縁部外面ヨコナデ、内面板ナデ。体部外面タタキ（3本）・接合痕、内面ヘラナデ・ナデ・接合痕残存。	茶褐色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・赤褐色酸化粒）	良好	1/3	煤付着
12 四	同上	口径　15.2	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面ハケナデ（7本）、内面板ナデ。	茶灰色	8mm以下の砂粒を多量含む（長石・角閃石・雲母）	良好	口縁1/5	
13 四	同上	口径　14.0	口縁部内外面ともにナデ。体部外面タタキ(3本)、内面ヘラナデ・接合痕残存。	茶褐色	7mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	口縁完形	煤付着

遺物番号 図版番号	器　種	法量（cm） 口径 器高	調整・技法の特徴	色　調	胎　土	焼成	残存量	備　考
14 四	甕 （土師器） ＮＲ－１	口径　14.4	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面タタキ（3本）、内面ナデ・接合痕残存。	茶灰色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	1/4	
15 四	同上	口径　15.6	口縁上部外面ヘラナデ、下部ヨコナデ、内面ヘラナデ。体部外面ヘラナデ・接合痕残存、内面ヘラケズリ・接合痕残存。	茶灰色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	1/2	
16 四	同上	底径　3.8	体部外面タタキ（3本）、内面ヘラミガキ。	茶灰色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	底部完形	
17 四	同上	底径　3.8	体部外面タタキ（3本）、内面ヘラナデ。	外:茶灰色 内:暗灰茶色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	底部完形	黒斑有り
18 四	同上	底径　3.5	体部外面タタキ後ナデ、内面ヘラナデ、底面ナデ。	淡茶灰色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）	良好	底部完形	
19	甕 （土師器） ＮＲ－１上	口径　12.8	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面ハケナデ（7本）、内面上部ヨコナデ、他ヘラケズリ。	茶灰色	3mm以下の砂粒を含む（長石・雲母）	良好	1/9	
20 四	同上	口径　16.6	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面ハケナデ（7本）、内面ヘラケズリ・接合痕残存。	暗茶灰色	2mm以下の砂粒を含む（長石・雲母）	良好	1/5	
21 四	同上	口径　13.4	口縁部外面ヨコナデ、内面端部ヨコナデ、他ハケナデ（8本）。体部外面ハケナデ（7本）、内面ヘラナデ・ヘラケズリ。	淡褐灰色	5mm以下の砂粒を含む（長石・雲母）	良好	1/2	
22 四	同上	口径　15.8	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面剥離の為調整不明瞭、内面ヘラケズリ。	外:淡褐灰色 内:淡茶灰色	7mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	口縁1/4	
23 四	鉢 （土師器） ＮＲ－１上	口径　13.4 器高　5.6 底径　2.8	外面タタキ（2本）、内面ヘラナデ・ナデ。	茶褐色	3.5mm以下の砂粒を多量含む（角閃石・雲母・長石）	良好	3/5	
24	小型丸底壺 （土師器） ＮＲ－１上	口径　12.2	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面ヨコナデ、内面ナデ。	淡褐色	3mm以下の砂粒を含む（赤褐色酸化粒・長石）	良好	1/4	
25 四	鉢 （土師器） ＮＲ－１上	口径　14.2	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部上部外面ヨコナデ・他磨耗の為調整不明瞭、内面ヘラミガキ・ナデ。	淡灰褐色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・チャート）	良好	1/4	
26 五	同上	口径　15.0	口縁部内外面ともにヨコナデ・接合痕残存。体部内外面ともにヘラミガキ・接合痕残存。	茶褐色	1mm以下の砂粒を少量含む（長石）	良好	口縁1/8	黒斑有り
27 五	高坏 （土師器） ＮＲ－１上	底径　10.7	体部外面ハケナデ後ナデ・指頭圧痕残存、内面ヘラ押さえ・ハケナデ、内面上部にヘラによる十字の切り込みを有す、四方孔有す。	暗灰茶褐色	3mm以下の砂粒を微量含む（雲母・長石）	良好	脚部完形	
28 五	同上	口径　17.9 器高　12.1 底径　10.2	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面ハケナデ（上6本）（下８本）、内面ハケナデ（８本）・ナデ。柱状部外面ヘラナデ・接合痕、内面しぼり目。脚部外面ナデ、内面ハケナデ（6本）。	茶褐色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	1/2	煤付着

遺物番号 図版番号	器　種	法量　口径 （cm）　器高	調整・技法の特徴	色　調	胎　土	焼成	残存量	備　考
29	高坏 （土師器） ＮＲ－１上	口径　19.0	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部内外面ハケナデ（6本）。	淡灰茶褐色	5mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母）	良好	坏部1/2	黒斑有り
30 五	深鉢 （土師器） ＮＲ－１		外面端部～口縁キザミ目、他ナデ、内面ナデ。	暗灰褐色	3mm以下の砂粒を多量含む（長石・角閃石・雲母）	良好	一部	
31 五	壺 （土師器） ＮＲ－１	口径　10.2 底径　3.8 器高　22.6 最大径20.3	口縁部外面ヨコナデ後ヘラミガキ、内面ヨコナデ・接合痕残存。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ・接合痕・指頭圧痕残存。底部ナデ。	淡灰茶褐色	6mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母・角閃石）	良	完形	煤付着
32 五	同上	口径　16.0 器高　32.7 最大径26.2	口縁部外面ヨコナデ、内面剥離の為調整不明瞭。体部外面タタキ後ヘラナデ・接合痕、内面ヘラナデ。	外:乳黄灰茶色 内:乳灰茶色	5mm以下の砂粒を多量含む（長石・赤褐色酸化粒）	良	ほぼ完形	黒斑有り
33 五	同上	底径　4.2	内外面磨耗の為調整不明瞭、外面に指頭圧痕残存、内面にヘラ押さえ有り。	外:淡灰茶褐色～暗茶褐色 内:淡灰茶色	4mm以下の砂粒を多量含む（角閃石・長石・雲母）7mmの石一つ含む	良	底部完形	黒斑有り
34 五	小型丸底壺 （土師器） ＮＲ－１	口径　10.4	口縁部外面ヘラミガキ、内面ハケナデ（11本）。体部外面上部ハケナデ後ヘラミガキ、内面ヘラナデ・ナデ・指頭圧痕残存。	淡灰茶橙色	1mm以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母）	良好	1/8	
35 五	同上	口径　9.2 器高　7.5	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部内外面ともにナデ。内面に指頭圧痕残存。	淡灰明茶色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒）	良好	ほぼ完形	
36 五	小型台付壺 （土師器） ＮＲ－１	最大径9.0	体部外面ハケナデ、内面ナデ・接合痕・指頭圧痕残存。	乳灰茶色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母・赤褐色酸化粒）	良好	坏体部完形	
37	甕 （土師器） ＮＲ－１		口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面タタキ（3本）・接合痕残存、内面ヘラナデ・接合痕残存。	外:淡橙茶灰色 内:淡茶橙色～黄灰黒色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母・赤褐色酸化粒）	良	口縁1/8	
38 五	同上	口径　13.8	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面ハケナデ（10本）、内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	口縁1/4	煤付着
39 六	同上	口径　12.2	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面ハケナデ、内面剥離の為調整不明瞭。	外:淡茶灰色 内:明茶灰色	4mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒）	良	口縁1/4	煤付着
40	高坏 （土師器） ＮＲ－２	口径　14.8	内外面ともに磨耗の為調整不明瞭、内面一部にヨコナデ残存。	明茶橙色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）	良好	坏部1/2	
41 六	甕 （土師器） 包含層		口縁端部キザミ目、外面爪形文・？、内面ナデ。	外:淡灰茶褐色 内:乳茶灰色	4mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）	良好	一部	
42 六	鉢 （縄文土器） 包含層		内面ナデ、口縁部外面キザミ目、他ヨコナデ。	暗灰茶褐色	3mm以下の砂粒を少量含む（長石・角閃石・雲母）	良好	一部	
43 六	同上		外面縄目、内面ナデ。	淡灰橙茶色	2mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母・石英）	良好	一部	
44 六	同上		外面縄目、内面ナデ。	淡灰黄茶色	2mm以下の砂粒を多量含む（長石・雲母・石英）	良好	一部	

遺物番号 図版番号	器　種	法量　口径 (cm)　器高	調整・技法の特徴	色　調	胎　土	焼成	残存量	備　考
45	長頸壺 (土師器) 包含層	口径　10.4	口縁端部外面ヨコナデ・板ナデ・他ハケナデ（7本)、内面板ナデ・ナデ。	茶褐色	3mm以下の砂粒を少量含む（雲母・長石）	良好	口縁1/5	
46	甕 (土師器) 包含層	口径　13.6	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面磨耗の為調整不明瞭、内面ヘラケズリ。	茶褐灰色	1mm以下の砂粒を含む（長石）4mmの石一つ含む	良好	1/3	
47	壺 (土師器) 包含層	口径　11.8	口縁部内外面ともにヨコナデ。体部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。	淡橙灰色	2mm以下の砂粒を少量含む（長石・雲母。赤褐色酸化粒）	良好	1/4	

第3章　まとめ

今回の調査地は、市立高安中学校の敷地内の南東部にあたる旧体育館跡で、調査区の大部分が既往の基礎工事により削平を受けていた。調査では僅かに免れた部分及び旧体育館跡以外で、新設される体育館の基礎部分を対象とした調査であった。

調査の結果、縄文時代後期～古墳時代前期に至る遺物を含む自然河川跡、弥生時代後期末に比定される土坑が検出された。河川跡は生駒山西麓から西へ広がっている扇状地に形成されたもので、河川の断面や堆積状況から数回の大きな洪水にみまわれている様子が観察できた。また河川の深さからみて長期間の間、川としての機能があったと思われる。河川の機能が停止したのは最終的に古墳時代前期（布留式古相）ごろの洪水によるもので、調査区の南東部には河川から溢れ出た砂がみられた。

参考文献

・西村公助　1983「第2章　水越遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和56・57年度』（財）八尾市文化財調査研究会（財)八尾市文化財調査研究会報告3

・高萩千秋　1983「7．水越遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』（財）八尾市文化財調査研究会

・米田敏幸　1989「8．水越遺跡（63-196）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市教育委員会　八尾市文化財調査報告20　昭和63年度公共事業

・近江俊秀　1989「9．水越遺跡（63-354）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市教育委員会　八尾市文化財調査報告20　昭和63年度公共事業

・高萩千秋　1989「Ⅰ　水越遺跡（第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告－水越遺跡・竹渕遺跡・恩智遺跡－』(財)八尾市文化財調査研究会報告23

・西村公助　1990「8．水越遺跡（MK89-02)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告28　平成4年度公共事業

・吉田野々　1991「7．水越遺跡（90-559）の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会　八尾市文化財調査報告22

・高萩千秋　1992「31．水越遺跡第4次調査（MK91-04)」『平成3年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

・吉田野々　1994「15．水越遺跡（92-602）の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会　八尾市文化財調査報告29　平成5年度国庫補助事業

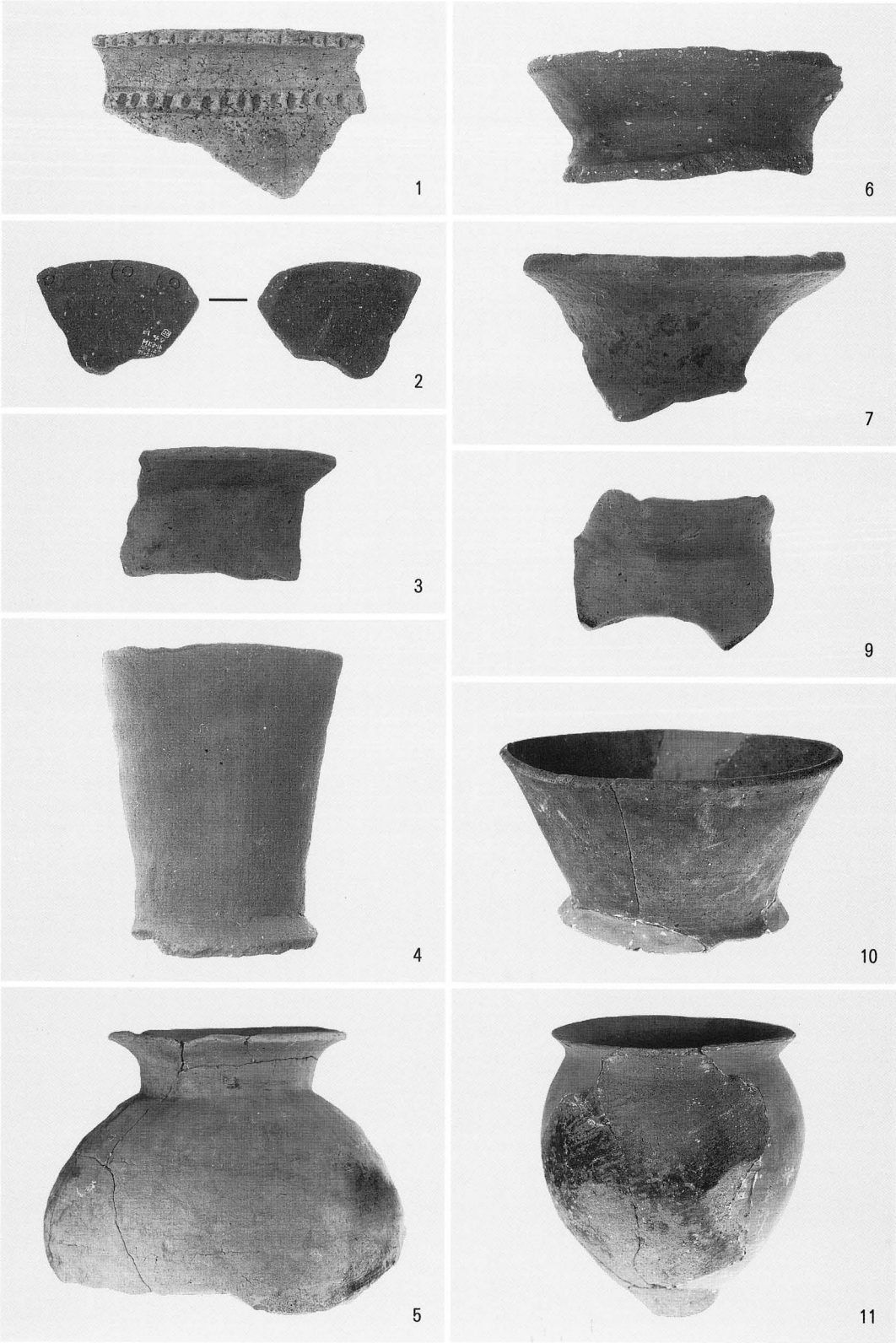
図　　版

調査区東部（北から）

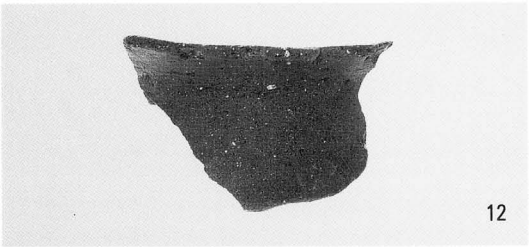
調査区西部（西から）

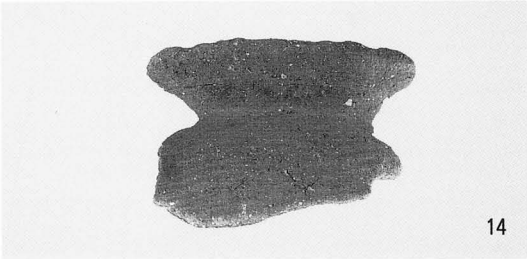
ＳＫ－１・ＳＫ－２（西から）

ＮＲ－１断面（東から）

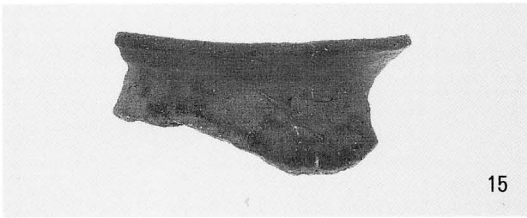


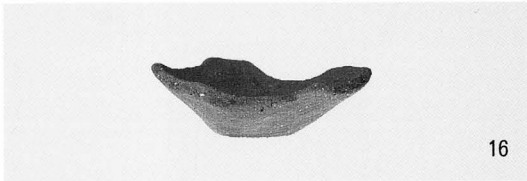
出土遺物　ＮＲ－１

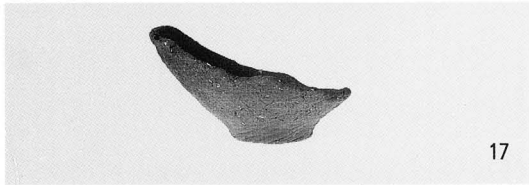

12

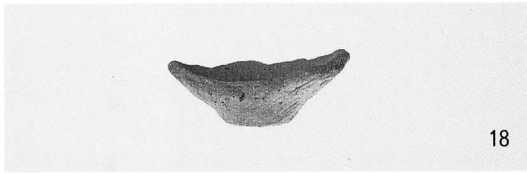

14

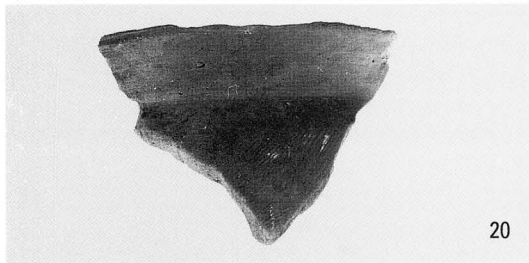
13

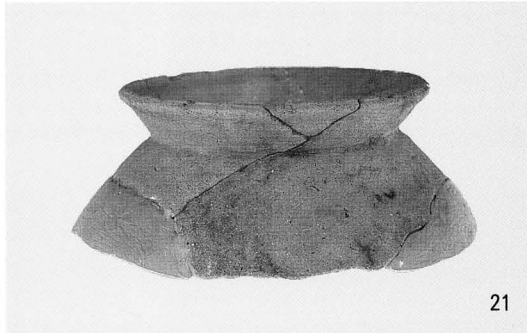

15

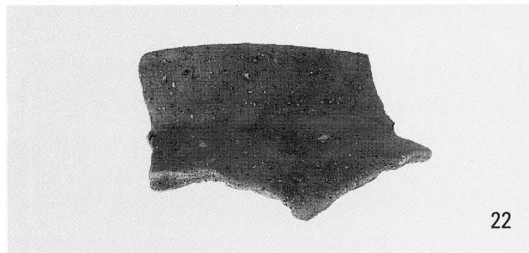

16

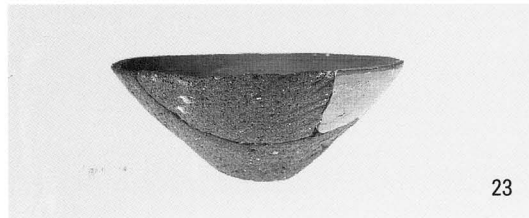

17

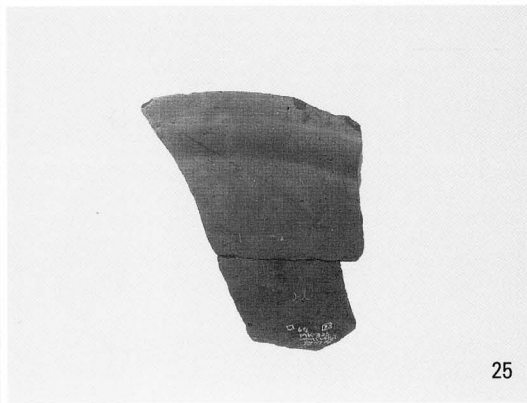

18


20

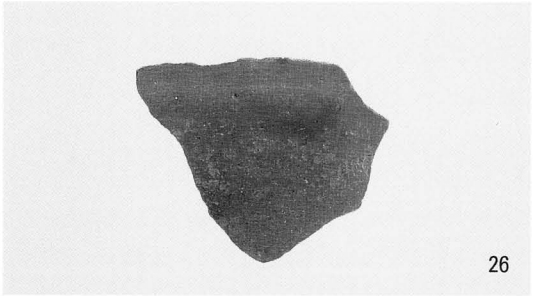

21

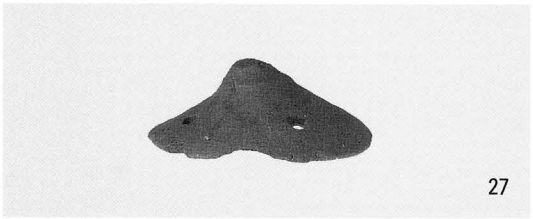

22


23

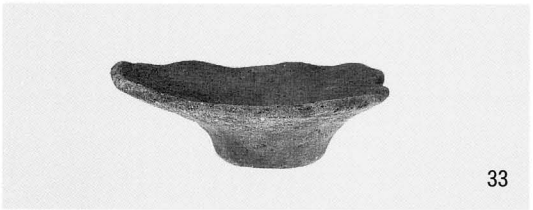

25

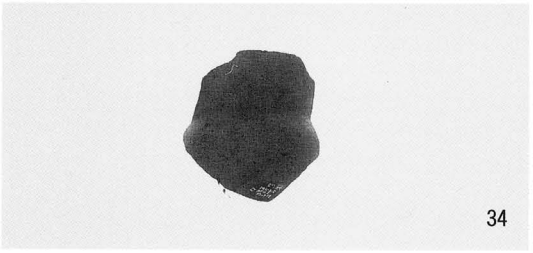
出土遺物　ＮＲ－１


26


27

31


33

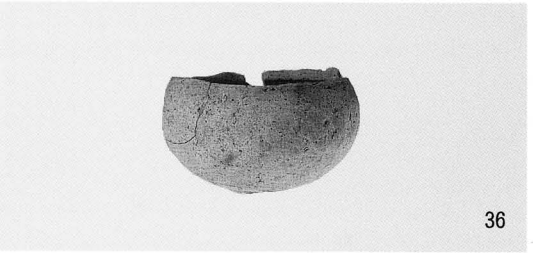

34

35

28

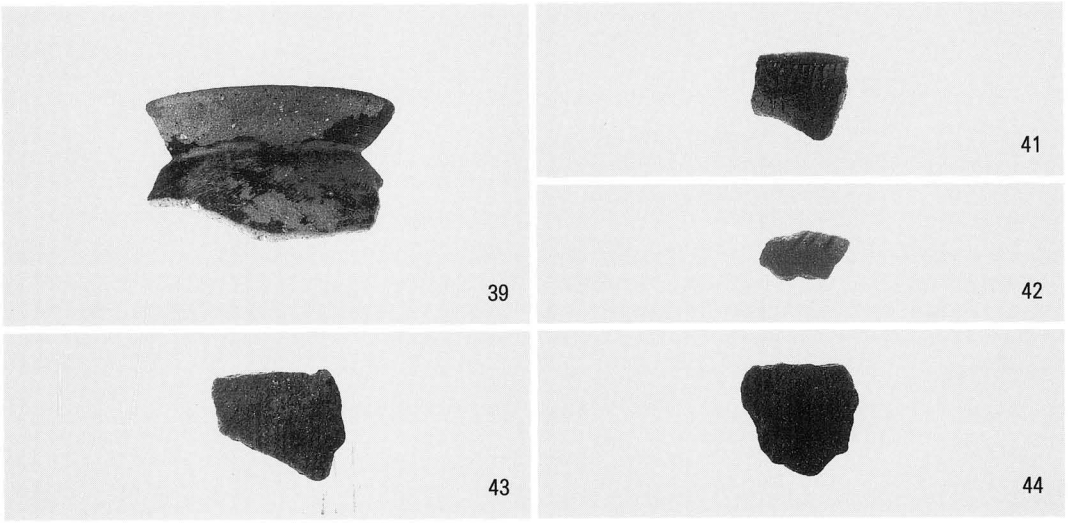
30

32


36

38

出土遺物　ＮＲ－１



出土遺物　ＮＲ－１（39）、包含層（41～44）

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく57
書名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告　57
副書名	Ⅰ　恩智遺跡（第７次調査）　Ⅱ　郡川遺跡（第１次調査）　Ⅲ　神宮寺遺跡（第１次調査） Ⅳ　花岡山遺跡（第２次調査）　Ⅴ　水越遺跡（第２次調査）　Ⅵ　水越遺跡（第３次調査）
巻次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会
シリーズ番号	57
編集者名	Ⅰ・Ⅳ　成海佳子　Ⅱ　原田昌則　Ⅲ　岡田清一　Ⅴ　西村公助　Ⅵ　高萩千秋
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581　八尾市幸町４－58－２
発行年月日	西暦１９９７年３月３１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おんぢ 恩智遺跡 （第７次調査）	やおしおんぢきたまち 八尾市恩智北町4－650	27212		34度 36分 25秒	135度 38分 6秒	19920609～ 19920807	860	屋内運動場建設に伴う発掘調査
こおりがわ 郡川遺跡 （第１次調査）	やおしくろだに 八尾市黒谷474	27212		34度 37分 1秒	135度 38分 27秒	19900206～ 19900213	60	河川改修工事に伴う発掘調査
じんぐうじ 神宮寺遺跡 （第１次調査）	やおしじんぐうじ 八尾市神宮寺5丁目179の一部・180	27212		34度 35分 55秒	135度 38分 6秒	19930426～ 19930527	320	共同住宅建設に伴う発掘調査
はなおかやま 花岡山遺跡 （第２次調査）	やおしおおあざがくおんじ 八尾市大字楽音寺637-1他	27212		34度 38分 19秒	135度 38分 59秒	19910703～ 19910724	200	学校施設建設に伴う発掘調査
みずこし 水越遺跡 （第２次調査）	やおしちづか 八尾市千塚170番地	27212		34度 37分 47秒	135度 38分 23秒	19890516～ 19890621	527	工場建設に伴う発掘調査
みずこし 水越遺跡 （第３次調査）	やおしみずこし 八尾市水越181番地	27212		34度 37分 45秒	135度 38分 21秒	19890626～ 19890719	451.6	体育館建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恩智遺跡 （第7次調査）	集落	平安時代	土坑７・小穴１・溝１	縄文土器～弥生土器・サヌガイト片	
		中世	井戸１・土坑９・溝２		
郡川遺跡 （第1次調査）	集落	古墳時代中期	溝２	須恵器・土師器・韓式系土器・ふいごの羽口・製塩土器・馬歯	
神宮寺遺跡 （第1次調査）	墓 集落	弥生時代中期	土器棺２・土坑７・溝６・小穴14・落込み２・河川１	弥生土器（Ⅳ・Ⅴ様式）・土師器・須恵器・埴輪・瓦器	
		古墳時代後期	土坑１・溝２・河川１		
		室町時代	井戸１・溝４・小穴４		
花岡山遺跡 （第2次調査）	集落	中世	土坑16・溝４・小穴15・落ち込み１	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦・鉄製品（刀子・釘）・宋銭（皇宋通宝－初鋳1039年）	
		近世	鋤溝17		
水越遺跡 （第2次調査）	集落	縄文時代中期	河川１	縄文土器 弥生土器（第Ⅲ様式）の壺・甕・鉢	弥生時代中期の環濠集落を検出した。
		弥生時代中期	竪穴３・井戸６・土坑14・小穴195・溝24		
		古墳時代前期	井戸１		
		中世	溝２		
水越遺跡 （第3次調査）	集落	弥生時代後期	土坑２	縄文土器・弥生土器（第Ⅴ様式） 布留式土器	
		古墳時代前期	河川１		

財団法人　八尾市文化財調査研究会報告57

Ⅰ　恩智遺跡（第7次調査）
Ⅱ　郡川遺跡（第1次調査）
Ⅲ　神宮寺遺跡（第1次調査）
Ⅳ　花岡山遺跡（第2次調査）
Ⅴ　水越遺跡（第2次調査）
Ⅵ　水越遺跡（第3次調査）

発　行　1997年3月31日

編　集　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581　大阪府八尾市幸町4丁目58－2
TEL 0729－94－4700

印　刷　明新印刷株式会社

表　紙　レザック66〈70kg〉
本　文　書籍用紙〈70kg〉
図　版　マットアート〈135kg〉